

---

# Blue Sky

レルミア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blue Sky

### 【Zコード】

Z2661X

### 【作者名】

レルニア

### 【あらすじ】

物語を、物語で終わらせる事に我慢がならなかつた人間の、反旗を翻した物語。

何故物語はそこで終わつたのか、その理由を突き止めるため、少年達は物語が終結する空へと飛び  
いや、世界の果てといつ空へと、跳ぶ。

## プロローグ

「おーいヤー坊よオ、ちょうど三つ作ってくれねーかア？」

無精ひげを生やした不快な人間が一人、戸を開けて家に入ってきたながらそんな事を言って依頼をしてくる。

「ヤー坊つて呼び方やめろつて言つてンだろ?」

自分でもわかる程に鼻に掛かつた氣だるげな声で答える。

「つつてもよお、もう三年もこの呼び方だろ? 一田一日で変えろつていわれてもよお」

とこりんどこり寝癖のようなものが立つ自分の髪をいじくりながら力ウントーへ出る。

「なんだっけちゅうちん? なんだってそんなものを」

ヤー坊と呼ばれた事に若干の不快感を覚えながら聞くと、田の前の無精ひげを生やした大野という人間は笑つて言つ。

「いや、そろそろ天賦祭だろ? それで使うちゅうちんが三つ壊れただんですよ、手先の器用なお前に頼みに、な」

天賦祭。

「まだその名前使つてんのかよ。それ日本語間違つてるつて

「つるせえなあ。シルヴァのお前にあわからねえだろけどな。日本語つてのはその場その場で意味が変わるんだよ」

「話題は変わるけどお前な、俺がいくら気にしないからつて元差別用語のシルヴァを平然と使うのはどうなんだ?」

ヤー坊・・・もといヤイナ・フレイニアという名前の少年が田の前の無精ひげを人間をたしなめるように言つ。

「あー・・・悪い悪い。あまりにもお前が気にしないし元差別用語つて事を忘れちまつてたわ」

「・・・まあいいけどよ。んで? なんで『こんな』時勢に天賦祭なんていうもんをやるんだ?」

「こんなときだからこそやるんだ奴? 」の戦乱の『』時勢だからこそや

パアーツと

「戦乱のじ時勢……つて。一応今は休戦してるんだろ?」

「さあなあ。どうせどっちもアルマの開発がおわりやまた始まるわ

戦乱。

アルマ。

全く嫌な時代になつたもんだ。

そこから唐突に回想に入りかけたところで田の前の馴染みの無精ひ  
げ・・・大野の声が響く。

「回想はまたの機会にしてくれよ。んで?作つてくれるのかくれないのか?」

「作つても良いけど、じいがどこだか分かつてゐんだろうな?」

「わあつてゐよ。ここは何でも屋だろ?」

「そう。じいは仕事を請ける代わりに報酬がないといけないんだよ。お前の貧相な財布には今いくら入つてるんだ?」

ヤイナに言われて大野はポケットから財布を取り出す。

見たところ大して膨らんでいないじいがまつたいらなので、あつても400円程度だらう。

「130円」

もつと少なかつたか・・・

「ちょうど三つで130円か」

「おうともさ」

誇らしげに言つうが、この値段はおかしいだろ?

「そういうなつて、馴染みのよしみでまけてくれよ」

「お前それでなくとももう五万前後の貸しが俺にあんのにまたまけ  
ろつてのか?」

「え? そんなにあつたつけか?」

「お前な・・・」

呆れて物も言えないとはまさにこのことだらう。

しかしこのまま黙つていては本當に130円でちょうど三つとう悲惨な事になりかね無い。

「まず材料費 자체がたっかいんだよ。分かってんだろう?」「材料費・・・いくらぐらい掛かるんだ?」

「ちゅうちん一個で大体・・・600円程度か?」

今の時代物価なんてものは簡単に上下するので確かな事を言えない  
ので最後に疑問符をつけて言つと、大野は財布を見ながら言つ。  
「そんなにするのか・・・つてことは手間賃入れて一個30円くら  
いか?」

「意味わからねえよなんて下がるんだよ」

「いやほら、そこはなんか時空超えて」

「そんな簡単に超えられる時空があるか!・・・たく。本当に1  
30円しかないのか?」

ヤイナがそう言つと、大野は再び財布に手を戻して苦虫を潰したよ  
うな顔になる。

「お前それ、今日の夕飯代すらねーじゃんか」

「せつかく現実逃避してたのにお前が現実を突きつけたせいでお金  
がなくなつたぞ。詫びとして二日分の飯を要求する」

「黙れアホ。祭りの用事でここに来たつて事は修繕費ぐらこ長老の  
ポケットマネーから出るだろ?」

「長老曰く、ヤイナなんぞに払つ金なんぞ無い。だとさ」

大野がそういうとしばらくの沈黙が流れた末に、ヤイナが顔を引き  
つらせて言つ。

「あのじじいわざとくたばらねえかな」

長めの髪をぐしごしと搔いて苦々しげに続ける。

「そもそも祭りの主催は誰なんだ? シアトルか?」

ヤイナがそういうと、大野は少し嘆息して答える。

「おめーよお、シアトルが主催してるんだつたら俺が加われるわけ  
がねえだろ?」

「まあそれもそつか」

ヤイナはそう言つて、この墮落した町にある唯一の学校を想つ。  
シアトルといつのはどいどいたの街から取つた名前らしいのだが、正直

由来はどうでもいいだらう。とにかく今は大きくなつて、小学から大学までありとあらゆる範囲で学生を取つてゐる学校となつてゐる。

そして俺と田の前の大野はその学校に通りとこう義務を果たさずにしてここにいるわけだ。

いや、義務・・・と言つては語弊があるかもしない。ただ単に通わないやつは白い目で見られるというだけの話だ。暗黙の了解とも言つだらう。

「あそこの委員長は苦手なんだよ・・・」

思い出したようにうめく大野の言い分は分からなくもない。シアトルの現委員会長たる霧島きりしま・峰は、泣く子も黙る鬼子として有名だ。

まあ、エピソードなんかは追々分かるだらう。

「峰はきつついからな・・・」

ヤイナもここだけは同意する。

しかし同意して思い出す。

こんな会話をしているとこつもあいつは「だあがきつこですつてえ？」そうこんな感じのドスの効いた声で乱入してくる・・・ん？ヤイナの回想に無理やりへってきた峰は、大野の後ろにあるドアを開けてその場に仁王立ちしている。

言わずもがな、背景には背若がくつきつと映つてゐる。

「あー・・・いや、なんでもないよなんでもない。ないよないない。

」

ヤイナが慌てて両手を振りながらそういふと、峰はフウ、と溜め息をついてカウンターに近づいてくる。・・・俗に言つ嫌な予感をともなつて。

「あなたに依頼があるのでだけれど」

ああ的中した。

心の中で悲痛な叫びを上げて、ヤイナは言つ。

「言つだけ言つてくれ」

「そ、う。じゃあ言わせてもらひつわ。あなたに不祥事を解決してもらいたいの」

峰の依頼を聞いて、雰囲気に呑まれていた大野は驚く。

不祥事って……暴力ごと、だよな。

心中でそう呟いて、とても戦闘タイプではないヤイナの体を見る。うん、やっぱり何度見直しても細っこい爪楊枝みたいな

「ジ

ロジロみてんじゃねえだあほ」

ヤイナの言葉で思考を強制的に中断されてしまうがしかし事実だろう。

「おれは暴力沙汰は嫌いなンだよ。残念だつたな、長老にでも泣き付けつて」

ヤイナが断ると、大野は心の中で頷く。

(まあ、だろうな)

しかし峰はここで引き下がらなかつた。

「報酬、がつづり出るといつたら?」

「いくらだ?」

「六万」

「よし乗つた」

あつさりと手のひら返しをするように依頼を受けるヤイナをみて大野は思つ。

(まあ・・・だろうな)

\* \* \* \*

「んで? 依頼つてのはなんなんだ?」

着替えもそこそこに、武器も何も持たずにヤイナは峰に聞く。

もちろん峰はこれから暴力沙汰のところに行こうといつとこつになんで手ぶらなのか、という事は質問済みだ。

ヤイナ曰く『重たいものなんざもちたかねえんだ』

「どうも、元日の国軍の重鎮がうちの馬鹿と賭け勝負してて、元軍

人のほうがイカサマして口喧嘩・・・そして学生の集まり▽S元軍人グループの暴力沙汰に・・・とまあそんな感じね

いやそれ明らかに一個人のヤイナに頼む依頼じやねえだろ。

その場にいた二人は心中で突つ込むが、峰は進退窮まった、といつた表情で言ひ。

「どうもその元軍人、ここいらでもともと幅をきかせてたみたいで・・・上も上手く動けないらしいの」

「つまり長老じきじきに俺に依頼が来たというわけか？」

ヤイナが嫌そうな顔をしてそういうと、峰は答える。

「まあ、そういうことね」

「一気にやる気が萎えたな・・・」

溜め息をつくが、ヤイナは「請けた仕事は仕方ない」と自分に言い聞かせるように言つてから峰に質問をする。

「んで？その元軍人と学生達のケンカってのはどこまでかい規模なんだ？流石にファーストとかがいるわけじゃないんだろう？」

ヤイナが軽い調子でファーストという単語を口にするのを聞いて、大野と峰は呆れたように嘆息する。

ファースト。

今となつては旧世代と呼ばれる第一世代～第三世代のアルマを操る人間の総称である。

何故ファーストと呼ばれるのか、という事については、一番だから、という訳ではない。

単純に次の世代の人間、セカンドが出てきたからだ。

セカンドと呼ばれる人間は、第四世代以降の革新型アルマと呼ばれる新機種を自在に操る事のできる人間の総称である。

現在軍隊はだいたいがセカンド、及びそれを支援するファーストで構成されているが、セカンドの軍的効果が絶大なために、性能の低い”欠陥品”と揶揄されるファーストは軍から弾かれ、辺境の地にいることは珍しくない。事実この下町にも元軍人のファーストは二桁はいるだろう。

しかしふァースト、及びセカンドは、世界を荒らした張本人だと世界から敵視され、辺境の地にいるファーストはその正体をひたすらに隠しながら生きている。

そしてそんな情勢のため、ファーストという単語を口にしただけで村八分にされる理由には十二分だ。

だからこそ、誰も口にしないのだが、ヤイナはそういうことを全く気にもせずに口にする。ただでさえ日の国だったこの下町を焼いたアルマ開発国の連合側の人間の姿をしてしているのにこんな事を言うもんだから、いつ路地裏で襲われるか気が気がでない。

困ったものだと言い、峰が何度か治そうかといろいろと試行錯誤したのだが、決まってヤイナはこう言ってその行為全てを跳ね除ける。『この世界が荒れたのを人のせいにするような奴に会わせるなんてこたあしたかねーよ』

余程そういう行動が嫌いなのか、ヤイナはこの話題になるたびに鋭い嫌な目をする。

この町では他人の過去など詮索するだけ野暮といわれてはいるが、彼についてはその過去を知つてみたいと、思う。

そんな風に思考の海に浸っている峰を見ている大野に、ヤイナが声をかけて意識をヤイナに向けさせる。

「んで?なんでお前が付いてくるんだ」

突然の質問・・・かどうかは分からぬが、とにかく話しかけられたので適当に答える。

「いや、何。この仕事手伝えば俺にも分け前が来るかなと思つて」  
適当に口から出たその答えは吉・・・だつたとは言ひがたいだろう。  
なにか下衆なものを見る目で委員長から見られたのはまあ、俺がそういう趣味を持つてれば別な話だが俺はノーマルなんで、凶だろうな。

そうしてしばらく歩いていると、次第にドンチャヤンといったまあ盛大に行われている乱知己騒ぎが眼下に広がる。

「こんな迷路みてえな街の滅多に拝めない太陽の下で喧嘩するたあ、

また面白い

ヤイナはそういうと今いる足場（屋根）から違う足場（屋根と屋根を結ぶ渡り廊下）へと飛び移り、その場にあるガラスの破片で渡り廊下の先にある屋根を叩いて盛大に音を鳴らして注意をそむける。

「オイおめーらあ。委員長がお怒りだぞ。お前等で怖いぞー。これ以上怖くなつて欲しくなかつたら今のうちにやめておいたらどうだ？」

そのヤイナの言葉に、それまでシアトルの学生という事を忘れていた子供達はハツと我に帰つて峰の姿を探す。

すると、屋根の上に乗つて逆光でシルエットだけだが、峰の姿が確認される。

その瞬間に、学生たちはそれまでの意氣揚々とした血の気の多い赤らんだ顔から一転、顔を真つ青にしてその場から立ち去つた。

学生だけならまだいい。

しかし、ヤイナ達が大げさに峰のことを吹聴していたために、その場にいた元軍人達ですら、転げまわるよつにして何処かへ行つてしまつた。

その様子を見届けてヤイナは元の足場へ戻り、満足げな顔をしていた。

「これにて一件落着、だろ？」

フン、という擬音でも出てきそうなほどに血漬けに胸をそらすヤイナは、ちらりと峰を見てその行為を後悔する。実際には自慢げな態度に怒つてゐる訳ではなかつたのだが、峰のその鬼の形相はとても筆舌に尽くしがたいものがあつた。

「私のうわさ・・・また広がりましたよね・・・?どうせ尾ひれつけて喋つたあなたですよね・・・?」

ザワツという背筋の寒気は当事者でない大野にすら走る。

「命で償え・・・!」

ダツと地面を蹴り上げて飛び上がつた峰を見て大野は思つ。

(こりゃヤ二坊の奴死んだかもなー・・・)

そんな平凡で平和な日常は、いつまで持つのか。  
心の隅ではいずれ来る戦闘への焦燥を抱いて、それでもそれを隠し  
ながら平凡に暮らす人々の姿だった。

## プロローグ（後書き）

ヤニ 煙草

ですよ

決して煙草坊主といつ意味しゃあつませんよ

「だから俺はんなこたしたくなえって言つてんだろ?」

語氣を荒立てるヤイナの前に、ヤイナをおとなしくさせようとして両手を上下に振る青い軍服・・・いや、ローブに身を包んだ一人の人間はなす術もなくその作業を進める。しかしそれは逆の方向へと作用し、余計にヤイナの精神をさかなる。

「だからもう一度言つや」

ヤイナが再び口を開いて口撃をはじめようとしたときに、ヤイナの家の玄関がゆっくりと開かれる。

突然のアポ無しの客は、少しだけ開いた戸の隙間から顔をのぞかせている。

その見慣れた姿はそり、

「似合わない事してねえでさつさと来いっつの」

ヤイナに促されて戸を開けて入ってきたその人物は長いボーネルをゆらゆら揺らすモデル体系の女史、霧島 峰 だつた。

「ほら客人だ。昔はともかく今はこれが本業なんもんでな、ひとつとと消える」

シッシッとヤイナに促されて外へ出ようとする青服とすれ違いざまに、霧島の記憶の隅で青服たちの姿が引っかかる。

(何処かで見たような・・・)

あともう少しで思い出せる。

そんなところだったのだが、ヤイナの言葉にその思考をせき止められる。

「ンで? 何の用だよ」

不機嫌そうに言つヤイナの姿からは、とても峰を歓迎しているように見えない。

とこづか先ほどの一人とやり取りがそれほどに嫌だったのだなう

か。

「話は一〇」

人間関係の事情なんでものを探るのはこの下町では野暮とされているのでそこそこに、ヤイナに本題を切り出した。

「一〇は、天賦祭の事。どう? 出場してみない?」

その勧誘を受けて、改めて天賦祭について思い出す。

天賦の才。

どうやらここから来ているようだ。

その通りに天賦祭は、様々な才能を試すところだ。

絵画の才能、作成の才能、足の速さの才能・・・そして、戦闘の才能。

いくつかの才能を競うものがあるが、やはり一番の田玉は戦闘の才能を競うトーナメントだろう。

いつの時代も、血が沸くような闘いは楽しいものだ。

ルールに守られているのであれば、の話ではあるけれど。

「でねえよ」

まだまだ色々と思い出すべき事項はあったのだが、そもそも出る気が皆無なヤイナにどうては思い出す意味もない。

「まあ、そうだろうね」

大して驚きもせずに、一本目の中指を立てて次の話題へ移る。

大して執心もないようなので、誰かに聞いてみてくれ、と頼まれることだろう。まあ頼んだ連中は大体の予想が付くが。

「最近不穏な連合国連中の話よ」

その予想外な言葉は、ヤイナの心境をいつそう悪くさせる。

(その話はさつきので十分だつのに・・・)

心中で呟くが、表だつてはシアトルが一番情報が速いといつことになっているので、一応知らなかつた、という風に頷いてみせるが、「そんな安い芝居しなくて良いわよ。知つてたんでしょ?」あつたりと見破られる。

「ま、その通りだけどね」

ヤイナもこれまたあつさつと認めた、峰はやれやれ、といった様子で首を振つて続ける。

「それなら話は早いのだけれど。どうも連合国がアルマの開発を終えていた・・・ってこういうわざが流れているわ

この話を聞くに、この下町をどちらの国にも属さない独立した地区にしたメンバーが確立した情報網は未だ機能しているということなのだろう。

開発を終えた云々なんていう国家機密に近い情報が簡単に漏れている連合国のはずそんな体制も寒気がするが。

と、じこまで考えて、思考を改める。

「罷？」

「え？」

突然もらしたヤイナの言葉に疑問符を浮かべるのも仕方ないだろう。思わず口にしたヤイナ自身でもうびうこう罷なのが、なんてことは見当も付かない。

「いや、忘れてくれ」

ヤイナはそう言って前言撤回を促すが、びくとも気になる。

嗅覚、のようなものなの・・・だらつか

ヤイナのその不安ともいえるその感情の元凶は、次の口の脣に正体を現す」ととなる。

\* \* \*

「ツヘヘー。じこが下町かよ。いいね古臭いね機械臭いねロマンがな  
いねえ！」

ドンーとこう音を立ててシアトルの中庭に降り立つ隻眼のシンシン頭の青年はうれしそうに声を張り上げる。

その異変は誰が最初に気付いた、とかではなく、一瞬で全校生徒が気付いた。

そして思い出す。

今日の朝に言つていた、委員長の峰の言葉を。

『どうも連合国が不穏な動きを見せているらしい』

しかし、中庭にいるのはどこからどう見ても日の國の人間だ。

黒髪に特徴的な釣り目。

金髪碧眼の人口比率が多いだけで、連合国にもこのような容姿の人間がないとは言い切れないのだが、そんな事よりもとにかく、その人間が異常だとシアトル生徒が確信した理由はただ一つ。異常なまでの着地の時の音と、そしてそこに広がるクレーターダ。およそ人間では耐えられない衝撃が生まれただろうに、そこにいる人間はどこ吹く風でテンション高く吼えている。

逃げる。

全生徒の共通の最優先事項として浮上したその三文字の通りに全校生徒は動く。

たつた一人を除いて。

「あなたは・・・敵ですか？味方ですか？」

ゆらり、とゆっくりめの歩調で中庭の男へ近づく。

その様子をみて男は一転して、視線を尖らせる。

「あん？おめえらが敵対行動を取るなら敵。とらねえなら味方だ」

男の言葉に、峰は再度質問をする。

「それならば質問を変えましょ。あなたの目的は？」

峰の質問に、男は少しためを作つて答えた。

「てめえら知ってるんだろお？」

「侵略だ！」

「ならば、敵ですね」

そういうが速く二人は地面を蹴つて駆け出した。

ヒュツと先に攻撃を仕掛けたのは、右拳を引き絞つた峰だった。

すれ違いざまに放たれた拳は常人には見えない速度で男へと襲い掛かる。

ゴウツというものはや拳の出せる効果音ではないものを放ちながら迫

る拳を見て、男は目を驚愕に見開く。

(こんな辺境な町にここまで身体能力者・・・つー天然物かつ！)峰に拳を突き出されるまでは大量にあつた余裕が消し飛んだ瞬間だつた。

ザツと土煙を巻き上げながら、10mほど離れた一人は動きを止める。

「何故攻撃しない？」

先ほどの敬語はどこぞへと消え去つていた峰の口調は鬼気迫るものがある。

「ハン、最初の一撃はサービスだよ」

男は内心冷や汗をかきながら苦し紛れに言つ。

「そうか、なら次は私も本氣でいこう」

その峰の言葉はとても疑えるものではなかつた。

何故か、といわれれば勘としか答えられないだらつ。

今は休戦状態ではあるが、近いうちに再開する第三次世界大戦を経験してきている男の本能が警鐘を鳴らす。

こいつは、化物だ。

ファーストの男は内心鳥肌を立たせる。

天然でセカンドクラスだとでも言つのか。

だとすればそれは。

新たな存在となる可能性が大いにある。

サード。

「畜生厄介な人間が居たもんだ・・・・かてねえぞこいつあ・・・」小さく漏らしたその言葉が、その男のその場における最後の言葉だつた。

「ウ、と爆音を響かせながら迫る拳を真正面から受けた男は、そのまま意識をブツリと途絶えさせた。

\*\*\*\*\*

「さつすがだな、委員長」

ヒュウ、と口笛を吹くヤイナは、シアトルに近い大きめの建物の一  
番高い屋根から中庭の戦闘を眺めていた。

手を出すつもりはないが、委員長の本気は見ておきたかった。  
これから先、ここは恐らく戦地になるだろうから。  
そんな事を思うが、実際この状態の俺は無力だ。

いや結構。

正直ここまでくるのにも息が上がる程だし。

「つたくいやつて程に体力ねえな・・・」

ハア、と吐き出した息は、白かつた。

そろそろ、冬が来る。

あの時と同じ、寒い冬にならないといいが。

ヤイナは脳裏にかつて死の冬と呼ばれた第三次世界大戦中の二度目の冬を思い出す。

アルマ技術を結集して作られたミサイル弾頭が日の国と連合国中枢の最も人数の多い都市に同時に落ちた冬。

あの時の謎は未だに残つたままだ。

そして恐らくこのなぞはもう・・・解かれることはないだろう。

ヤイナは心中でそう呟くと、大きく溜め息を吐いて立ち上がった。

\*\*\*\*\*

「おも・・・っ！」

ダメ元で頼んでみたというのがあるが、まさかここまでとは。

「それ一個運んだら休んで良いぞー」

大野が若干の呆れを含んでそういうと、ヤイナは顔をしかめて言つ。

「俺は肉体労働するなんてきいてねえぞ！」

心の中から悲痛な叫び声を上げるヤイナを見て、大野は思つ。

（こんな奴が本当に・・・ねえ）

心中で死の冬と呼ばれたときを思い起こす。

しかしそのときの映像が流れ始めた瞬間に、本能によつてその映像は遮断される。

どうもこの映像を思い出そうとすると反射神経のように集中が遮られる。

（思い出しちゃあいけない記憶・・・ってことかねえ）

大野が自分の行動に苦言を言つよう心の中で呟くと、背後で「ぬくヤイナ」へとちらりと視線を向ける。

映像は思い出せないが、名前は覚えている。

カエリス戦線。

かつて島の半分を消し飛ばした原因だとも言われている戦いの名前だ。

ここに

大野はいつものようにこれまで思考をめぐらせるが、これまたいつものように終わらせる。

考えるのは、苦手だ。

## 隠された爪

連合国側のファースト、ギリアが下町の委員長 霧島 峰 によって、  
撃破。

その二コースは一瞬で全世界へと広がつていった。

日の国は一つの二コースに驚き、更に一つの驚きを足した驚き異常に驚愕に目を丸くしたのが、連合国側だった。

「ファーストがノーマルに撃破された、だと？」

連合国側の軍部の幹部が目を丸くして報告官へ聞き返すと、報告官はうなずいて肯定する。

冗談ではない。

ファーストはもともと才能を持った人間を特殊なプログラムを通してその才能を更に高めた人間を指す。

このプログラムを通して才能が開花・・・というか無差別にプログラムを適用しているために才能が無いかどうかはプログラムの結果で分かるというだけで、才能があるかないかが事前に分かっているわけでもないのだが。

そしてノーマルは才能もない人間の集団。

そのはずだ。

しかし稀に、ごく稀に、プログラムを通さずにその才能を開花させる人間がいる。

稀に、というだけあって全世界で天然種と呼ばれるこのタイプの人間はこの疑いのある峰を除いて三人しか確認されていない。

一人は第三次世界大戦を休戦へ追いやった集団の名も知れぬ一人の男。恐らく現在も生きている。

そしてもう一人は今は亡きアルマ開発者・・・大野 恭介

もう一人は、カエリス戦線と呼ばれた、第四戦線の内でももつとも大きな戦いに参加して、命を落としたファリス。

三人は、ワールドランクと呼ばれる世界の人間の強さのランキング

の欄外として報告されている。

強すぎるがために、だ。

ワールドランク零。

確認されているのはまだこの三人だけなのだが。  
そこまで回想すると、ギリ、と奥歯を噛み締めていくつか悪態をついてから、報告官へ言つ。

「天然種……といふことで間違いなさそうだな。ならばこの天然種。開花するまえに薔薇は摘み取らねばならないだろう。下町は顔見知りでない人間が行くとすぐにばれるというではないか……全く田舎はやりすらくて叶わんない……報告官、いい潜入方法はしらぬか？」

幹部がそう聞くと、報告官は待つてましたといわんばかりに即座に答える。

「天賦祭、と呼ばれる祭りが三日後に。そのときに行われる武の分野というトーナメント式の闘いのサブイベントとして、委員対決戦が行われます」

「ほう、おあつらえ向きなものがあつたものだな。人の出入りが激しい上に暗殺がしやすい委員との戦いと来るか」

幹部の男はそう言って鼻で笑う。

「子供に現実を見せてやろう」

軍に逆らうなどどうなるか、見せてやろう。

\* \* \* \*

「はあ・・・はあ・・・」

ぐつたりとした様子でイスにへたり込むヤイナを見て峰は困ったような表情で言つ。

「全く・・・・・本当に体力無いのね？」

その言葉にヤイナは息も耐え耐えに言い返す。

「う・・・うるせえおれはインドア派だ・・・」

「ああ、うう」

ううですか、といわんばかりに投げやりな答えに若干の不満を覚えるが、ここで再び口を開くエネルギーすら残っていない。

そんなヤイナの様子をしばらく見ていて峰は思つ。

もしも

もしもヤイナにもつと体力・・・いや、戦闘能力があれば・・・峰はそこまで考えて、その考えを頭を振つて振り払つ。

ないものねだりはしても仕方ない。

今ある人材で、なんとか凌げれば。

峰はそこまで考へると、ヤイナの家を出るのに何も告げずに、何か思いつめたような表情でその場から立ち去つた。

「あん・・・・?」

す、と顔を上げたヤイナが不思議そうな顔をする。

幾分か祭りの準備のせいで体力がないので視力が落ちているのでなんとも言えないが、しかしあれはそれでもハッキリと分かるほどの物だった。

あの表情は

\* \* \* \*

「委員長、やはり副委員長が居ないと委員戦は・・・」

書記の男がそういうと、峰は顔をしかめて書記の男の言葉につなぐ。

「すまない、もう少し待つてくれないか」

さしづめ委員長モードと言つたところか、口調が変わる。

「副委員長は私と対等に戦えるほどでないと委員戦はダメなんだ」  
委員戦。

これはいつまでもシアトルに圧力をかけている口の国の提案した大  
会といづれの委員への別の形の圧力だ。

委員が勝てばその先もうシアトルへの圧力はかけない。が、委員が負ければシアトルはつぶれてもらう。

ハイリスクハイリターンとはよく言ったものだ。

かなり確率の低い賭けになるが、それこそ目に余るほど圧力と嫌がらせに比べればまだ・・・いいほうだらう。

死人が出るほどの日の国の執拗な圧力は既に過ぎた行為といえるほどのものではない。

殺しに来ている。

峰はそう思う事で危機管理状態を保っていた。

大抵の学生はおよそ平穏だと思っているのだろうが、この学校で起きる事故という事故が大体は日本の国に仕組まれた事であるということに気付くのにさして時間はかかるないだらう。

「くつ・・・・」

ギリ、と奥歯を噛み締めて今一度下町にいる人間の顔を思い出す。しかしいずれも自分とは対等に戦えるほどのものではない。

一度決まってしまえば一年は変えられない委員。

今ここで中途半端に決めてしまつわけにはいかない。

「何かいい手はないのか・・・つ！」

\* \* \* \*

「あン？」

見慣れない客に、ヤイナは顔をしかめて来客へ険悪な雰囲気を差し向ける。

その違った雰囲気に、温室育ちのシアトルの委員生は思わずたじろぐ。

「あ・・・えつと・・・ここは何でも屋・・・だよね？」

オドオドした喋り方に不満をいだきつつも一応応答してやる。

「ただけど」

応答といえるほど上等なものではなかつたけれど。

「一つ、依頼を……いいかな」

「あん？」

「副委員長に……なつてくれないかな」

書記のその言葉に、ヤイナは頭を抱える。

これで委員全員が同じ内容の依頼をしてきた事になる。

たつた一人委員長の峰を除いて。

その全てを拒否したつもりなのに、あらうじとかめげずに全員がヤイナへ依頼をするためにここを訪れた。

「しつこいな・・・お前等・・・」

「仕方ないじゃないか、委員戦で負けてしまえばシアトルが消えてしまつ！」

冷めたヤイナと違つて、熱を帯びたように書記が熱舌を尽くすがヤイナはその全てを聞き流している以上、ほとんど意味はないだろう。

「つてかよ」

ヤイナが呆れたように書記の演説をぶつたきつて言葉を続ける。

「お前等が依頼しにきてもどうせお前等金出せないだろ？親に金もらつて、シアトルの予算もろくに動かせないお前らに依頼の報酬は出せるのか？最低でも一年にわたつて付き合つてやる必要があるんだろ？だったらそれなりの金は必要だぜ？」

ヤイナのその言葉に一瞬詰まつて、書記は聞く。

「大体見積もつていくらなんだ？」

「まあ一ヶ月10万としても120万。これが最低値だな。仕事内容によつてレートは変わるんで詳しくかねえとなんとも言えないな」

ギ、ヒイスで船をこいで地面を軋ませるヤイナをみて、書記は激昂する。

「ふざけるな！お前には義理つてものがないのか！？」

ダン！と、書記が叫びながら思い切りカウンターへ拳を叩き付けた瞬間、書記の視界は反転した。

そして気付いたときにはヤイナに馬乗りに乗られて、喉元にナイフ

を突きつけられていた。

「ふざけるな？ 義理？ お前商売つて言葉しつてつか？ シアトルがどれだけ温室で、 どんだけ社会を知らせていないが知ったこっちゃないがな、 ここは社会なんだ、 金がないやつは客じゃねえんだ。 それにシアトルが消えようが何しようが俺には関係ねえよ。 力ないやつが吼えるな。 耳障りなんだよ」

ヤイナはそれだけ言うとナイフを腰に戻して軽くジャンプしてカウンターを飛び越し、 イスへと再び身を落ち着ける。

「さつさと出てつてビールハウスに居るよ、 温室野郎」  
キッとにらみつけられて逃げるよつとしてその場を去つた書記は、 歩きながら思つ。

さつきの俊敏な動きは一体。

悪びれる風でもなく、 書記の思考は続く。

およそ人間のできる動きではない。

本当に

本当に峰委員長の言つように彼は運動音痴なのか・・・？

そんなはずがあるわけ無い。

「じつこいつ」となんだ・・・？

理解が追いつかずについたため息と疑問の言葉は、 夕闇に消えていった。

## 再開する戦争

「ツハ！んな作戦ちまちまやつてられつかよお！あつてもセカンドだ。アルマ着てりやセカンド同士なら俺のほうが強いつてのは決まつてンだよ！」

「おいまつうわつ」

一人めのファーストの襲撃者と似たような風貌の男は、空中に浮ぶ空挺から一人飛び降りて下町へと降り立つた。

「ドゴン！」という音を立てて地面を抉りながら着地し、周囲を見渡すとそこには奇しくも一人目と同じ、シアトルの中庭だった。

「ツハア！ここかあシアトルつてえのはよお！」

男が大声で叫ぶと、次の瞬間には体に妙な雰囲気を持つた女性が一人、学校の一部から飛び降りてくる。

「貴様・・・連合国操縦者・・・だな？」

峰は機械の装甲に身を包んだ男を見て、さつきを伴つて言ひ。

「そおだよアルマ操縦者だ・・・セカンドだぜ？」

男がそういうと、峰の動きが一瞬止まる。

セカンド

軍部における最も強いといわれる分類の人間が、アルマを着て降りてくるとは。

「下町相手に大人気ないな・・・連合側も」

峰が言うと、男はケラケラと笑い、急に真顔になつて答えた。

「馬鹿言つんじゃねえよ。これは戦争だぜ？最初は遊びだったが一人ヤラレチマツタからな。こつちの被害は少ないほうがいいがそつちの被害は大きいほうがいい。だつたら派手にハジける事が出来るセカンド、その中でも広範囲攻撃を得意とする俺が出てくるのは当然だろ？お前だつて知つているはずだぜ？」

そう言って男が口にした名前は、その場に居た人間全員を凍りつかせた。

## ファー・メル・ハウンド

狂犬という異名を持つ彼は、連合国第五位の実力を持つ実力者だ。しかしその順位は彼にいたっては当てにならないと聞く。

狂犬たる異名を持つかれはその名の通り破壊を好む。

そのために対面を気にして五位以上にはなれないという噂も流れているほどだ。

といふか。

実は狂犬と言つ一つ名は第三次世界大戦前のものでしかない。

第三次世界大戦でさらにその狂気に磨きが掛かったファー・メルは狂犬という異名をもじり、最凶と呼ばれるようになった。

最 という文字がつく異名が付くのはこれで三人目だ。

最強  
最撃

## 最凶ファー・メル・ハウンド

実質世界で三位の異名を持つ彼はあまりにも、峰の手には負えないものだった。

\* \* \* \*

二十分後、無傷で息も整つていて一步も動いておらず汗一つかいていない最凶の前に、ボロ雑巾のように服がずたずたに引き裂かれ、体の各所から血を流す峰が倒れていた。

「なんだよ天然種のセカンドって言われてきたのによお、ンだよもしかしたらこいつファーストクラスなんじゃねえの？」

最凶はそう言って初めて足を踏み出して峰の側へと歩み寄つて腹部へと蹴りを入れる。

げふ、と口から血を流して2m程転がって、峰は止まる。

「おいおいもう終わりか？俺に一撃も加えないで終わりかよ・・・まあ良いぜ、どうせ死ぬのが速いか遅いかのちがいだつたんだ、ここで消えておけ」

最凶はそう言つて、腰から初めて武器たる拳銃を引き抜く。ガシュン、と間接から排氣音を響かせて銃を構えると、最凶は悔しげに最凶を見上げる峰の眉間めがけて、引き金を引いた。

パン

と乾いた音がした次の瞬間。

キン

とこう不可解な音がする。

最凶はここで一瞬、まさか峰は金属生命体だったのかなどと馬鹿な考えが浮んだが、すぐにそれを払拭して後ろへ後ずさる。初めての回避行動だつた。

「なん・・・」

先ほどまでの余裕の表情は消え、何故か土煙が立っている峰の体があるところへ目を凝らす。

するとその土煙の中から何者かの声が聞えた。

「ハン、弱いものいじめして鼻高々つてか？」

鼻にかかるたその喋り方は何処かで・・・いや、何処かで聞いたことがあるというものではない。

実際最凶のこの喋り方は、今の声を真似しているものだ。しかし。憧れのその相手は死んでいるはず

「雑魚みてえな事やつてンじゃねえよ、ド三流」

土煙が消えたそこには、金髪金眼の整った顔をした男が居た。

そして同時に最凶は安堵する。

あの人人が相手ならばすぐさま退散しなければいけないとこらだつた。しかしここいつは違う。

最凶は心の中で安堵して先ほどとは違つて巨大な銃をどこからともなく出現させる。

「ツハ！減らず口もたいがいに吹き飛べよ！自称いちりゅ

いつものように眼前の建物が全て消え去るはずだった。

しかし今回は違つた。

何が、といえば一つだろつ。

敵が、だ。

「なあに言つてんだ？お前」

その声は背後から聞こえる。

「こんな動きにも付いて来れてねえ時点で最凶なんて名乗つてんじやねえよ」

嘲笑に似た声色を含むその声はまだ続く。

「だいたい、俺が違う奴だと思つて姿をみて安堵しちだろ？」

その時点での狂気なんてお前には名乗れねえよ

「消えうせり」

ヤイナはそう言つと、右拳に透明の膜を張つて、思い切り引き絞る。「サービスだ。お前の國へ送り返してやるよ」

「まさかお前・・・ウイザ」

最凶と呼ばれる男の言葉を聞かずに、ヤイナはにやりと笑つて引き絞つた右拳を思い切り突き出した。

ドゴッという鈍い音を響かせて吹き飛んでいく最凶と呼ばれた男は瞬く間に視界から消えていった。

そして吹き荒む風の中、ファーメル・ハウンドが吹き飛んで行った方向を見てヤイナは言った。

「狂犬？ハツ馬鹿かよ。噛ませ犬の間違いだろ？」

\*\*\*\*\*

「ん・・・？」

峰が目を覚ますと、自分の体には完璧ともいえるほどに丁寧な応急処置が施されていた。

「まあそれはいい」

峰はそういうて、まだ混乱が収まらない頭をフル回転させて状況を整理しようとする。

（昨日・・・いや、いつの事だかは分からぬけど最凶と呼ばれる

人間が襲つてきて？それでボコボコにやられて……最後にとびめ、  
といふところでヤイナがかばってくれて……それで最凶をあつさ  
りと一撃で吹き飛ばし……た）

峰は自分でそう思つて、にわかに信じられないと溜め息をつく。  
もし昨日見たあれが事実だとしたら……といふか傷がある時点で  
事実なんだろうが。

吹き飛ばされ際に最凶が放つた言葉『ウイザード』から察す  
るに、ヤイナは全世界に六人しか居ないウイザードと呼ばれるこの  
下町を確立したメンバーの一人で、そして今までの体力のない云々<sup>トコトコ</sup>  
は全て……演技だということか

その仮説であつてほしいと願う仮説をたてて、峰は溜め息をつく。  
するとその溜め息と同じタイミングでギイ、と部屋の扉が開く。  
誰だ？と疑問に思いながら右側に見える扉を見ると、そこから現れ  
たのは粥を持つたいつものように氣だるげなヤイナだった。

「よお起きた……か……」

途中で何故か動きを止めて口詰まるヤイナを見て一瞬疑問に思った  
が、今の自分は……まあ自分で言つのもなんだが凹凸の激しいす  
べてが包帯で覆われているだけで、言つてみれば下着を着ているだ  
けの状態だという事で、それはつまり裸同然だということ。  
ガバッと体から走る痛みを省みず布団を引き上げて体に巻きつけ  
ると、目をグッと閉じてそっぽを向いているヤイナに声をかける。

「じめん、いいよ」

峰がそういうと、ヤイナはゆっくりと目を開けてこちらへ歩み寄つ  
てくる。

「つたくなんて格好してんだよ……」

ヤイナが呆れながらそう言つてベットに備え付けられたテーブルに  
粥を置いて、そばのイスに腰掛ける。

「どうだ？ 傷、まだ痛むか？」

ヤイナが峰に聞くと、峰はゆっくりと両手を上げようと試みるが、  
2cmと動かせない。

さっきは慌てて気付かなかつたのか、かなり痛みが走つてただろう。  
というか傷開いてないだろうか。

そんな事を気にして腕の包帯を見ても血が滲んでいるわけでもないので開いてないようだ。

「この処置は・・・ヤイナが?」

峰が聞くと、ヤイナは首を振る。

「いーや。流石に俺にお前を脱がす度胸は無かつた」

ヤイナはそう言って、シアトルの保険委員に任せたと続けた。

「ああ・・・ありがとうございます」

とりあえず応急処置の段取りを取つてくれた事に感謝して、二回は

「いたと體ぐと やいなは陰で

「これは俺の家だよ、別に遠いところでも良かってなんだけどな面倒は事こ俺の戯闘を見てたやつがいて、お前が怪我してるのでいい

「俺のところに匿つてゐるわけだ」

ヤイナは面倒そうに言つて、峰に聞いた。

勝  
重力なしの力

ヤイナがそういうと、峰は恥ずかしそうにうなずく。

をあけるよしつ促す。

井原か

まさかあの恋人がやるような恥ずかしい行為をやるといふのか！？

事かヤイナはその口にスプーンを持つていくでもなく、器自体を傾けて差し入れようとした。

ちょっとまで、と峰が言いかけた次の瞬間に、バタン！と部屋の扉が開いた。

まさに峰が言おうとした言葉を心の限りに叫んだその闖入者は大野だった。

「そこはスプーンで持つてあーん！あーん！だろ！おいやイナ  
てめえ分かつてやつてんのか委員長の珍しいしおらしい姿なんだ  
ぞもつと辱めてやればいいんだよ！」

中断させてくれたのはありがたいが後半は限りなく歓迎できないぞ。  
心の中で反抗する峰をよそに、ヤイナは答える。

「いやだつていちいちスプーンですくうなんて面倒だし、別によく  
ね？」

そう言つて再び器を傾けるヤイナをみて、大野は慌てて止めに入る。  
「ま、まあ落ち着け、確かにだ、確かに面倒だけどな？お前ちよ  
とそれ人の道外れてるぞ重度のけが人に熱い粥を問答無用で口に流  
しこむ外道がどこにいるんだ」

大野がそういうと、ヤイナは当然のよつに答える。

「いや、ここに」

「ああもうそういうと思つたよチクショウ！」

残念ながら私も思つた。

変な意味で信頼されているヤイナに呆れて、峰は傷む腕を無視して  
器を奪い取る。

「自分で食べる」

峰はそういうと、さらに腕を酷使してスプーンを持とうとするのだが、  
それをヤイナが止める。

「まあ、スプーンで口に持つてきて欲しいならやるがね」

ヤイナはそう言つてスプーンを手に持つ。

「照れ隠しだつたんだろうせ・・・つたく最初からそつしりよつ  
んで「グハッ」

まあ、ここは追求したらまずい場面だろ。

結果として大野が地面で悶えているといつことだけ伝えておく。  
ヤイナが顔を赤くしてなんて伝えたくないし。

そんな事を思つてアーンという恥ずかしい極まりない事をしてもら  
つているという事実を頭の隅に追いやり、五口田といつところにな  
つて大野が元気を取り戻して言つ。

「そりいえばヤイナに伝言だ」

大野に言われて、ヤイナは顔をしかめて答える。

「誰だれからだ？」

「なんか青いローブ着た胡散臭い連中」

「第三次世界大戦。再開だつてよ」

大野がサラリと/orその言葉に、一瞬で部屋の空気が凍るが、すぐにその凍った空気は大野のコメントで溶ける事となつた。

「にしたつてお前等・・・主に峰の放つ甘甘オーラが果てしなく俺をイラつかせるわけなんだ」

大野はさう言つてすかずかと部屋の出口へ歩いていき最後に一言「もげる」

とだけ言つて部屋から出て行つた大野を見てから、ヤイナはボソリと呟いた。

「田の国へ・・・行く必要があるか」

## 学生（前書き）

同じ物語です。決して別の作品を投稿してしまったとかそういうわけではありませんよ

「・・・ふう」

重たい頭を持ち上げてベットからぬづくと起きてうつすらと差し込む太陽の光を全身に浴びるためにベットの横にあるカーテンを勢い良く開けると、そこには真っ青な空が浮かび上がっていた。はつきりと開けない畠をこすつてみると、一階のコンビングから聞きたれた声が聞える。

「おーい、じはんー」

ハスキーなこの声は聞き覚えがある。

「つたく今日の朝はいらないつて言つておいたのに・・・」小さくそうこぼすが、作つてもらつてしまつたなら食べるしかないだろう。食材の問題的に。

自分で自分に言い訳をして階段をおりていくと、セイにはいつも馴染みの顔があった。

「おそいよー？学校遅れちゃうつてば」

普通のポニーtailではなく、首筋あたりで黒い髪を縛つた整った顔の幼馴染の彼女は才色兼備で剣道では全国一位にすらなつてしまふ所謂エリートといつやつだ。

対して自分はさえない顔に何一つ秀でた能力もない。卑屈になるなというほうが無理だ。

「今日はいらっしゃって言つてなかつたつけ？」

ぶつぶつと文句を言つてリビングのテーブルにつく。

朝食は日本人らしい焼き魚に米。

テンプレートと言つてもいいがシンプルイズベストなんてことも言うしメニューに関しては申し分ないだろう。

そんな事を思つてゐるうちに畠の前に並んでいた料理がなくなつて、準備も終わり、いや学校へ出発、と意気込んで玄関を開けるとひんやりとした空気が肺を満たすように体へ入つてくる。

「冬だなあ」

スウ、と深呼吸をして一人呟くと、隣に並んでいる幼馴染がそうね、  
と言つて同じように深呼吸をする。

「じゃ、行きますか」

「うん」

二人はそう言つと、学生カバンを持ち上げて学校へと歩みを進める。  
するとのもの十数分歩いただけで、友達の一人と出会い。

「よーう、元気してるか夫婦漫才コンビ」

背後から聞こえてくる元気な女の声はこれまで学校で優秀な体育成  
績を収める人間だ。

「だれが夫婦漫才コンビじや 阿呆」

毎度のように言い返すと、これまた毎度のよにじめんじめん、と  
言つて自分と幼馴染の二人の横に並ぶ。

「んで? アキ、アンタ今日びうなのよ、開始のテスト勉強やつてき  
た?」

活発そうなショートカットの女性に、一言田から嫌な言葉を言われ  
る。

「全くしてねえわ・・・」

アキと呼ばれた俺・・・廣瀬輝通称アキは溜め息をついてうなだれ  
る。

それを見て幼馴染の宮ルイは呆れて溜め息をついてポニー テイルを  
揺らし、活発そうな通称ココと呼ばれる彼女は笑つている。

「さつすがアンタね! 勉強のべの字も知らないでしょ!」

ケラケラと笑い転げるココにうるせえと言つて一蹴する。

そんなやり取りをしているうちに、ひとつひとつ学校が見えてくる。

「そろそろ別れないとねー」

「」のその言葉に、アキは苦笑いをして答える。

「せういやこいつは憧れの的だったな・・・こんな粗暴な奴のどこ  
がい!」

隣にいる幼馴染を罵倒しかけたところで、当の幼馴染にさりげなく

わき腹をつねられ、そしてさりげなく足の甲を踏まれる。

「あらどうしたの？ 怪我？ 大丈夫？」

「コニコと笑いながらアキに心配そうな声をかけてくるのは一般的に見ればまあマリア様のように顔が整った女子が冴えない男子を気遣つてやつてる程度なのだけれど、実際事情を知つてればほら、口のようすに顔が引きつってるもんだ。」

「黒すぎるだろ・・・」

ハア、と溜め息をついて立ち上がると、俺はこつちだから、と一人に告げて下級クラスのある第二校舎へと入つていく。

この学校はA～Fクラスで編成されており、まあお決まりのよつてA～Fでランク付けがされている。

ちなみに言えば俺はFでココヤルイはAクラス。

噂でSクラスという、一応在籍してはいるがセカンド等の人間のため、能力が高すぎて違う特別講習を受けているクラスもあるとか。アキからしてみれば雲上人のようなものだとよく言われる。

そんなことを改めて確認して自己嫌悪に浸りながら、未だ原理が解明されていない魔法式の階段とやらで自動的に二階へ行くと、自分のクラスへとはいつていく。

最初はまあここで嫉妬の炎を燃やしに燃やした人間たちが暖かい出迎えをしてくれたもんだが、今のやり方を始めてからそれも大分収まつた。

「やーいアーキよーう」

まあ多少うざつたいのも付くようになつたけれど。

「なに？」

そう言って振り返ると、サルのような顔をした唯一の友達がこちらへ一冊の雑誌を持って廊下を駆けて来ているのが見える。

「これ見ろよ、やっぱくね？ ボンキュッボンだぜやべーよ超興奮する

鼻息を荒くしながらそう言つてくるその友人がアキに見せたのはそういう、いわゆる写真集というものだ。

名前も知らないが顔がそれなりに整っている女性が水着姿で写っている。程度の認識でいいだろ。

「おまえ完全に胸大きくないとダメ派なんだっけ・・・？」

「おうともさ！」

アキはそう言つて猿のような顔の友人の答えを聞いて思うまあ、その主義がこいつと付き合つてる理由でもあるわけだけれども。

だけれども。

「あんな学校一の美人と噂されているルイちゃんだつてひんぬーだろーどこが良いんだよ貧乳なんてよおーやっぱでかいほうが良いだろー夢は多く詰まつてるほうが良いだろー！」

「ああ分かった分かったお前の主張は分かったからとりあえず落ち着けつて」

アキがどうどう、とサル顔の友達、通称モンキと呼ばれている彼を落ち着かせる。

(その主張をあいつの前で言つたら殺されかねねえなあ・・・)

アキが心の中で苦笑いしていると、いつの間にやら始業のベルが鳴り響く。

そのベルの音に背中を押されるようにして教室の中にはいると、なにやら不穏な雰囲気が流れている。

(なんだ?)

あまり他人に関心を持たないアキも、流石に異変を感じたのか耳をそばだたせてヒソヒソと噂している言葉を懸命に聞き取る。

「おい・・・戦争・・・」

「まじか・・・また・・・?」

「今度は学生も・・・」

「徴兵制度は廃止されたはずじゃ・・・」

四人の言葉の断片しか拾えなかつたが、まあ状況は分かつた。

とどのつまり

いつの間にか休戦していた第三次世界大戦が再び、始まるらしい。

「嘘だろ・・・？」

同じタイミングでモンキが珍しく真面目な口調で呟く。

「戦争が・・・始まつた・・・？」

モンキのその声と、いつしか幼馴染のルイが言っていた言葉が重なる。

『争いは・・・もつこやよ・・・』

## 訪れる戦争の火の粉

ポカポカと暖かい日差しを窓から浴びていると、本当に戦争が始まつたのか、なんていう実感は程遠い物だ。

「徴兵制度・・・もないしなあ・・・」

アルマに乗れるほどの才能の持ち主でもなければ、軍に引っ張り出されるなんてことはない。

またいつものように違う世界のように進んで、違う世界のように終わっていく。

他人事だ。

それで済むはずだった。

異変は、その日の夕方に起きる。

\* \* \* \*

『今日のニュースは！こちら！』

家に帰つてリビングで、調理も終わつてあとは幼馴染の帰りを待つばかりという時頃、テレビをつけると甲高い声で今日の有事を伝えるアナウンサーが出てくる。確かにこのアナウンサー、日の国の民放では一番の人気を誇る人ではなかつたか。

そんな事を思いながら見ていると、最近世間をにぎわしている人物がドアップで画面いっぱいに表示される。

「またか」

画面に表示されたバラを咥えて登場でもしてきそうな雰囲気の大男は、その名も英雄。

その名、と言つても本名が分からぬために付けられたただの通称だが。

彼は常人離れした身体能力をいかんなく發揮し、様々な人助けをしている。

木に引っかかつた風船から、立てこもり事件の解決まで様々に。

といつても、ここまで人気が出たのはその事件解決が主だが、もう

一つの側面がある。

アルマを使わない。

そう。

この男は、身体能力的にはセカンドでもおかしくないと学者に言わしめるほどの人物なのに、彼がアルマを使っているといひは微塵も出てこないのだ。

自らの素の身体能力だけで英雄になった。

この事実はもちろんのように少年に受け、そしてアルマといひ兵器が嫌いな老人方にもウケた。

実際自分も、気障な物言いさえなければそんなに嫌いじゃない。やつてている事は善であることに違いないのだから。

そんな事を思つてから、時計を見ると、時刻は七時半。

冬に入ろつかというこの時期に七時半というのは既に周囲一帯が真っ暗な時間帯だ。

「流石に遅いな・・・」

今日は多分帰りに「コガ付いているだろから襲われても心配はないだろがそれでも心配はしてしまうものだ。

「ま、俺がエリート様の心配つてのも可笑しな話だけどなあ」

自虐的に言いながら冷蔵庫のジュースをペットボトルに移してテレビの前へどかりと座り込む。

口にペットボトルを咥えてから朝にクラスメイトたちが話していた話題がフラッシュバックする。

『戦争が始まるんだってよ・・・』

まさか、とは思うが・・・

アキがそこまで思つていると、玄関の戸が静かに開いた音がする。

違和感を感じながらソロリソロリと玄関へ歩み寄つて、角から覗く様にして玄関へ視線を投げると、そこには見覚えのあるシルエットの二人の少女がいた。

それを確認すると、警戒を解いてジュークの入ったペットボトルを片手に歩み寄つて立つ。

「なんだよ遅いな。なんかあつたのか？」

近づいてみて分かる。

（疲れきつてんな・・・？）

その理由は分からぬが、とりあえず今は聞くことだけ聞いてしまおう。

「どうしたんだ？お前等そんなにしょんぼりして」  
努めて軽い調子で放つたアキのその言葉は表情と一緒に凍りつく事になる。

「私たち」

口も開けない様子のルイに代わって、ココが口を開いた。

「アルマ搭乗者に選ばれて、強制的に戦争に行く事になった」

その言葉を聞いた瞬間に、付かれきつたルイの表情に、朝と同じものがフラッシュバックする。

『争いは・・・もう嫌よ・・・』

パシャン、とペットボトルが地面に落ちてつぶれる音がして、足が濡れているような気もするがそれも無視してアキは追い討ちをかけてしまふように尋ねた。

「お前らは、いいのか？アルマに・・・・・乗りたいのか？」

アキのその問いに一人は枯れ切つた声で答える。

「嫌に・・・決まってるじゃない・・・」

二人はそう言って何かの堰が切れたように崩れ落ちた。

「おい・・・」

慌てて駆け寄ると、二人は意識を失っていた、というよりも疲れきつて倒れて寝てしまったようだ。

それを見て安堵の溜め息を漏らす。

「つたく、お前等は神経団太いんだか細いんだか・・・」

アキはそう言って一人を担ぐとルイの寝室へと連れて行き、少し高さのあるベッドへと寝かせる。

すると、ベットのふちに何か赤い物が落ちているのに気付く。

赤紙と呼ばれる赤く染められたB5サイズの紙だった。

「嫌な文化が残ってるもんだぜ・・・」

赤紙を見て溜め息を吐き、赤紙に書かれた文章を見て再び溜め息を吐いた。

「お前らの命を差し出せ・・・か」

かなり捻じ曲がった解釈で意訳をして、赤紙をくしゃくしゃにしてゴミ箱へ投げ入れて、ギリ・・・と鈍い耳障りな音を立てて歯軋りをする。

「全く戦争って奴は・・・いつもあいつから大事なものを取り上げやがる・・・」

アキはそう言つてベットの上に抱き合ひよつとして寝転がる一人を見つけて続けた。

「許せねえなあ・・・つまらねえなあ・・・・・・・・・・・・

「あつたまくるなあ・・・

## 試練の壁

「ふむ」

二人が倒れこんだ翌朝、二人は何も言わずにそのまま登校していった。

一般市民からの徴兵制度は無いものの、優秀な人間は引き抜かれるということなのだろう

止めて欲しそうな顔をしていた・・・といえどそうだけれど、今から俺がしようとしている事を言つてしまえば猛反対しちゃうし、今日の朝に言葉をかけて同様させるのも不自然な挙動につながって不味い。

「つまりこれが一人の移動ルートと、俺の脱出ルートでいいんだな？」

そろそろ学校の始業ベルが鳴らつかという時間帯にもかかわらず、アキはパソコンを開いて、表示された地図の一一本のくねくねと曲がりくねつた線を凝視していた。

『ああそうだよ。一番の難関はここだね』

そう言って指示されたいくつかあるうちの一つの丸印は、赤く示されていた。

『そこは外殻といって、日の国の端っこ。そこを抜けられればその先にある下町と呼ばれる小さな街に出られる。そこはどっちの国にも属さない独立地区みたいな扱いなんだ』

聞きなれた声は、一旦言葉を切つて何かを呑んでから続けた。

『んで、問題は越える時の話。もちろんのようにそこには兵器がある。けれどもその兵器はあくまでも外から内への攻撃に対する兵器であつて、内からの攻撃には対応してないんだ。だから問題になつた時は守衛の人間だけが対応できる。』

『だったらそんなに難しくないんじゃないか？』

モンキの声に差し込むように自分の疑問を投げつけると、モンキは

まあ落ち着けつてば、とアキを諫めてから続ける。

『問題はその人間さ。たつた二人しかいないんだけど、その二人が問題。アルマを操るファーストだよ。一人は機械ではできない連絡用、一人は機械で対処できない敵用として配置されてるけど、内からの攻撃・・・しかも学生程度だつたら連絡なんかするよりも先にアキ達を潰そうとして二人とも来るだろうね』

アルマ。

突然降りかかってきた問題に、アキは頭を抱えた。

「アルマの対処法は？」

アキがダメもとでモンキに聞くが、モンキはしばらくの沈黙の後に残念そうに返す。

『残念ながら、国家機密級の情報はノーリスクで手に入れられないねー。要所にハッキングでもすればいいんだろうけど・・・まあ下町に行ってしまえばもう相手の管轄外だから追つてこないよ、たぶん。ハッキングすれば破壊できる方法も分かるだろうけど・・・モンキが危険なところへと突入しかけた所で、アキは慌てて止める。『ああ、いいよいいつて。そこまで頼めない。情報は十分だよ。ありがとう。感謝するよ』

アキはそういうとパソコンを閉じてイスの後ろにおいてあつたりュックサックを肩にかけると、ふとポケットの携帯が震える。  
何だ、と思って携帯を見てみると、来たメールはどうやらモンキからだ。

件名：なし

本文：感謝する必要はないぜ、こっちも趣味だよ。祭には参加しないとね？

あと、この携帯は壊しておく事をお勧めするよ。いまどきGPS機能の無い携帯なんか無いから・・・骨董品好きのおっさんならいざ知らず。お前の持ってる携帯は十中八九付いてるぜ。

俺宛のメールはいつでもドンと来いだからメールアドレスだけ持つ

ておいてくれよ。流石に顛末は気になるし。

P・S

三人元気に暮らせよ。

下町に知り合いは居ないからなんとも出来ないけどあそこはかなり  
フランクな所だつて聞いたぜ。大丈夫だろ。  
頑張れよ

ぐ、と目の奥に何か熱いものがこみ上げてくるのを感じて目をつぶる。。

一見ただの馬鹿にしか見えないモンキは、なかなかどうじて格好良いところがある。

あいつがモテモテになるのは・・・まあ難しいだろうナビ、そのうち・・・きっとそう遠くない未来に恋人が出来るだろう。  
妙な考へで頭を埋め尽くしてこみ上げてくるものを押し返すと、折りたたみ式携帯を閉じた勢いそのままに握りつぶした。

「後に引き返すのなら・・・今」

正直言つてしまえばこのまま逃げ出したいし、このまま家に居たい。  
そうすれば戦争は何処かの誰かが戦っている出来事であつて、俺には関係ない、といったスタンスで生き事ができる。  
けれども。

だけれども。

「それじゃあやつぱり・・・楽しくねえわな・・・

あいつと、あいつらともつ付き合つてしまつた。関わり合いを持つてしまつた。

あいつらの事を好いてしまつた。

なら自分の隣に居ないのは・・・嫌だ

\*\*\*\*\*

「子供のわがまま・・・と言われても仕方ねえだ」

バイクにまたがってフルフェイスヘルメットを被ると、一気に加速して学校へと発進させる。

「MAP表示」

アキが低い声でそう呟くと、目の前の田を保護する透明な部分につすらと先ほどダウンロードさせておいた経路を表示させる。

その地図の赤い経路の中に青い点が一つある。

「まだ学校は出てねえか」

予定に変更はない。

現時刻九時十五分。

あいつらの出発は、十五分後だ。

「十分だな」

アキはそう言って更にアクセルを踏み込んだ。

すると予想通りに後ろにい幾台かのパトカーがファンファンと大きな音を奏でて追つてくる。

「ここまで順調だ」

速度法違反で大きな音声でとまるごと促してくるがそれを無視して突き進む。こうしてくれることでパトカーの音に反発する磁石のように、この近辺から人は居なくなっていくだろう。

そう言つたモンキはやはり頭がいいというか、民衆の心を理解しているというか。

彼の言うとおりに、ものの五分としないうちに周辺に人の姿はなくなつていった。

「やっぱあいつFクラスにいるのかしいだろ・・・」

普段はただのエロ猿だというのに・・・

既に線としてしか捕らえきれなくなつた風景を横目に、第一目標地点が視界の前に現れた事を確認すると、バックパックの中から小さな爆弾を取り出した。

爆弾、と言つても衝撃を加えると容器が破裂してドライアイスと熱

湯が混じって爆発するといった代物だが、中に刃物等を入れることによって状況で使い分ける事が出来るため、そういう意味ではかなりお手軽で、かなり有効に使える物だ。

こぶし大のものを自分のバイクの排気口に入れると、学校の入り口に止まっている車を確認してフルフェイスヘルメットの機能を使って中には誰もいない事を確認する。

「暇つぶしで作った高性能ヘルメットがいつも役に立つ日が来るとは思わなかつたな・・・」

苦笑してそういった次の瞬間、アキは顔を険しくして何かを決意したような表情になる。

「さあ・・・反乱だつ！」

そう言って、グ、と両の足に力をためる。

「まだだ・・・まだ・・・まだ・・・」

アクセルをどんどんと踏み込み加速度的にスピードを上げながら入り口に止まっている黒い車に接近する。

そして残り5mを切ったかといつところでアキは両の足の力を振り絞つて飛び上がった。

「飛べ・・・つ！」

高校生の足の力に加え、300kmは出ていたであろうというスピードで駆けていたバイクの速度が加わり、そのジャンプはかなり大きくなる。

そしてさらに一つ要因が加わる。

ゴン、という金属と金属が鈍く正面衝突する音が響いた次の瞬間、背後で耳をつんざくような轟音が鳴り響いた。

ゴウッと爆風に煽られたアキは更に飛空に加速をつける。

「こりや着地できつかな・・・

フルフェイスヘルメットの下で冷や汗をかきながら地面を見ると、地面までおよそ10mはあるだろう。

「死ぬんじゃね・・・?」

などと考えてしまつだけではなく口にまで出てしまうが、もう引き

返せない。

空中で慌てて姿勢を整えて体を丸めると、体を回転させながら、上手く地面に足が着地するように調整し、そのまま回転を緩めずに勢いのままに転がる。

そうして気付けば、すでに学校の裏側だ。

「あの爆風だ・・・爆発もかなりでかいだろ？し・・・爆煙のおかげで俺の姿もぼれてないと・・・思いたい」

アキはそう言って痛む節々を無理やり動かして立ち上がる。すると田の前におあつらえ向きに動搖する黒服三人と、口々ヒルイがいた。

「よーお、朝ぶりだな」

フルフェイスヘルメットを外しながらそういうアキを見て、二人は何事かと目を丸くする。

「おいおい、そんな反応はねえだろ？」

「誘拐しにきたぜ」

アキはそういうた次の瞬間には銃を構えていた男へフルフェイスヘルメットを投げつける。

（地図はもう記憶したしいらねえさ・・・つー）

しかしフルフェイスヘルメットだけでは、とてもじゃないが田隠しにはならない。

だからこそ。

「拡散！」

アキがそういうと、フルフェイスヘルメットはキン、という音を響かせた後に派手な音と閃光をもつとして弾けた。

何も見えない。

しかし記憶の中に、配置は入っている。

記憶をたどって車の運転席に駆け寄りざまに、開いているはずの運転席ドアを蹴つて乗ろうとしていた男をドアごと吹き飛ばす。

「どーせ邪魔になるドアなんざいらねえつ！」

ドンッと鈍い音を立てて後部座席に乗りうつとしていたＳＰ「」と吹き飛ばすと、一気に車を駆け登って反対側にいる混乱したままの二人を後部座席に乗せ、その流れで助手席にいる男を引きずり出す。見えない視界で暴れる男の動きを予想し、後頭部を掴むと思い切り車にぶつけて気を失わせる。

「悪く思つなかつ」

気を失つた事を確認して後ろに放り投げ、視界が段々と治ってきたので割れたガラスを拾つて最初に銃を構えていた男の側へ行き、銃を持つている腕と両の足の腱を切り裂く。

ズブ、という肉にガラスが食い込む感触はなんとも言ひがたい嫌悪感を胸に孕ませる。

手から零れ落ちた銃と、ポケットから顔を覗かせるマガジンを取り出すと、すぐさま運転席へ駆け込み、アクセルを思い切り踏み込と、キュガツとゴムが削れる音を響かせながら急発進し、未だ混乱するパトカーの横を通りた。

ドアが外れている運転席側にパトカーが居たなら確かに危ないが、幸いというか計画通りといふか、いまパトカーは助手席側にいる。そしてさらにいえば、これは政府直属の車であり、パトカーがこれを追う理由は無い。

「上手く行き過ぎて怖いな・・・」

決して自分の才能によつているわけでもなんでもない。

いや、酔えるほどの才能があるわけでもないのだけれど。

アキはそう眩いでバックミラーで後部座席を見ると、そこにはまだ混乱した頭を整理しきれない二人が居た。

「え・・・アキ？・・・だよね？」

おずおずといつた様子で運転席を覗き込みながら聞いてくるルイは、とてもじゃないがいつもの冷静な表情は消え去つていて。

「おうよ」

再び線のように流れる風景を見ながら神経を研ぎ澄まして運転をして、質問に答える。

「えつと・・・何・・・してるので？」

「なんだろうねえ・・・まあ、最初に言つたとおり、誘拐さ

「なんだろうねえ・・・まあ、最初に言つたとおり、誘拐さ

アキはそう言つてハンドルを切つて角を曲がる。

それなりのスピードが出ていたために曲がつたときの横へかかるGは凄まじいが、後ろの二人はそれなりに身体能力が高いので大丈夫だろう。

「誘拐？」

「そう、誘拐。いまから日の国を出て下町に行く。引き返すなら今だぜ。俺はあそこで誘拐つて言つたからお前らに罪は被らないはずさ」

アキはそういうと、バックミラーで一人の姿を確認する。

すでにそこには青い顔を引っ込みで真剣に何かを考える姿があった。（つたく・・・速いねえ）

何が、とはいいう必要も無いだろう。

「つまり・・・アキは私たちが戦うのが嫌だ・・・つていうのを知つて助けに来た・・・つてこと？」

ルイの言葉の途中で、録音機能があるであろう箇所を破壊して答える。

「まあ。 そうだね」

アキがそういうと、弾かれたようにルイが叫ぶ。

「馬鹿じゃないの！？ アンタ普通に生きられたのに！ あんたは普通に生きていられるつて言つからせつかく行くことを許可したのに！ こんな事されちゃ台無じじゃない！ どうせ逃げられないわよ！ だって外殻があるんだよ！ ？ アルマがいるんだよ！ ？ 無理じゃない！」  
堰が切れたようにまくし立てるルイの言葉を全部聞いてから、アキは静かに言った。

「まあ、お前が俺にどんな気遣いをしてくれてたかなって分からないけど、俺が自分勝手だつてことも知ってるけど。 だけどさ、お前らが知ってる俺は、幼馴染や親友が戦場に言つてるのに一人安穩と

生きられたるほど、イイ性格してないだろ

アキがそういうと、ルイは黙り込む。

「んま、全部俺の自分勝手や。下町に行つてもつと良い生活が送れるとも限らない。いやなら、ここで降ろしていぐぜ」

アキがそういうと、今度はココが答える。

「そんなこと・・・できる訳無いじゃない・・・私たちだつて・・

戦うのはいやだよ・・・人を殺すのなんて・・・」

ココがそういうと、ルイがうなずくのを見て、アキは心の中で溜め息を吐く。

（正直ここが一番の難関だつたからな・・・ここにからに逃げる意思がなかつたらただのおせつかいだつたわけだし・・・つてまあ今更だけど・・・）

「んじゃ、ちょっと手荒なエスコートをお許しください。」

アキはそういうとハンドルとアクセルを固定してドアの無い運転席から身を乗り出して後部座席へ行くと、二人を抱きかかえるようにして持ち上げ、車の中においてあつたコートで自分ごと包むとそのまま自分を下敷きにするようにして飛び降りる。

幸いこのコートはかなり滑りやすい材質で出来てるので、先ほどのように転がらなくても・・・まあダメージは軽減される。

大丈夫だと思つたらすぐにコートを広げてその場にすて、そのまま路地に入り込んで置いてあるバイクに乗り込む。

サイドカーがついている自家製品だ。

「乗つて」

そう言つて一人にフルフェイスマスクを投げると、アキをサイドカーに乗せ、ココを後部座席に乗せる。

「行くよ」

ガコン、とスタッドを上げてエンジンをかけてしばらく裏路地を走り、大通りへでて更にそこをしばらく行くと、そこには空高くそびえ立つ外殻と呼ばれる物が鎮座していた。

「こいつを越えれば、終わる」

「さて、行くか」  
カラーン、と乾いた音を響かせながら、休業中とかかれた表札をドアにかけると、ヤイナは仕切りなおすように言った。

時刻は朝六時。

冬もそろそろというこの時期は、この時間だと息が白く凍る。建物の森、そう別称が付けられる下町は、その名通りだ。上から見て地面を見つける事はそう容易じや ない。

何故、といわれれば、狭い土地に沢山の人数が住む事になったの走上に逃げるしかなかつたといわざるを得ないだろう。

実際、今ヤイナが住んでいるこの建物は40階立てだ。

40階立て、といつてもビルのように真っ直ぐ立っているわけではなく、キノコのカサのように広がり、曲がりくねっている。そんな建物たちが入り混じつているので、生活圏が地表という普通の人間はかなり珍しい・・・というかそんな物好きは聞いた事がない。

こんな高い街構造のため、雨はたいした問題になつたことはない。一度酷い雨が降つた日があつたけれど、あれでも精々地面が浸水した程度だつたし。

この土地の地面の水はけも異常ではあるのだけれど。カン、カンと甲高い音を響かせて屋根を踏んで進む。

やはり高いところだと風が問題になるのだが、その問題も幸い、外殻で覆われている二国が両端にいるので、大丈夫だ。西も東も囲まれているのでそんなに強い風は直接当たらないものの、北風や南風といった冷たいのや暖かいのが來るので、それもそれで楽しい。言つてみれば、二国の中に住んでいる人間からすれば生活レベルは極端に下がるだろうが、住めば都とは良きいったものだ。

そんな事を思つてゐるうちに、日の國の外殻へとたどり着いた。

どんなに高さがある下町の建物でも、いくら上に積み上げようとも外殻はその10m先を進むように作られている……といふか補強されるだけなのだ。

その10mあまりを、魔法を使つていとも簡単に登ると、厚さ10mほどのある外殻の上に立つて下を見下ろす。

「こいつあ……たつけな……また高くしたのか?」これヤイナはそういうと、眼下に黒い点がこちらへ近づいてくるのに気が付く。

この時点では眼に魔法を使つているのは明白だ。地面までおよそ800mもあるのに、それが何か、とにかくまで詳しく把握できるのだ。

「ありや……傷だらけの青年が女一人をバイクに乗せて走っているのか」

若干の興味が出たのでそのまま見ていると、どうやら何から逃げているようで、意味も無く路地へ入つたり出したりしている。

「しかし……結局最終目的地はここなんだ」あんまり意味なさそうに見えるがね……

まあ、何か考えがあつてのことだうと思つて放置をして、ひとまずは隣にいるアルマの相手をするべく立ち上がりアルマをにらみつける。

「良く……私に気付けましたね?」

大人しめのその声の主は、最低限のプロテクターしか着けていない細身の女の子といえる程度の年齢の女性だった。

「ああン?お前……学生か?」

田の国のアルマを操る学生の特徴を知つているヤイナは彼女にそう言つ。

「それも……良く……分かりましたね」

感心したような雰囲気が僅かに含まれるその言葉を聞いて、ヤイナは呆れたように言つ。

「良く分かるねもなにも、お前腕章付けてるじゃねえか。それ学生

つて証拠だろ？「がよ」

普通ならアルマの装甲で隠れる一の腕に付けられた腕章は、とある学校のSクラスの人間だといふことを物々しく語っている。

「そう……でしたね」

ゆっくりとした動作で腕章を外すところを見ると、学生だと知られるのに多少なりとも不都合があるのであらう。

「ンで？お前は俺に何の用だ？」

図々しい態度でそういうヤイナに表情を微塵も変える様子も無く、彼女は静かに答える。

「貴方は日本の国の人間ではない……速やかに退去してください……」

・

消え入りそうなその声をかるりじて聞き取ると、ヤイナは笑つて答える。

「ハン、お決まりの展開だ。いやだ、と言つたら？」

ヤイナがそういうと、彼女は右腕を少し上げて拳銃を引き抜き、ヤイナに言つた。

「ここで、排除します」

「やつてみろよ」

凄むヤイナを見て、少女はためらいもなく引き金を引いた。

パン、と乾いた音が響いて銃口から鉛玉が出たのとタイミングを同じくして、アルマを着ている彼女のプロテクターが粉々に碎かれる。

「……！」

終始無表情で通していた彼女に初めて、驚きと羞恥の表情が浮ぶ。

「なあにハズカシがつてんだ。ひとつと終わらせるぞ」

女性の背後に立つヤイナはそう言つて、彼女の足を払う。パシ、といとも簡単に払われたその体はバランスを崩し、そのまま外殻の内側へと落ちていった。

「学生……にしちゃあ弱すぎるだろ……あれ……」

ヤイナはそう言つて下を覗き込むと、普通なら出せるはずのブースターを出せずにあくせくしている姿が視界に入る。

第一世代型以降のアルマ・・・つまり全てのアルマは小型化した装備を肥大化させることで武器や装備を出現させるのだが、それをするためにはかなりの想像力が必要となる。

小型化して体のどこかに付けているアクセサリーを元の大きさに戻したときの質感、重量、形、色、それらすべてをリアルに想像しなければならないのだが、今の彼女は落下という恐怖にそれらの想像力が押しつぶされていてブーストを開発する事がない。

「んま、助けるほどお人よしじゃないがね」

ヤイナはそういうと、外殻から飛び降り、中ほどじまで言つたところで思い切り外殻を蹴つて九十度の方向転換をして田の国の中心へと飛んでいった。

\*\*\*\*\*

「ねえみて！」

ルイが大きく叫びながら指差した方向を見ると、外殻から落ちてくる少女の姿が眼に見える。

どういうことだ・・・？

さつきアルマの一体が飛んで言つたといつことは中央への連絡・・・？

じゃあ二人目に飛んでいたのは・・・？

アルマが二人ともここを離れるとは思えない。

だとしたら。

(襲撃！?)

いや待てよ・・・そんな事があるはずが・・・！

ここへ来て連合国が日の国へ攻め入ってきた可能性が浮上し、脳裏で引き返すか？と自分に問う。

馬鹿言え、今引き返したらそれこそ袋のネズミだ。

「進んで。逃げよう」

進むか退くか迷っているところに、背後に座っている「」の声が響

く。

「 うん」

ブォン、とエンジンが唸りを上げる。  
史上最初の、日の国からの脱出劇だ。  
急激に速度を上げたバイクに体がもつていかれるようになるのをからうじて踏みどまる。

外殻まで残り5m

上手く行けよ・・・っ！

ブン、とバイクにつけていた巨大な三日月状の刃だけの円盤をエレベーターへ投げつける。

そして、衝突。

飛び上がって、バイクと同時に外殻へと衝突する。

すると地面に設置されているエレベーター装置が破壊され、一気にロープが引き上げられるが、肝心のエレベーターがロックされるために上昇しない。

ガチン、と再び動きを止めてしまう直前のエレベーターは先ほど投げた円盤と、爆風によって再び動き出す事になる。

爆風でエレベーターを保護していたガラスが割れ、そして円盤がエレベーターを吊り上げようとしていた紐を切り裂いた。

結果。

とてもない勢いで紐が上方へと引っ張り上げられる。

そしてそれにリンクするようにして、今ここにいる、という目印として付けられている強力な磁力によって集められた赤い砂鉄が上昇していく。

「 磁力オン、くつつけ・・・っ！」

アキがそういうと、足のブーツがブン・・・と低い音を上げて突然重くなる。

安全策を講じたとび職人の作った安全靴は、鉄にくつ付いて落ちる

事を無くした・・・といつ画期的なアイテムである。それを改造したのが今アキが使っている靴だ。

次の瞬間。

ガン！と凄まじい音を立てながら赤い砂鉄が集められているところへと足がすいついた。

「あが・・・・れええええっ！」

ぶお、と凄まじい風圧を全身に受け、背中に背負われている一人の負担を軽減する。

勘ではおよそ、時速500kmもの速度が出でているだろ？。そしてかすれる視界の隅で落ちてくる少女を捕らえる。

正直ここで手を出して掴んでそのまま引っ張り上げる事はおろか、そのまま引きずられて下に落ちてしまつ確率のほうが多い。けれども

「どうせなら・・・っ！」

ガツと左手を突き出して少女の肩の服を掴むと、そのまま引き上ぐる。

ボギ、と鈍い音を立てて左肩が外れる。

「骨が外れようが・・・筋肉はついてらあ・・・・っ！」

加圧に負けないように左手の力を限界以上に引き出す。

「つづらああああああああああああああああああああ！」

加圧に持つてかれそうになる体を、叫び声を上げる事でからうじじて踏みどどまらせる。

恐らく背中にくつ付いている二人はもう気を失っているだろ？。

急上昇と急降下は身体と精神にそれなりのダメージが加わる。

計画を知っていたから俺は良いが、何も知らない二人はもう付いて来れる範囲は軽く超えているだろ？。

そんな事を思つていいうちに、とうとう頂上まであと10m。

「磁力解除！」

アキがそういうと、足を引っ張り上げていた力がフッと無くなり、あとは慣性であがつていいくのを待つばかり・・・だったのだが。

残り2mと言つ所で慣性が力を使い果たした。

「やば・・・っ！」

アキは咄嗟に身をひねりながら壁を思い切り蹴り、2mは越えられたのだが、壁を蹴った事で壁から離れてしまった。

「ちくしょうが・・・っ！」

そう悪態を吐くと、左腕に抱えられていた少女がボソリといった。

「私を壁の上に。引き上げる。」

後で考えればその言葉が真実である保証はどこにも無いのだが、当時のアキはそれすらも考えられないほどに切迫していた。

「たのんだ・・・ぞ！」

壁を身をひねつて蹴ったために生まれた回転力を生かして骨の外れた左腕で少女を壁の上に投げる。

ドン、とワンバウンドして止まった少女はすぐさま立ち上がり、右腕を振りかぶつて円の形で何かを投げるようにして腕を横に振った。ヒュン、という風を切る音が聞えたかと思えば、胴体にワイヤーが巻きついている。

そう把握した次の瞬間、全身に思い切り風がぶつかる。

「そういうことか・・・っ！」

しかしこれでは壁にぶつかる。

重力によって落下する自分達の体がとてもないスピードで壁に迫るのをみて、思わず眼を瞑りそうになるのを必死に堪えて、足の磁力を鉄反発モードにする。

(この操作を誤らなければ、上手く着地できるはず・・・)  
凄まじいスピードで壁に迫る体の勢いを殺すために、段々と鉄反発モードを最大出力にする。

するとだんだんと速度は緩まつていき、次第に勢いは止まる。  
最大出力にすると壁と同じようにいきなり止まるのではないかと内心冷や汗ものだったが、距離のおかげで効果が段々と出るといった結果に終わった。

「この選択は正解だつたね・・・」

ふう、と溜め息をつくと、少女の弓を上げるワイヤーに身を任せたまま上がつていった。

## 壁越え（後書き）

ここへ来て新キャラクターが参入です。

下町への進出

「すつげえ」

外殻の上から見下す

「鉄の・・・・森・・・・

そういうしかないだろ？

桂管齋と生え立つ家々はむちむじやないか田の園の井の整つた家並み  
は全體の。

乱雑として、秩序も無く見える。

けれども。

「二郎、お前が此處にいる間に、おまえの父の死因を知らせるよ。

自分も初めて見た、という風に咳く少女は、どうやら外殻の中ほど

のだと云う。

軍規違反した罰を受けるか、それとも出るか、という問いただす。

「おとおと・・・・・和は無いは嫌い・・・・・出たし」

そう書いて一番近いところを見下ろす。

「10mはありそうだなあ・・・」

困ったように一番近い建物をみて、まあ上がってきたときと似たような感じで行けばいいか、と心中で呟いて足の磁力をオンにしようとした・・・のだが。

ナ・シ・テ・ル・シ・テ・ル

「ん？」

やつ一度オンにしてみると、 irgendは小さな音がひどい」というのを

かんば見ると、どうも先ほどの最大出力と無理な改造のせいでお陀  
仏らしい。

「参ったなこりや・・・・・」

困ったように頭を搔いて解決を模索していると、下の建物に人影が  
ひょっこりと現れて消え、そしてしばらくたつてから一人の大きめ  
の女性を連れて再び現れた。

そして女性はこっちを見て最初の人影と少し何かをやりとりして、  
奥の建物から一人の男を呼び出した。  
だるそうに動くその男は木と木をつないでは切り形を整えてはしご  
を作っている。

「え・・・そこから・・・・?」

思わずアキが口にした疑問は、誰しもが抱いたものだとおもう。

\* \* \* \*

「やあ、久しぶりにあんなところに立つ普通の人間を見たから連れ  
てこられた時は驚いたよ」

委員長モードの凛とした面持ちの峰が、建物の間を蜘蛛の巣のよう  
につねつて繋がっている道を案内しながら歩く。

「いや、俺としてはむしろハシゴを作れって言われたときが一番び  
びつたわ」

コキコキと肩を慣らしながら隣に歩く大野が悪態をつく。

「あ、ありがとうございます」

未だ展開に付いていけていないアキがおずおずといった様子で彼ら  
に礼を言つ。

すると峰が振り返り、引きつる笑顔で答える。

「やっぱまだ痛むのか?」

大野が心配して聞くと、峰は少しだけ首を縦に振つてうなづく。

「んま、これで痛くねえとか言つたらもう人間やめてるけどな。ま  
あいいや。お前はヤ二坊の家行つてろ。俺が案内しておくさ」

大野の提案に苦笑を申し出ようと峰が口を開きかけたところで、大野が手で制す。

「知ってるだろ？お前より俺のほうが『』は詳しいんだ。先輩にまかせろよ」

含み笑いをしながら大野が言つと、峰はしづしづといった様子で引き下がつた。

「じゃあ、頼む」

未だ委員長モードの解けない峰を苦笑で見送ると、大野はそれぞれ一人ずつ背負つている二人を見る。

「さて、君たちの計画を聞こうか？」

大野がそういうと、アキがはつきりと答える。

「『』に、住ませてもらえればと」

アキのその言葉を聞いて、やはり大野はしばらく考え込むだらう、といつのがアキの考えだつたのだが、彼は思った以上に反応が早かつた。

「よしいいぜ、じゃあ住居は・・・全員一緒に良いな？」

「え、は、はい」

思つた以上にサクサク進んでいく話に若干の気後れ感を覚えながらも応答する。

「んじゃあ・・・学生・・・だよな、お前達」

「はい」

「ふむ。じゃあ後でちよつとやつてもらわなきゃいけないことがあるんだ。ああそれと」

大野のやつてもらわなきゃいけないといつ言葉に若干の不安感を覚えながらも、その先の言葉に耳を傾ける。

「しばらく・・・まあお前達の顔がここに馴染むまで日の国出身だつて事は内緒にしておいてくれ。本当は頼りになるやつがいるはずなんだけどなあ・・・あいつはまだどこに行つてんだか・・・」呆れた様子で言つ彼に苦笑して相槌を打つと、彼も笑つて言つ。 「ああ、ここじゃ社交辞令なんてえのはあつてないようなもんだ。」

社交辞令で言つたはずが本当にちまつたつて事も多いからな。  
そこらへんは気をつけたほうがいいぜ」

世間知らずとも言つがね、と大野は言つと、最後に一つだけ、と言葉を区切つてアキ達に聞く。

「お前達の見た通り、ここは建物の森だ。本当に田の当たらないところから一日中日のあたるところまであるけど・・・ああ、いや。こんなご時勢だ・・・特に今はな・・・」

なにか聞こうとして言葉を始めたのだろうが、途中で独り言となつた彼の言葉を聞くに、ここの中核人物であるヤ二坊という名前の人間の近くに住むのが一番良いだろうという話だ。

「まああそこが一番田当たりの関係も良いし風通しも良い。冬も暖かいし良いだらうなあ」

大野はそう言って、ガシガシと頭を搔きながら立ち上がって付いてくるようにアキたちを促す。

しばらく歩くと、ぽつぽつと人が増えてくる。

しかもその表情は一様に晴々としていて、どこか楽しげだ。

「私たちの国の人たちは・・・違うね」

いつの間にか眼を覚ましていた背中の口々が、 shinみりとした調子で言う。

「ああ。俺たちの国の人間とは違つて・・・」の雰囲気は・・・アキが口々をあらしながらそういうと、脳裏に戦争前の学校での祭りの光景がフラツシユバツクする。

全員が全員楽しげな顔をして、笑つて、いつも根暗な人間もこのときばかりは笑顔になる。そんなとき。

今日の国でも祭があるにはあるが、今となつては形だけの、楽しもなんとも無い祭だ。

「天賦祭、つってな。この下町が一斉に沸く祭さ。いつもお祭り騒ぎだから祭だなんだつたつていつもの雰囲気かわらねえがな」  
ゲラゲラと笑いながらそういう大野を見て、アキ達は思う。  
(ここの人たちは・・・しつかり生きているんだ・・・)

無機物的な祖国の人間とは違う。

そんな事を思いながら歩いていると、いつの間にか目的地へと到着した。

「ここがお前達の家だ。一時的にここに留まるもよし、永住するもよし。まあなんでもいいさ。好きにするといいぜ。ちょっといらっしゃることがあるから、部屋の掃除でもして待つてくれよ」

大野と名乗った彼はそう言うとさつさと何処かへ行ってしまいます。

「敷金礼金とか、そういう問題はいいのかしら」

ココがそういうのを聞いて若干の不安を覚えるが、何も言われなかつたところとは別に良いと言つ事なのだろうか。

「まあ、とにかく入るわ」

アキがそう言つて背後にあるドアをガチャリと開けると、そこには少しほこりっぽい空気がたまっていたものの、テーブルやベッド、イスやソファがしっかりと配置されていて、今すぐにでも住めそうな雰囲気だ。

「凄い」

「ココやアキが思わず漏らしてしまつほどに凄いのは、窓から差し込んでくる光がその室内を幻想的に演出している。まるで一枚の絵画のようなその光景だ。

「こんなところで過ぐせるなんて、夢にも思わなかつた」

ココが感心したようにそう言つてソファに座り込むと、ボフッという空気が押し出される音とともに埃が部屋中に舞い散る。ゲホゲホと咳き込むココの声を聞いて、ルイも目を覚ましたようだ。

「バツカだなあ。掃除しきつて言われたばつかだろ?」

アキが呆れたように言いいながら掃除用具を探していると、ココが小さく反論を口にする。

「つるやこわね、ここまでほこつが溜まつてるとほ思わなかつたのよ」

「あー、ここは・・・?」

ルイが眼を覚まして何が起きてるのか未だ把握し切れていなによ

な声色で言つ。

「ああ、田を覚ましたね、ここは下町。思つた以上に良い所だよ」  
アキがそう言つて、ルイに箒を手渡す。

「ま、まずはここを掃除しないとなんとも言えないけれどね」

\* \* \*

ダン！と両開きの大きな木製ドアが蹴破られる。

「何者だ！」

数人の護衛兵が迎撃するために槍を構えて立ちふさがる。  
まぶしく差し込む日の中から現れたのはぼさぼさの髪を搔きながら  
ゆつたりと歩くヤイナの姿だった。

「よーお。なあぐりこみだ」

「何をしこきた・・・貴様」

白い髪を生やした男性の目にふんぞり返るヤイナは偉そうに肘掛に頬杖を付いて答える。

「はん、何をしに来たか、なんてのはよく分かつてんだろ？・・・戦争は勝手にしろ。だがな、下町に手を出すなど言つておいただろ？」

ギロリとこちらをヤイナの剣幕にたじろぎながら、初老の男性は言い返す。

「ふん、何の話だか分からないな」

「そあかよ。わからねえなら教えてやる。あの狂犬のたずなを放したのはわざとだろ？」

狂犬、という単語を耳にして男性がびくりと体を震わせるのをヤイナは見逃さなかつた。

「図星つて所か？あいつのたずなを離して下町に餌放り投げりや下町に来るのは当然だろおが・・・にしたつてまあ・・・あいつが着ていたアルマが第一世代だつてのはちつとばかし不可解だけどなあヤイナがそういうと、男性は組んでいた腕を解いてイスに体重を乗せる。

「それで？貴様は何をしにきたんだ」

「何をしにきたか？んなこた決まつてんだろ？お前の隠してる・・・いいや、隠し持つてるといつたほうが正しいか？犯罪集団の事、教えるよ」

ヤイナはそういうと一呼吸おいて口を開く。

「確か・・・名前を、囃つ骸骨楽団・・・だつたか？」

ヤイナの言葉に、初老の男性は冷や汗がじつと吹き出るのを感じる。

「囃つ骸骨楽団・・・聞き覚えの無い集団名だな」

「嘘をつくなよ、クソ狸が。まあいい。心当たりが無いならやる」

たあ一つだ。この国のアルマ使い……明日も見れるといいな？「嫌な笑みを残して立ち去ろうとするヤイナを、男性は慌てて引き止める。

「まつまでー！」

「あん？」

「喧う骸骨樂団……という組織ではないが一つ心当たりがある…・ヴォイス、という組織だ」

ほう、と言つて動きを止めるヤイナをみて、男性が微かに微笑んだのを、ヤイナは見逃さなかつた。  
(丸々太つた駄獣野郎が……)

\* \* \*

所変わつてここは照明も落とされている所謂バーという所だ。しかしそこに集まつているのはいずれも年若い学生ばかり。

「おー・・・そろそろ始めるぞ・・・」

「全員アルマは・・・」

なにやら不穏な動きを見せる彼らのいるバーの扉が勢い良く蹴破られたのはその瞬間だつた。

「よーお餓鬼共。粹るのはここまでだ」

ドアから差し込む光で学生達の顔が仄かに光る。

(本当に子供しかいやがらねえ・・・つたく嫌なモンだ)

チツと小さく舌打ちをして、右手に短剣を持つ。

「こいつが線引きだ。生きるか死ぬか。テメエらで決める」

ス、と掲げられた短剣を見て、学生達は気付く。

「こいつは敵だ！政府の犬だぞ！殺せ！」

誰かがそういうと、弾かれるよつにしてアルマの装甲を開しながら一斉にヤイナに飛び掛る。

「ハーン、お前等実戦経験皆無じやあねえのか？」

ヤイナは嘲笑するようにそう言つて、短剣を翻してその場にいる全

員の足の腱を切り裂く。

「遅すぎるぜ」

影が見えたなら上出来、というレベルの速さで動くヤイナを田で追える人間などいるわけもない。

全員が反抗する気が失せているのを確認すると、先ほど叫んだ男へと詰め寄る。

「オイお前・・・喧う骸骨楽団つていつ名前の組織、知ってるか?」  
初心者にでも扱える第一世代しかここにはないが、ここまで集めるには流石に学生だけの組織では無理な話だろ。なぜなら、アルマを集めるのにはそれなりの流通経路も必要だし金も必要だからだ。  
しばらくたつても答える様子の無い男を見て、ヤイナは呟く。

「仕方ねえな・・・んじゃあ俺がお前等に代わって悪党をやってやるよ。何のためにこいつらを生かしておいたと思つ?」

ヤイナは言いながら地面に転がる人間達を見下ろして短剣をくるくると回す。

その光景だけで、何を言わなくとも分かる。

「卑怯者・・・つ!」

苦しそうにそういう男にヤイナは笑つて答える。

「褒め言葉をありがと。んで?お前がそんなこと言つたつて状況は何も変わらないぜ?どうする?生きるか。周りを道連れに死ぬか。俺が言つた線引きはこここそ。さあ大事な選択だ。迅速に、後悔しない答えを出せよ?」

きらりと煌くナイフを掲げて言つヤイナはとてもじゃないがいつも生活からは想像できるものではない。

「あ・・・ああ・・・知つてゐる」

漏れるようにして「ほれるその声を耳ざとく聞き取ると、ヤイナは追求する。

「んでも?」

「あ・・・アルマを格安で大量に売つてくれたからな・・・廃棄処分にする予定のものを売つてくれたんだよ・・・」

段々と流暢に話し始める男を見て、やはり圧力が掛かっていた事を悟る。

「で？」

「そつそれだけだよ俺の知るのは…もうしらねえよ…」

慌てて言ひ男を見て、ヤイナは質問を変える。

「お前等、学生だろ？どこで犯罪組織と知り合つたんだ？」

ヤイナがそう問うと、再び男は口をつむぐ。

「そつか・・・残念だな。まったくこれでどうやら呑き命がまた一つぶれる事になる。」

そう言つて思い切り短剣を振り上げると、男は慌てて口を開く。

「成城高校だよ！成城高校と試合したときに会つたんだ！」

成城高校？

「なんだ・・・しらねえのか？FからAまでランク付けされたクラス編成で成つてる今時珍しい高校だ・・・噂じや軍人高校生もいるとかいう話だけどよ・・・流石にそこまではしらねえ・・・」男の言葉を聞いて納得したヤイナは男の首元から手を離してポケットから塗り薬を取り出して男に放り投げる。

「助かつた。手荒にしたのはそれが一番手っ取り早いからでな、悪かつた。」

ヤイナはそういうことを成城高校に行くために駆け出した。

\* \* \* \*

「君はどなたかな？」

何で正門が粉々になつてるんだ・・・と考えながら粉々になつている正門をまじまじと見ていると、がたいの良い教師がつかつかと歩み寄りながら声をかけてくる。

「なに、見学に、とね」

ヤイナが無愛想な顔でそういうと、男性教師は更に訝しげに問う。

「名前と登録番号と所属学校の名称を教えてくれないか？」

男性のその問いに、ヤイナは答える。

「名前は木下桐谷。登録番号は37564。所属学校の名称は楽団を潰そうの会所属の成城高校廃棄部隊さ。あいにく学校の名前じやないがね」

男は楽団といふ単語が出てきたときにまず顔をしかめ、そして成城高校廃棄部隊と名乗ったときには既にアルマを展開してヤイナへと振り下ろしていた。

「おつと」

サツと後ずさると、ヤイナのいた地面がじつそりと抉れている。

「そりやあ第三世代のアルマか。やっぱりファーストに部分展開は難しいか？おい」

にやにやと笑いながら男性教師に声をかけると、男性教師は青筋をたててこちらをにらみつける。

「なんだよ文句あつか？」

「文句……ある……何故アルマを展開しない」

男性教師のその言葉を鼻で笑つて一蹴すると、ヤイナは挑発するよう短剣をクルクルとまわして言う。

「お前なんぞにアルマはいらねえよ。かかつてこいよ脳筋野郎」

ヤイナの挑発に完全に乗つてしまつた男性教師はアルマを全身展開し、分厚く角ばつた茶色の装甲で全身を覆つた。

「ふん、貴様のような非力な人間、押しつぶしてくれるわ！」  
ブン、と唸りを上げながら迫る装甲で固められたその拳をヤイナは片手で易々と受け止める。

「へーえ？これが非力じやない力なのか？」

ヤイナはそういうと、ハン、と鼻で笑つて右手の短剣で装甲を一瞬のうちに全て剥ぎ取る。

「第三世代型の全身装甲型のアルマってえのはな。弱点があんだけボロボロと崩れるアルマ装甲を見て、男性教師は目を丸くする。

「装甲のつなぎ目の役目をしてるアルマ粒子の結束がかなりよわくてな。突くのは難しいが突いてしまえばボロボロと崩れ落ちるだけ

だぜ

人間と、同じようにな

ヤイナのその言葉を聞いてハツとしたように男性教師は振り返るが、次の瞬間に意識は彼の手中から離れていた。

ドサリと倒れこむ男性教師をみて、ヤイナは軽い口調で言つ。

「さあ、この国のアルマを減らそうか」

ニヤリと笑つた次の瞬間に、成城高校の各所から砲台が浮かび上がる。

普通の人間ならばそれが学校に備え付けられた装備だと判断するのだろうが、目の良いヤイナは、それら全てが学校から少し離れている事に気づく。

「遠隔出現か。第四世代以降のアルマ……か。セカンド、だな」  
ヤイナがそう呟いた次の瞬間。

巨大な砲弾の雨が降り注いだ。

ダダダダダダダダダダ、と耳をつぶさげような轟音を耳にしながら、その全てをかわす。

「やつとそれなりの人間が出てきたなあ！」

飛んでくる砲弾を足がかりに更に飛び上がるのを繰り返し、学校の屋上までたどり着くと、そこにいたのは三体のアルマだった。

「へえ？お前等が嗤う骸骨楽団かい？」

ヤイナがふざけた調子でそういうが、三人のアルマは何も言わずニヤイナへと襲い掛かる。

凄まじいスピードで飛び掛る一人のアルマは剣使い。

もう一人は先ほどの大砲を出現させたであろう遠距離系。

そしてもう一人は縄を扱う中距離系。

「バランスが良い組み合わせだな。だけど残念ながら

凄まじいスピードで突きを繰り出す戦闘の青いアルマ使いの攻撃を首をそらすだけでかわし、短剣を持つ拳で腹部を思い切り殴る。ドッという鈍い音を立てて転がる近接を横目に、地面を蹴つて中に

浮く中距離系を追う。

アルマを着ていないのでここまできたのが既に人間離れしているが、それ以上に赤黒いアルマを装着した人間は驚くことになる。

「動きが直線的だぜ。折角のムチが台無しだ」

ガツと繩でできたムチを掴み取ると、思い切り引いて赤黒いアルマへ一瞬で接近して繩を持つ腕を足でホールド、身動きが出来ないようにして右手の短剣の腹で首の裏を叩く。

「馬鹿か？ 中距離のお前が急所であるところを装甲で抑えないでどうするんだ？」

馬鹿にして笑つて、次に銃を構えている白いアルマ使いへ飛び掛る。パパパ、と乾いた音とともに放たれた銃弾を短剣で弾き飛ばすと、そのまま短剣を投げつける。

ブオ、とブーストを聞かせて横移動で短剣をかわすアルマの行動を予測したかのように、その場にヤイナはいた。

「仲間の繩で気を失いな」

ヒュ、と風を切りながら迫る繩の先に着いた文銅のような錘はかわしたが、不規則に動く中間の繩に足を取られる。

「そおら捕まえた！」

ブン、と右手を振り下ろして白いアルマを屋上に叩きつける。

ボゴン！とコンクリートが砕ける音がして、その場に小さなクレーターが出来る。

それを見るに、恐らく白いアルマの世代は第五世代型。

軽い粒子防御が出来るレベルか。

しかし繩をそれで防御しなかつたところをみると、予想外の攻撃はかわせない、か。

心の中で適当にあたりを付けると、一本目の短剣を引き抜いてなげつける。

ガツとコンクリートに突き刺さる短剣を首をひねってかわしていた

アルマ使いは目をつぶらずにそのままこちらを見上げている。

「へえ、中々度胸が据わってるじゃねえか」

感心したようにヤイナは呟くと、魔法を背中に発動させる。

「終わり……だつ！」

ブン、と音がしたかと思えば、次の瞬間には白いアルマ使いの腹部の装甲を突き破ってヤイナの拳がアルマ使いの腹部を突き刺していた。

「力……ハツ」

くの字に曲がって持ち上がるあごをすぐさま引き抜いた右腕で狙い打つ。

パン、と軽い音がしたなら、それは上手く決まつた証拠だ。ガクリと崩れるアルマ使いをみて、氣を失つた事を確認する。

「・・・ふう」

久しぶりの戦闘で流れた汗を拭うと、氣を失つたために消えたアルマの中から姿を現した三人を見る。

「学生・・・か」

例の軍人学生かね、と思いながら三人のアルマを回収すると、背中に何か飛んでくるような気配を感じて前へ転がりながら回避行動をし、すぐさま背後へと視線を投げる。

「へえ、良い動きをするね」

優等生のような口ぶりで現われたアルマ使いは茶髪の若い男だった。

「なンだてめえ。何様だよ？」

めんどくさそうに舌打ちをするヤイナをみて、現われた茶髪の男は苦笑して言う。

「なんだい？ 第五世代尖鋭部隊のこの僕が現れてやつたって言つのに、敬意の一つも表さないのかい？」

「第五世代先鋭部隊？ 田舎くせえつたらありやしねえな。古臭いおもちゃ転がしていうに事欠いて先鋭部隊か。滑稽だな。笑えるぜ」ハン、と嘲笑の笑みを浮かべると、眼前に立つ男は顔を引きつらせる。

「何でもいい、来ないならこいつちからいくぞ」

ヤイナはそういうと、ダガン！とコンクリートを弾かせて弾丸のように直進する。

先ほどまでの第四世代の人間ならばこれで十分だった。しかし。

「おつと、そんな簡単に済むのは第四世代までだよ？」

スッと右腕を掲げると、男は体に力をこめる。するとどどりしたことか右腕から得体の知れない半透明なものがこちらへ向かつてじわじわと進んでくる。

(きもちわいりいな)

ヤイナは心中で舌打ちをすると、両の手を思い切り叩いてからゆっくりと離す。

「吹き飛びやがれ」

ニヤリと笑つてヤイナがそう言つた次の瞬間に、ヤイナの手のひらの中に生まれた真空がその半透明なものを受け込む。

スウ、と一通り吸い込んだとヤイナは判断すると、突然真空の塊・・・今となつては半透明な得体の知れないものの固まりだが・・・それを男へと投げつける。

「なん・・・っ！」

常識を外れた攻撃に目を見開いてあわてて後ずさりすると、男が今までいた場所で真空が破裂する。

パン！と軽い音を立てて破裂したソレは、半透明なものを勢い良く噴出した。

一瞬で破裂した場所を埋めた半透明なものが触れたモノはすべての動作がゆっくりになつた。

土煙も、落ちていく石もだ。

「へーえ？ つたく行き過ぎた技術は魔法と区別がつかないとはよく言つたもんだな？ イイモン持つてるじゃねえか」

ヤイナはそういうと、脳裏に半透明なものをイメージしていく。

「使わせてもらうぜ？」

イメージ構成が完成すると、ヤイナは不適に笑つてそう言つた。すると次の瞬間に、ヤイナの服の隙間という隙間から半透明なものが噴出しあじめた。

それは男の使うソレとは違い、出るスピードが速い。

つまり先ほどの対処の余裕をなくすことに加え、さうにひとつ決定的に違うものがある。

全身から発しているために、動くことに何も制限がない。

「まあお前がこの技を使うのに制限があるとはおもわねえけど・・・なあ！」

ヤイナは大きな声でそう叫ぶと、初激の突進の一倍程の速度で男に迫る。

「今度はかわせないぜえ！」

グォン！と風を切つてあまりにも速いスピードで迫るヤイナに反応できずに、あっけなく体を霧で包まれて鈍化され、頭を手でつかまれる。

「ぐつ・・・」

ギリ、と歯軋りをする男を見ながら、そのまま腕に力をこめる。グ、グ、グ、と万力のようにだんだんとしまつていく拳のなかで、不意に男が笑った。

「なんてな、ばかだなあ君は。自分の能力の対策を自分でしてないとでも思つたのかい？それに君は勘違いしてるだらつから言つておくよ。」

男がそれだけいうと、突然あるまの装甲が展開し、噴出口が出現する。

すると次の瞬間。

ブシュ、という小さな音を伴つて、液体が噴出される。

その噴出された液体が触れていたところから、だんだんと半透明なモノが消えていく。

「へえ？」

その現象に眉をひそめてるのを隙と見て、男は分厚い装甲をすべて

ページして石つぶのように吹き飛ばし、ヤイナを後退させて言つ。

「僕の切り札は、この速度ぞ」

ニヤリと男が笑つたと思った次の瞬間。

「うひちだよ？」

ゴン、と鈍い音が体を伝わったと思つたら、視界が反転していく地面に叩きつけられていた。

「てえっ」「

悪態を吐きながらすぐさま立ち上がり先ほどまでヤイナがいたところを見るが、そこには誰もいない。

「だから、遅いんだよ」

どこからか聞こえてきたとおもえば、先ほどと同じように殴られて学校の屋上からグラウンドへと叩き落されていた。

「ゲホッゲホッ」

口に入った砂を吐き出しながら恨めしげに前を見ると、そこには勝ち誇った顔の男がゆっくりとこちらへ歩いてきているのが見える。

「だからいつたろう？君では僕の相手は役不足だ」

「言つてろよ、馬鹿野郎」

男の罵声を真に受けずに言い返すと、男の姿が再び消える。

「殴られるだけの能無しが何を言つているんだい？」

その言葉とともに背後から放たれた拳を捕まえるのは、ヤイナにとつては容易な作業だつた。

「おつとお、危ない危ない」

拳をつかんだヤイナがニヤリと嫌な笑みを浮かべながら後ろを見てくるのを見て、男は脳裏に自分が殺される映像がフラッシュバックして思わず全速力で後ろへと後退した。

「どうこうことだ・・・僕のスピードはあの人以外見切れるものではないはずなのに・・・！」

ギリ、と悪態を吐きながらヤイナを見据えよつと視線を上げるが、すでにそこにはヤイナの姿はなかつた。

「ずいぶんと狭い世界だなあおい。お前のスピードを見切れるやつなんでこの世には『マン』といむぜ？」

嘲笑するような調子を孕んだ声色が背後から飛んできてあわてて後ろを見ると、そこにはヤイナが立っていた。

「お前はたぶん、第五世代先鋭部隊でもかなり下の下だろ？……  
といふかそオじやないと流石に戦争おこさねえと思つぜ、坊ちゃん  
よ」

ヤイナがそういうてにやりと笑つた次の瞬間には、視界が反転し、  
いつの間にか地面に倒れていた。

「なにを・・・した・・・」

ゆつくりとしか動かない口が、どこか違和感を感じさせるが、そのまま喋るとヤイナは理解してくれたように答える。

「何つてお前、お前さんの使つていた半透明なこれさ」

ヤイナは笑つて右手を肩ほどまで持ち上げて、その手のひらからふわふわと半透明なものを大きくしたり小さくしたりしてもあそんでいる。

「そ・・・・それは・・・・私の洗浄液で除去した・・・・はず・・・・  
この空間ではしばらく使えない・・・・はず・・・・」

男がたどたどしくそういうと、ヤイナは笑つて言ひ。

「そりやあ、厳密にはお前のと同じなわけじやねエからな。これはただ結果が同じしなだけだ。お前らが苦心して開発した工程とは違うのさ。言つてみれば死ぬ病と同じか。結果としてどちらも死ぬ病だからといってAの病にしか効かない薬をBに使っても意味がないだろつ? そういうことや」

シコン、と半透明な霧を引つ込めると、ヤイナは男の腰に下げられていた小さな小刀を引き抜く。

「お前、本当は第四世代を使つてるだろ? 加えて言えればその中でも実力は最下位に近いだろ? あいつらも、お前も」

ヤイナがそういうと、地面に倒れている男は悔しげに顔をしかめる。  
「まあ残念だつたな。若氣の至りですめばいい話だがこれは実戦だ。  
お前の人生はここでドロップアウトつてわけだ。残念だな、若造」  
ヤイナはそういうとわずかに微笑んで、右手に持つていた小刀をくるりと一回転させるとそのまま男に突き立てた。

「お勧め!」苦労さん

ヤイナはそういうと、学校の校舎の中をグラウンドから覗き込む。するとそこにはいつもとなんら変わらない日常が広がっている。教師が教鞭をふるい生徒が従う。

「何も見えていない・・・ってわけだ。皮肉だねえ」

世の中のこと学んでいるのにすぐ隣で起きている一大事には気づかない。

皮肉なことこの上ないな。

そんなことを考えて三人分のアルマを回収し終えると、ポケットにしまいこむ。

「しつかし第四世代のアルマってのはまた奇妙なモンにしまってんだな」

そう言ってポケットに入れたアクセサリーをまさぐると、何の関連性もない三つの小さなものを感じる。

十字架に、指輪に、ミサンガ。

「まあ、いいか」

大して何を考えるでもなく、ここには田的のモノがないことを把握したヤイナは日の国を中心にあるセンタービルを見据える。

「聞こえるか？丸ダヌキ」

ヤイナが風に声を乗せてビルの最上階にいる日の国のおに話しかける。

すると彼がビクリと体を震わせるのが、ここからでもわかる。

『きつきこえているぞ』

「そりや上々だ。俺が言いたいことはわかってるな？」

ヤイナが釘を刺すように言つと、日の国の首相はうなずく。

『わ、わかっている。戦争の痕跡を下町に残せばその時点で即刻この国に対して解体戦争を申し込む・・・だろう？わかっている。承知した』

「承知した、じゃねえんだよ」

『下町に被害を出さないことを確認する』

「それでいい」

ヤイナはそう言つと首相とのリンクを切り、同時に接続してこの会話を聞き取れるようにしていった連合国評議会へと言ひ。

「だ、どうだが？」

『う、む。異論はない。君達を相手にして勝てる気がしないからな重苦しいテノールの聞いた声でそう言つ男性の言葉を聴いて、ヤイナはそれでいい、とだけ言つてリンクを切つた。

（一ヶ国への牽制は上々・・・俺がほとんど力を使ってないのに四世代型を使ったセカンドは手も足も出なかつた。しかも四世代型のセカンドと言えば一国の主力級・・・これで十分だらう）  
ヤイナはそう言つと、外郭から外へ出て自分の家へ戻るために歩き出した。

「さ、帰つて飯でも食つて寝るか」

牽制（後書き）

隠れたところでこそ、そと工作をするヤイナさんまじ裏方。

「・・・ふう、これで終わりかな?」

ため息を吐いて埃だらけだつたへやを見渡すと、一時間前とは打つて変わつて塵ひとつ見当たらない。

「いや・・・疲れたわ・・・」

普段家事という家事をやらない口ひげべつたりと疲れこんだようにはイスに座り込む。

その様子に苦笑しながら、ルイがどこから引つ張ってきたのか紅茶セットを大きめのテーブルの上に並べ始める。

「ねえアキ、水とかコンロとかが無いのだけれど、どうすればいいの?」

ルイの質問に、アキはルイがこの部屋に着いてから目を覚ましていりという事実を思い出す。

「ああ、そういうえばルイはここに来てから目を覚ましたんだつけ。案内役を買って出てくれた大野って言う人が知ってるから・・・」

「と思つたけど今どこにいるのか知らないな」

「え・・・大野?」

何かに心当たりがあるのか怪訝そうに眉をひそめるルイを無視して、まいつたな、と頭を搔きながらどうしたもんかと考えていると、タイミング良く玄関を開けて大野が峰を引き連れて訪問してきた。

「よお、どうだ調子は・・・つてもう掃除終わったのか?早いな」

感心したように言つ大野に笑つて、疑問を口にする。

「ちょうどよかつた。こいつて水とかガスつてどうするんですか?」

アキがそう言つと、大野はああ、と言つて答える。

「ああ悪い悪い。ここは電気も水もガスも通つてなかつたな。じゃあ・・・峰、お前に任せられるか?その、件は」

大野が峰に言つと、委員長モードになつた峰はゆっくりとうなづく。

「もう何回やつたと思つてゐるんだ。もう慣れたよ」

「そりや上々だ。じゃあ俺はガスと水と電気の話付けてくるから、お前たちは峰から話を聞いてくれ」

大野はそれだけ言つと、急いだように玄関を開けて外へ出て行つてしまつ。

それを見届けた峰は脇に抱えた資料を机にドサリと置くと、アキたちを自分の反対側に座るように促す。

四人が横に並んでもまだ余裕があるぐらいのダイニングテーブルなのだから、それなりに大きいことは分かる。

「さ、て。君たちには一つどうしてもやつてもらいたいことがある。行動の制限とも取られるかもしれないな。」

頬杖を着いてそう切り出す峰の言葉に、面々は体を硬直させる。

やつぱりいくらフランクだといつても日の国人間は信頼できない・・か。

アキの心中での嘆息交じりの言葉を汲み取つたかのように、峰は訂正する。

「まあそんなに重く考へることもないさ。ただ君たちには行つてほしいところがある、それだけのことだ」

峰はそう言つと、資料の中から四枚の紙を取つてそれぞれに配る。そこに書かれたのは、シアトルという文字と大きく張られた建物の写真。

「シアトル・・・この下町と呼ばれる場所の唯一の学校だ。小・大学まで全てを網羅している学校。まあ通うのが義務というわけではないのだけれど・・・実際通つてないのもいる。さつきの大野なんかは一度も通つてないしな」

横を向いて呆れたようにため息をついて、四人に言つ。

「それと制限、というのは大野から聞いたかも知れないが、しばらくは日の国とも連合側の人間とも言わないほうがいい、ということぐらいだな」

峰はそう言つと、話は以上だ、質問はあるか?と自分の話を終わらせる。

すると、ルイがまず質問する。

「この大学・・とか高校つてどう判断するんですか？」

「ああ、それに関しては学力的に、だな。ここにはいろんな事情を持つた人間がいてな、いくら年齢が高くても文字が読めないのもいるし、その逆もいる。まあ君たちのように高校生のくせに大学生並みの学力を持った人間もいる、ということさ」

峰の言葉に、アキは体を強張らせて聞く。

この短時間で自分たちの素性がここまで知られたとでも言うのか、「なぜ、ルイとココがそこまでのレベルだと分かるんですか」

「かまをかける、どういう言葉を知っているかな？」

アキの緊張した言葉に、フ、と笑いながら答える峰を見て、やられた、という思いが心のうちを占める。

「まあ下町ではこんな感じに揚げ足を取つたり情報を抜き出そうとするやからもいる。気をつけることだな。君たちの居た田の国とは良い意味でも、悪い意味でも違つんだ」

峰はそう言つと、まあ、と言つて続ける。

「それだけにそういう輩を抑える係が居るわけだ。本人は不本意だがヤイナ・フレイニアという何でも屋の人間が居てな、何かあればそいつを頼りにすると良い。場所的にはここから西に30mほどかほとんど隣といつてもいいくらいの近さだ、そう面倒くさがあることもあるまい。また、抑える係りはヤイナ一人じゃ ain'tんだ。私達シアトルの委員会もそう言う役割を果たしててな。シアトルに通つていれば何かと簡単に力になれる。そういう意味でもシアトルに通うことを考えておいてくれると良い。」

峰はそれだけ言つと、他に質問は、と聞きなおす。

しばらくの沈黙の後、四人のうち一人だけ異質な雰囲気を放つ少女が言つ。

「アルマ・・・というものは知っていますか」

少女がそう言うのを耳にして、ココとルイは驚く。実はアルマとうのはかなり秘密裏に動かされているもので、実態はおろか名前す

ら一般市民は知らされていない実情だ。それなのになぜ彼女は知っているのか。その疑問は次の瞬間に易々と解かれる。

「これ・・・です」

パン、と軽快な音を立てて展開されたプロテクターは必要最低限のものすら粉々に砕かれている。

ソレを見た瞬間に二人は把握する。

アルマ操縦者だから知っていたのか。

少しの驚きはあつたものの、外郭の前は仲間に居なかつたのに外に居る今自分たちのように下町の外の人間として説明を受けていると、ということは外郭で仲間になつたということだし、あんな荒っぽい動きについてこれるのはファーストかセカンドぐらいだろうとあたりを付けていたために、心底驚く、というほどではなかつた。

しかし、その事実以上に驚く言葉が峰の口から発せられる。

「ああ、知つているとも。君のソレはおそらく第三世代型だらう? 峰がそう言つと、アキと少女を含めた四人は驚きに田を丸くする。「まいづれ知ることだし、今言つておいてもいいだらう」

峰はそう言つと、最近の状況をつらつらと口にした。

「こんな、どつちつかずの状況の下町だ。しかも田の国と連合国の中に居るんだ。どちらの標的にもなりえる・・・実際一昨日は・・・知つているかどうかは知らないが狂犬と二つ名が付くほど的人物がやつてきた。まあ幸い第一世代型に乗つていたためにヤイナは簡単に撃退できただが・・・そういうことはあまり珍しくない。君たちが何を思つてココにきたのかは知らないが、第三次世界大戦というこの時代だ。完全に安全な場所などどこにも無い。そこは頭に入れておいてくれ」

峰の言葉に、四人はうなづく。

「ま、今この下町が本気を出せば、田の国と連合国二つを相手取つても負ける気はしないがね」

ふざけた調子で言つ峰に苦笑していると、峰は話題を切り替えるように言葉をつむぐ。

「ま、くらい話題はここまでだ。次は明るい話題をしようじゃないか。今夜始まる天賦祭、名前だけは大野から聞いたかな？」

峰の言葉に、四人は再びうなずく。

「それは上々。天賦祭はその名の通りに才能を試す祭りだ。勉学、運動、知恵、技術。まあ様々な分野があるな。その中でも一番人気の分野は戦の才と呼ばれるトーナメント戦の総合格闘技のようなものさ。もちろん、本当の殺し合いではない。ルールがあつての試合さ。」

峰はそう言つと、一瞬だけ表情を暗くしてから続ける。

「それともう一つの目玉は委員戦。シアトルの委員対他のメンバーで編成されたグループで戦う組織戦……ということかな。しかし今年はまあ運動音痴がそろつてしまつてね、負けたら解散だというのに肝心の委員長であるわたしは満身創痍のこのざまでね、頼りな男も出払つてしまつていてチェックメイトをかけられているところ……なんだ」

峰はそこまでいって、自分が四人に妙な要求じみたことを言つていふことに気づき、慌てて話題を戻す。

「いや、すまん話題を戻そう。とにかくも天賦祭のどの分野でも優勝すると1000000ゴールドもらえるんだ。出場者の大体はソレ目当てだな」

峰の言葉の中に、聞きなれない単語が出てきてルイは思わず質問をする。

「「ゴールド？・・・？円でも\$でもなく？」

彼らの質問に、峰はああ、といつて答える。

「\$では円もドルもゴールドという通貨になるんだ。一応円もドルも使えるんだがそれはそれ自体に書かれた値段でだけ使える。為替のように円高だのなんだのというのは無い。1セントは1円。1ドルは100円。だからお釣りが10円硬貨一枚と1ドル札が4枚なんていう面白いことも多々ある。ゴールドというのは下町独自の通貨で、硬貨には1とか2とかしかかれていない。

円を基準に考えているが、1Gが大体200円の計算だな。2ドルでも良いが。つまり100000ゴールドというのは一千万もの大金ということだな。」

峰の最後の言葉を聞いて、四人は驚きのあまり何も喋れなくなる。「に・・・にせんまん！？」

最初に驚きの叫びをあげたのはアキだった。

「ああ、確かに普通の生活をするには多すぎる金額だが、まあここのは住民は多趣味過ぎてね、二千万でも少ない」という文句が続出。こまつた浪費家共だよ、全く」

呆れたように言う峰に、アキは恐る恐る質問をする。

「えっと・・・一番早く使い切った人・・・とか分かりますか？」

アキの質問に、峰は眉をひそめて答える。

「珍しい質問だな。まあいい。そうだな・・・ああそうだ一番早く使つたのはあの大野だな。その場で100000万ゴールド全て使つたからな」

「え、何買つたんですか？」

「天賦祭に来ていた技巧職人の売つているもの全てさ。それでも払いきれずに多少借金を負つたらしいが、それでもひつそろ返しきつたころだろ」

呆れてものも言えない、といった様子でため息をつくと、峰は続ける。

「まあ正直わたしも把握しきつていらない部分はある。下町の住人はとにかく祭りが好きでな。天賦祭にかこつけて個人間でもイベントやらなにやらあるからそちらへんで配つてるチラシなんかも目を通すといい。よかつたな、ここにきたときに天賦祭があつて。稼ぎ時だぞ」

峰はそう言つと、悪いがもうそろ傷が痛んできたから休む、といつて玄関から外へ出て行つた。

それと入れ違いに大野が入つてきて、ガスと水と電気を確認すると、ポケットからジャラジャラと音が鳴る袋を取り出してダイニングテ

一ブルに投げた。

「それ、長老から差し入れだ。せつかくの天賦祭なんだから楽しめよ、だとさ。俺は忙しいから出ちまうが、案内役は適当な人間に頼むといい。ここの人間はいやなら断るが断るような人間はあんまりいねえからな。頼めば大体案内してくれるぜ」

大野はそれだけいうと、じゃあな、といつて急いで外へと駆け出した。

大野の勢いについていいげずにぽつんと取り残された四人はとりあえず、自分の生活費として頼りになるであろう財布を開いて中身を確認する。

すると中には1と書かれた硬貨がざつと300枚ほど入っていた。

「ポンと六万円だすとかドンだけ気前が・・・」

ここの人間はいろいろとずれている。そう思ったのはアキだけではなく、四人共通だろう。

「で、どうする？ 今夜始まる天賦祭だけじゃ、どうする？ 行く？」  
アキがリビングにあるソファに座りながら聞くと、ルイと口々は今日はもう寝る、とだけ言って寝室へといつてしまつた。  
(ま、こんだけ急に状況が変わったんだから当然か)

それだけ思つと、少女へと向き直る。

「そういう名前聞いてなかつたね。何て言つんだ？」

「木下 飛花」

「へえ、木下ね。分かつた。んで？ 木下はどうする？」  
アキのその問いに、木下も寝る、といつて寝室へと引っ込んでいつた。

(なんてい元気るのは結局俺だけかい)

アキは心の中でそう呟くと、田の国に居るであらひせんきに思いをはせる。

「無事……だらうけどちよつと心配になつてきたな」

そう思つて電話をかけようと思つたが、考えてみれば電話をかける手段も、相手が今何をしているかある程度分かるよつた時計も無い。

「なんもないな」

嘆息すると、袋の中からポケットに何枚かの硬貨を移すと、寝室へ袋を放り込んでおく。

「ま、盗みに入るかどうかなんて分かつたもんじゃないしなあ」

「口が居るからたいていの盗人は返り討ちだらうじ。」

アキはそうあたりをつけると、外へと繰り出す。

玄関を開けて外を見ると、いたるところに提灯や幟が飾られている浮世離れした風景に心が躍る。

帰りに迷わないように道を確認しながら歩いているところがりと香ばしいにおいが鼻をくすぐつた。

「そういえば朝から何も食べてないな」

においをかいで空腹を覚えたアキは、においの元を探すべく少しあるくと、建物の屋根の上に大きく開いた広場のようなものに行き着く。

地面がコンクリートや草木ではなく、鉄の屋根の鉄板であつたりとか、新鮮なことばかりなのだが、今となつては食べ物を探すのが目的だ。

その大きな円状の広場の外側にぎらりと、中心に一列並んでいる。記号で言えば、のような形に屋台が並んでいる。

「うわあ

思わず感嘆の言葉を漏らしてしまったその光景は、もう二年、三年は見たことがない。

何を食べようかと屋台を見回すと、もつ口の国では見れなくなつた綿飴の屋台やかき氷など、いわゆる体に悪い食べ物の屋台が並んでいる。

全部を食べたいがそんなにお金を使えないし腹にも入りきらないだろうと、何が良いかと一番のものを探していると、ふとお好み焼きを焼いているおじさんに声をかけられる。

「おいーーちゃん見ない顔だね！新人かい！」

怒鳴り声のような声量なので一瞬怒られているのかと思つて首をくめてしまつが、その内容が歓迎の言葉だと気づくと、笑顔を浮かべて答える。

「そなんですよー」

アキがそう答えると、氣前のよそそなおじさんは続ける。

「へえ！連れさんはいるのかー？」

「ええ！」

アキがそう言つと、おじさんは鉄板の上にお好み焼きを広げて六つほど焼くと、たっぷりとソースとマヨネーズ、ケチャップで作られたソースをかけ、お好み焼きと青海苔を振り掛けると割り箸と一緒にプラスチックのタッパにお好み焼きを入れてアキに手渡した。

「歓迎祝いだ。元気にやれよ！」

陽気なおじさんに元気付けられ、お好み焼きが冷めないうちにと駆けながら家にもどると、おこしても居ないのにお好み焼きのにおいに釣られた三人の少女が目をこすりながらおきてくる。

「やあ、まだ一時間も寝てないのにどうしたんだい？」

アキが笑つて言つと、お好み焼きが好物なルイと口々はアキが持っているものを見ると一瞬で目を見開いてキッチンから箸と皿を持ってテーブルに待機し始める。

あんなに疲れた疲れたといつておきながら食べ物の事になると流石の早さだな、と呆れてものも言えずにテーブルにつくと、少し遅れてテーブルに着いた木下にもお好み焼きを一枚づつ配る。

「残った一枚は切つて分けようか」

アキがそういうつて切り分けているうちに、ルイと口々は皿の上の好み焼きを一瞬でたいらげてしまう。

「おいしいね！これアキが作つたの？」

ルイがテンション極まりといった様子でアキに聞くと、アキは苦笑して答える。

「いや、違うよ、ちょっと行つたところに屋台があるからね、そこで買つたんだ」

アキがそう言つと、屋台という単語にルイと口々は過敏に反応する。そういうえば一人とも屋台が大好きだったな

心の中でそう思いながらお好み焼きをたいらげるといふと、待ちきれな様子で玄関の前に立つ三人を連れて、通貨入りの袋を持って先ほどの屋台へと繰り出した。

\* \* \* \*

「ほあああああ！」

もはや日本語じゃないその言葉を発しながら人が出てきた屋台村の中をあれも良い、これも良いとはしゃぎながら走り回る口々とルイは、屋台の人間にほほえましい顔で見つめられている。次第に一人を気に入った屋台の主が一人に商品をおこり始める始末だ。呆れて見てみると、いつの間にか背後に立っていた肩で髪を切りそ

ろえた女性がクスクスと笑いながらその様子を見ている。

「や、新入り君」

アキからの視線に気づいた女性は、笑いながらアキへ挨拶をする。

「私は美樹よ。以後よろしくね」

青い髪をした彼女は、それだけ見れば連合國の人間の人間のように見えるが、顔立ちが日本の國の人間のようなのでハーフなのだろうか。そんなことを考えていると、美樹と名乗った彼女は妖艶な微笑みを浮かべてアキに言う。

フフ、と笑つてそう言つと、後ろに居た一輪を押す男性を引き連れて木のテーブルが置かれた一角にチラシを並べる。  
どうやら彼女はこの祭りのスタッフのようだ。

「ちょっと見てみるか？」

隣に立つ木下にそう言つと、彼女はうなずく。

「んじゃ、行こうか。」

どうせココとルイはここではしゃいでるんだからまあ良いだひつ。今はしつかりと金を払つて射的を楽しんでいるようだ。

テーブルに到着すると、チラシに印を配る。

賞金が出るようなのはそんなに無いが、とりあえず参加しようといつた人たちが続々とチラシを持っていく。

聞く話によればどうやらチラシが参加証のようだ。

「これ、いいんじゃない」

そういうつて差し出されたチラシには、つわもの求むーと大きく書かれている。

「これつて挑戦者募つて戦うつていう、あれかい？」

アキがそう言つと、木下はうなづく。

よく見て見れば、勝者には賞金200Gと書いてある。  
つまり、賞金四万円。

思わず生睡を飲んでしまう。

こここの物価の相場は分からぬが、屋台を見るに日本の國と大体似通つてゐるようだし、四万もあればこの人数でも、少なく見積もつて

も一ヶ月は豪華な生活を送れる。

「とりあえず行くだけ行ってみるか・・・」

そう言って自分の分のチラシもとると、ルイとココに声をかけて、渋る一人を連れてチラシの案内する場所へと歩く。するとすでにそこには何人かの人間がちらほらといて、開始時間まで残り10分ほどとなっていた。

どうやらこのチラシで募集するようなものは、昼間から夕方にかけて、天賦祭本番は全員楽しむといったスタンスがほとんどようだ。そんなことを考えていると、突然薄暗い倉庫の中の電気がパツと付いて明るくなる。

『レディースエーンじぇーんとるめーん!』

途中までは発音をがんばったが、後半は力尽きたのか司会の男性はイントネーションが残念な英語を披露して華麗に登場した。シルクハットを被り、燕尾服に身を包んだ小太り気味の男性が現れると、途端に会場は熱を帯びる。

会場から黄色い声なんかが飛んでいるのを聞くに、男性はかなりの人気の司会進行役なのだろうか。

そんなことを思いながら中年程度の年齢の男性から視線を外して周りを見渡すと、会場の隅に一人無言で険しい表情を浮かべながら立つ峰がいた。

(なにをしているんだろう)

そんなことを思っていると、突然背後にいた男性に話しかけられる。

「ああ、やっぱり人選が難しいんだろう」

何かを見透かしたように心のうちの疑問の答えを言い当てられた事に驚きながらも、アキは聞き返す。

「委員戦・・・ってやつですか?」

アキがそう言つと、男性は少し驚いたような様子を見せてからうなずく。

「やっぱ。シアトル在学生は今あの教育性質上・・・平和な奴が・・・  
とこうよりも運動音痴が揃い踏みでな・・・実際この町を護衛する

こともかねている委員で頼りになるのはあの峰委員長ぐらいだ。そ  
いでもって彼女は以前ここを襲つたアルマ使いに深手を負つた。つ  
まり今の委員はチェックメイトをかけられている・・・まあ人を選  
びに来たんだろうな。ここに。委員はちょうど全員が一年経過して  
て交換はいつでもできる状況さ。彼女なら勝ち目がないと悟つた瞬  
間に委員長の権限行使して全員をクビにするだろうね

「な、なんですか？」

「委員戦。前回までは顔見せ程度の遊びだったからいいんだがね、  
今回は相手さんはどこぞのシアトル嫌いの連中さ。委員が負ければ  
シアトルが潰れる。だからこそ委員戦は殺し合いでやらなるかもし  
れない。つてのがもつぱらの噂さ」

男性はそう言つと、ま、新入りも手伝つてやれるなら手伝つてやつ  
てくれよ、とだけ言つてその場を立ち去つていった。

「つまり・・・仲間に怪我をさせたくない・・・つてことか」

峰をみてそう呟くと、いつの間にか前座のこましまとした注意事項  
などを全て説明し終わつた司会の男性が一人目の挑戦者を探してい  
る。

「じゃ・・・ソウテヌネ・・・YOU！アナタ来ましょー！」

そう言つて小太り中年シルクハット男が杖でさした先は・・・

「ええ・・・俺・・・？」

\* \* \* \*

「レエエエエエエエエエエドチイイイイイイイイイイイム！  
ハリーヤアアアアア！」

レスリングパンツをはいて部隊袖から現れた屈強な戦士としか言い  
ようのない男は会場から惜しみなく浴びせられる歓声に答えるべく  
手を上げて中央へと歩み寄る。

そして筋肉隆々のその体が中央で止まつたのを見計らつて、シルク  
ハットの司会役が杖を上げてからこちらへビシッと突き出して叫ぶ。  
「ブルウウウウウウウウウチイイイイイイイイイイイイ  
ーム。期待のビギナー、下町の新星となれるか！？名前、所属不明

の若者だ！」

「えらい紹介のされ方だな……」

苦笑して部隊袖から歩み出ると、パツとライトがいつせいに浴びせられる。

成る程挑戦者を演出しておいて華やかに登場するもチャンピオンが華々しく返り討ちにしてエンド……」ついつ品書きかい内心でそんなことを思つて、チャンピオンの目の前に立つ。

「お前も氣の毒にな、そんな貧弱な体で俺に勝てるとも思つてゐのか？」

チャンピオンの余裕あふれるその言葉に会場は沸くが、アキと司余の男だけは顔に浮かべた笑みを崩さずにする。

「おいおいなんだよ緊張で表情が凍つちまつたか？」

そんな軽口を叩いて、試合を始めるために四角く浮かび上がつたりングの端へ移動する。

見てみれば、相手側には専属のマネージャーらしき人間がいる。（ま、一対何人ってスケジュールをこなす予定なんだから当然か）深くかぶつたフードの奥で、かすかに微笑む。

「久しぶりの喧嘩……か。懐かしい気分だねえ」

ルイとココの才能と見た目から、いじめられることが多くつた二人の護衛役をしていたためにそれなりの身体能力の自信はある。

「派手にやろう……」

フ、と息を短く吐くと、勢いよく立ち上がる。

「なんでもあり……勝敗は相手が負けを宣言するまで……だつたね？」

アキが確認すると、チャンピオンはうなづく。

「いいねえ新人、俺はお前みたいな無茶が好きな人間……嫌いじゃないぜえ！」

チャンピオンがそう叫ぶと同時に、高らかに「ゴング」が鳴り響く。

試合開始

心の中にその四文字が浮かび上がつた瞬間に、今まで耳を占めてい

た喚声が一瞬で遠のき、次第に消える。

軽薄な雰囲気から一瞬で戦闘体勢へとシフトチェンジする彼をみて、司会の男性は嗤つた。

「ヤハリ」

\*\*\*\*\*

登場した瞬間に、深くフードをかぶった挑戦者が新人のアキと名乗る人間だというのは容易に分かつた。

一瞬驚いたが、資金繰りという面を考えれば四万と破格なこれにてくるのは当然だろう。

「さ・・・て・・・かかつた魚は・・・でかいかな・・・?」

峰はこの大会の賞金を引き上げたのが成功したのを感じて、会場へと注視する。

カン!

と高らかにゴングが鳴り響いた瞬間に、会場にいた数人が挑戦者へと視線を向けるのが分かつた。

一瞬で雰囲気が、変わつた。

日の国出身と言つていたからそれは経験ではなく・・・才能か。まさか彼は・・・

そこまで思い至つて、峰は小さく笑つて呟いた。

「まさか小魚だと思っていたのが大型の肉食魚だつたとはね  
良い誤算・・・だつたのかね」

\*\*\*\*\*

音が遠のき、視界がスルーになる。

その視界のなかで、ゆっくりと右手をクイクイ、と捻らせて挑発をするチャンピオン。

(余裕ぶつこいてまあ・・・)

心の中でそう呟くと、10㍍ほどの距離を一瞬で詰め、挑発のために出していった右手を左手で掴んだ。

「ホールドだ、チャンピオン」

ハン、と笑つて掴んだ左手を思い切り引いてチャンピオンを引き寄せると、右拳でチャンピオンの顎を打つ。

スパン！というきれいな音がして、チャンピオンは崩れ落ちた。（呆気ないな・・・）

若干の肩透かし感を感じながら、面倒くなかつたと緊張を解く。そして一瞬で寄ってきた音が伝えた言葉は。

「まだよ！――」

声に弾かれるようにして咄嗟に後ろへ後ずさると、アキの顔のあつた場所を真下から突き上げるようにして右拳を放つたチャンピオンの姿が目に入る。

「伊達にチャンピオン名乗つちゃいねえんだよ・・・」

チャンピオンはそう言いながらゆっくりと立ち上がり、「こちらを見据えて、静かに言った。

「甘く見ていたことは謝るぜ・・・ギア、入れる」

チャンピオンのその言葉は負け惜しみでも、なんでもない。本当に最初は手を抜いていたのだと、次の瞬間に分かる事になる。キュー、と左前方から音がした。

（左か・・・っ！）

腕一本を左側に構えて防御をしたが、衝撃はがらむきの右脇から全身を貫いた。

（どうか腕だけで・・・！）

やられた、と反撃するために顔の前に出していたガードの腕を解いて左拳を右前方に居るであろうチャンピオンに放つために引き絞るが、そこにチャンピオンはいない。

「最初からこっちだ、馬鹿やつが」

声は、右後ろから聞こえた。

パン、と右腕を掴まれると、押されるだけで呆氣なくバランスを崩して足をつまづかせる。

「ちくしょ　」

倒れ際に右足を苦し紛れに放つが、それも呆氣なく掴まる。

「ホールドだ、若造」

右足を掴まれた状況で地面に倒れこんだ瞬間に、チャンピオンは腹部に思い切り拳を叩き込んだ。

「げ・・・・ふ・・・・」

胃液が逆流してくるのを何とか押さえ、への字曲がった体を直すことをしなかつたのが間違いだった。

上に引き上げられた首を左手でつかまれ、持ち上げられる。

「降参か？若造」

「ヤリと笑いながらそう言つチャンピオンの顔を、アキは右足で蹴り上げる。

少し緩んだ隙を突き、両手で左手を引き剥がすと、落ち際に回転しながら踵を横なぎに放つ。

それは後ずさりすることにかわされたが、一発は決めてやった。

「降参？馬鹿いうんじゃねえや。意地でも勝つてやるよ・・・・・！」

そう言って一瞬で集中モードへと転換する。

同時にステップを踏んだチャンピオンを見て、どこから攻撃が来ても良いように体を脱力させて、彼の動きを見切るために視界に全精力を注ぎ込む。

右足で踏み込んで左へ、そして・・・・右。

そして姿勢を低くしてさらに踏み込みながら回り込むようにして・・

「後ろ・・・・つー」

先ほどと同じように右後ろに回りこんだチャンピオンの放った拳を振り向かざまに左手で受け流し、勢いに乗ったチャンピオンの顎を右肘で打ちぬく。

カクン、と綺麗に決ましたが、先ほどと同じ過ちは犯さない。

降参と言わせるまでが 勝負。

勢いが止まつた左手をさらに引き、衝撃でバランス感覚が狂つて、チャンピオンの足を引っ掛けで空中に横倒しにした瞬間に掴んでいた左手を離し、同時に地面についていた両足も空中に振り上げる。全身のばねを使って回転しながら踵を落とすといつ、最速にして追撃としては最強の威力を誇る持ち技。

ゴツと鈍い音が響いた次には、地面に肉が打ち付けられて派手な音が鳴り響く。

この技の後には大きな隙が生じるので、一気に後ずさつでチャンピオンの様子を見るために視線を上げると、すでにそこにはチャンピオンの姿はない。

咄嗟に視界を広げると、左に一瞬影が写る。

あれは・・・まっすぐ後ろに回りこんだのか！

(無駄・・・！何度も同じこと！)

同じ要領で振り向きざまに受け流しか防御がいつでも出来る様に脱力した構えでチャンピオンを見ると、彼は左足をしたから蹴り上げるよう放っていた。

(この軌道じゃあ受け流せない・・・止める・・・！)

どうせ俊足移動を無理やり止めた後の攻撃。

スピードも乗つていらないし大した威力ではないだろう、といつのはただの希望的観測だった。

さらに言えば、その希望的観測は粉々に碎かれることとなる。

ガードは完璧だった。

角度、力の入れ具合。どれも喧嘩慣れした彼だからこそ出来たといえるガードだが、チャンピオンのけりは技量でじついうなるレベルのものではなかつた。

メキ、と音がした瞬間に、脳裏で警鐘がけたたましく鳴り響く。

(まずい・・・！)

折られる、そう脳裏で判断したアキは咄嗟に両足を伸ばして地面を突き放した。

その判断は功を奏した・・・と言えるだろ。

最善を尽くしても脳へのダメージは抑え切れなかつたのか、地面に倒れて朦朧とした意識の中、チャンピオンの言葉が聞こえた。

「若造、なかなか強いじゃねえか・・・見所、あるぜ

## 委員戦、開始

「 息を吸いながら田を覚ますと、そじせどじかの控え室のよつたな場所だつた。

一瞬自分の居場所が全く分からなかつたが、次第に記憶を掘り起こすして把握する。

確かに俺は賞金が出るあれに出て

回想を始めようとしたところで、突然控え室の入り口が荒々しく開いた。

「あ、起きてる！」

勢い良く入ってきたルイはアキの身よりも何かを案じている風な雰囲気を漂わせている。

「峰さんが、シアトルが！」

ルイの言葉に、そういうえば天賦祭なんてものがあつたな、と思い出す。そして次に記憶の表層に出てきたのはそう

「 委員戦・・・か！」

思い当たつた瞬間に、体の上にかけてあつた毛布を跳ね除けて駆け出す。

そして火で照らされた会場のそばまで行くと、そこには五人の屈強な戦士の前にたつ脂汗を軽くかいした峰がいた。

腕に委員章を何枚も付けているということはやはり・・・そういうことだろつ。

「 まさか・・・一人で・・・！」

ルイがそう叫ぶのを無視して、会場の上で交わされている会話を聴覚をフルに使つて聞き取る。

「つまり・・・お前たちの不戦敗で・・・いいってことか？」

ニヤニヤと大将の右側にたつ副将であつ男がいやらしい笑みを浮かべて峰に聞いている。

今、峰が頭を縦に動かせば、シアトルはその存在をこの下町から消す事になる。

生徒であろう姿が自分のいる場所も含めた観客席にぎらりと並んでいるが、その全てが固唾を呑んで峰の行く末を見守っていた。

しかし誰一人として、何をしてほしいと願うものはない。

願いたいことがないわけではない。

彼女の負担になりたくないと、そう思つからだ。

「なあ、ルイ。ここには学校が、あるんだ。」

アキのその言葉に、一瞬首をかしげたルイは何かに思い当たつたのか、呆れたような表情を浮かべてうなずいた。

「うん、知つてる。」

「お前、また学校・・・行きたいか」

アキのその質問に、逡巡して、答える。

「・・・うん」

「そりか。ならいいんだ。なら、戦える。俺の目的は戦いから逃げることじやあないからな・・・まあ、居場所を守るためなら・・・なんだつてするさ」

アキはその場で小さくため息をつくと、息を深く吸い込んで大きく叫んだ。

「委員長! 遅れました!」

峰がうなずく直前、会場の端から怒号が飛んだ。

もちろん、自分のものだ。

一瞬で会場全体の注目を浴びるのをそのまま無視して、つかつかと委員長へ歩み寄り、一番下にある庶務と書かれた委員章を荒々しく剥ぎ取る。

「言われていた例の委員に就く話、決めましたよ

峰の前に男どもに向かつて立ち、アキは続ける。

「委員に、就かせてください。」

そして、シアトルの命は延命された。

\* \* \* \*

「本当に、いいのか？」

峰の何度もかも分からぬ確認に、アキはうなずく。

「ええ、良いんです。俺は学校に通いたいし、通わせたい。だから・

・・戦うんです」

そう言って、アキは立ち上がる。

「君は・・・戦いから逃げるために、ここへ来たんじゃないのか？」  
峰の質問に、どこまでこの人は見透かしているんだ、と内心ため息を吐きながら答える。

「いいえ。俺は違います。一緒に連れてきたルイとココは戦いたくないからですが。俺は違う。俺はあの一人を助けるために動いてるんですよ。だからそこに何があろうと、どんな汚れたものが降る場所があるうと、俺が笠になつてやらなきゃあいけない。

その結果、その笠に偶然他人が入つた場合もある。ただそれだけのことです。」

そう言って、アキはわざとは違う、選手用の控え室の扉を開いて会場へと赴いた。

服装はいつもと同じ、髪型もいつもと同じぼさぼさに伸ばした髪。けれども決定的に違うものがあった。

「覚悟は・・・持つた。もう、大丈夫だ」

「つたくお前のせいでお、もともと動けない委員長が不戦敗で消えてくれて俺たちの勝ちでたんまり報酬がもらえたってのに。お前のせいでの無駄に働かなきやいけなくなつたろうが」

腰から下のブカブカの長ズボン以外に何も着用していない彼は、ナイフを片手に持っている。インドだからかの踊り子のような格好だとでも言えば分かるだろうか。いやそれでも分かりにくいが。

「成る程……ね、聞いてはいたけれどこれがほかの委員をクビにした理由か」

アキは言いながら、脳裏に峰の忠告を思い起す。

例年ならばただの親善試合だったが、今回は一步間違えれば死が襲う。

相手も殺そうとは思っていないだろうが、万が一というものが限界を感じたら迷わずリタイアするんだ。

人差し指を立てながらそつ言つ峰を思い出して、思わず苦笑が浮かぶ。

「お人よし……なのかただたんに他人を巻き込みたくないだけなのか……まあどっちでも一緒かね」

アキがそう言つてると、眼前の男は口を開く。

「お前、新入りなんだってな？ 何でわざわざ参加しようと思つたんだ？ やつぱりそこまでの戦いの自信はあるつてことか？」

男の言葉に、アキは笑つて答える。

「いーや？ 僕は十中八九凡才しか持たない平凡無能な高校生さ。掃いて捨てるほどいる高校生さ。ファーストでもない。ましてやセカンドなんかでもない。けれどもね、残念な事に僕は頑固なんだよ。とっても残念な事にな。だからここここので自分の意見を曲げられないんだ。呆れるほどに頭が固いのさ。無能で頭が固いなんて性質が

悪いだろ？」「

そう言つて、アキは審判に開始を促す。

「俺はもう、曲げないぜ、周りに合わせて曲げられるところを曲げすぎたんだ。もう曲がるところは、無い」

カン、と甲高くゴンゴンが鳴り響いた瞬間に、アキは動いた。タン、と石を蹴る軽快な音を響かせながら、三歩で男の懷へと詰め寄る。

苦し紛れに出てきた右膝を軽くかわすと、背後へと一瞬で回りこんで首裏へと手刀を叩き込む。

氣絶した。

この男はチャンピオンほどタフではないのか、しっかりと田を剥いている。

そして審判がゴングを鳴らそうとしたのと時を同じくして、アキの視界の隅にきらめく光が視界に入る。

咄嗟に前転してその場から立ち退くと、氣絶した男からナイフを剥ぎ取り構える。

すると男の後ろにはまた同じ程度のナイフと背格好をした人間が立っていた。

「いきなりルール無視かい？まあいいさ・・・僕だってこの集中力は切らしたくないからね」

\*\*\*\*\*

「・・・強い」

ボソリと台詞が口から漏れたころには、すでに三人目との戦いが佳境に入ったところだった。

「チャンピオンとの戦いは・・・本気ではなかつたということ・・・

？」

思わずそんなことを思つてしまつほどに、圧倒的だった。

しかしそれはただ単に相手が弱かつた、ただそれだけのことだ、と

気付けというのは、実戦経験の少ない彼女にとっては無理だということのだろう。

\* \* \* \*

「呆気なくやられましたね」

先ほどまでの似通つたような人間の三人とは明らかに持つてている雰囲気が違う一人のうち、小柄な方が大きなローブをゆらゆらと揺らしながら余裕を持つてこちらへ歩いてくる。

深くかぶつたフードのせいで奥のもこいつも、顔が分からない。

「僕も呆気なく倒せてしまつたもんね、びっくりしているところだよ」

ふう、と流石に疲れた体を重く持ち上げると、目の前にいる敵と戦うために集中をさらに尖らせることにする。

限界まで尖らせた。

そのはずだった。

いや、そのはずだった、といつのはおかしいか。正確にはそれなのに、見えなかつた。

気付いたときには右肩が至近距離にいる敵の持つたレイピアのようなもので、貫かれていた。

「なん・・・・?」

目の前に現れたのは、大きく刺青が彫られた特徴的な顔だった。

嗤つた骸骨の後ろにト音記号が描かれた見たこともないその刺青が何を意味するのか、なんていうものはしらないが、そこから発せられる禍々しいオーラはこの人間が真っ当な人生を送っているような人格者ではないことを物語ついている。

肩に刺さつたレイピアが傷口を傷つけるのを無視して荒々しく後ずさる。

(どうなつてんだ・・・全く見えなかつた・・・)

余裕を持つて立つ男を見据えて何が起こつたのかを考えていると、

男は口を開いた。

「いやあ・・・こんな生ぬるい人間に下つ端でもうちの構成員が負けていたと考えるとおぞましいですねえ・・・」

ピッ、と剣の先に付いた血を払つて、こちらへ向き直る。

（だめだ勝てない・・・勝ちようがねえだろ姿がみえねえんだぞ・・・！）

「初の、死人ですね？」

フードの下に隠れた顔が醜くゆがんだかのような錯覚まで覚えるその声に背筋が凍る思いがする。

そして、視界の男の姿が消えた。

（くそつ・・・・ここまでか・・・・）

脳裏でそう処理する。

曲がるのではなく、強制的に折られる。

初めての経験が、最初で最後になるというその瞬間だった。

\* \* \*

（速過ぎる・・・！）

「ダメだアキ君退け・・・っ！」

思わずそう叫んだ時に、左腕に付けていた腕章が一枚剥ぎ取られる感覚が襲う。

弾かれるように見れば、そこにはコロとルイが意を決したような顔で立っていた。

「君達・・・」

それは・・・ダメだ、そう言おつとした瞬間に、左腕の腕章を再び誰かに剥ぎ取られる。

何者か、と視線を投げれば、そこには紺のローブを身にまとつた不審な男が一人、しかしよく見てみればどこかで見覚えのある背格好の人間がいた。

「にぎやかにやつてるじゃあねえか。あいつらに用があつた所だ・・・

・これ、借りるぜ」

副委員長と描かれた腕章を手にして、ロープに身を包んだヤイナは峰に言った。

「それとお前たち」

ロープを着たヤイナは、ルイと口に向かつて言った。

「お前達が今からやるうとしてるのは、あいつの決意と覚悟を無駄にしようとしている行為だ。加えて言えばお前達一人が入ったことで反則負けになつてこっちの詰みだ、考えて行動しろ餓鬼」

ヤイナはそれだけ言うと、50mあまりもある戦闘中の一人へと肉薄した。

\* \* \*

もうだめだ、そうあきらめ、せめて死ぬ瞬間だけは目を開いていうと心臓に迫るレイピアを凝視していると、ふとそのレイピアの動きが止まつた。

「こいつア降参するつてよオ」

鼻にかかる声で審判にそう言つと、アキの胸倉を掴んで峰のいるところまで軽く放り投げる。

「悪いな、これからは俺が相手だ」

ヤイナはそう言つと、田にも留まらぬスピードで迫るレイピアの歯を易々と掴んだ。

「はじめての死人・・・ねえ? 残念ながらそれは

キン、と中ほどでレイピアの刃を折ると折れた刃を握り、返し拳で男の胸につきたてた。

「お前だつたな?」

ドス、と鈍い音を立てて崩れ落ちる男を掴み、後ろにドッシリと構える大男へと投げつける。

「久しぶりだな。まさか殴つ骸骨樂団に入つてるとは思わなかつたぜ。ケイツェル」

ヤイナが笑いながら言つと、ケイツェルと呼ばれた男はゆっくりと立ち上がり、リングへと上つて答える。

「貴様もこんな生ぬるいところで手をふやかしたか？フレイニア」「言つてくれるぜ、理念も何も無い犯罪集団はお前毛嫌いしていかつたか？」

「ああ、今でも毛嫌いしている。しかし私のいのことは、ただの理念なき暴走をする犯罪集団では、ない」

「へーえ？言つじやねえか学生の集まる場所を襲つたのもお前達の構成員の一人だらうが」

「あれは個人の暴走だ。断じて俺たちの理念に基づく行動ではない」ケイツェルの言葉に、頭を搔いてヤイナは答える。

「お前、前期第三次世界大戦の時に言つただろ？それは、いみねえんだよ。お前の組織の違つ派閥だらうがなんだらうが、お前の組織であることにはちがいがねエんだ。そこに区別は必要ねエ。甘いのはお前だらうが。あいつは俺と同じ思考回路してゐ訳じやネエから仕方ねえ？ちげーよ、違つんだよ」

「組織つてモンはな、一人が全てで、全てが一人なんだ。つまり、そういうことなんだよ。残念ながらな」

ヤイナがそう言つと、ケイツェルは鼻で笑つて答える。

「フン、ウイザードのお前はもつとカリスマというものがあつたものを、みすみすこんなところで腐らせたな、今の貴様からは馴れ合つた牙の無い虚勢を張るオオカミにしか見えんぞ」

ケイツェルはそう皮肉をこめた言葉を放つと、きびすを返して会場を後にする。

「しかしお前がいるとなればもう現時点でここにこだわる必要は無い。忘れるな。お前は一国を支配したつもりだらうが、お前はここに縛り付けられただけなのだと」

そう言つて、観客席の影へと吸い込まれていくケイツェルは、残されたアキ達に何か不吉なものを予感させた。が、当のヤイナにいた

つては平然と、日常的な何かが起こった程度の事でしか、今起きた出来事を把握していなかった。

けれどもそれはあらゆる意味で、良かったのだと思う。

## 新生組織の暗躍

「で?」こいつが新入りか?」

ヤイナが田を細めて、峰がつれてきた四人を見つめる。

「ええ、そうよ」

委員長モードを解いている峰がそつそつと首をかしげる。

「で、こいつらがどうしたンだ?」

別にココにつれてこないといけないなんていう決まりがあるわけでもあるまいに。」

ヤイナが聞くと、峰は答える。

「彼らを、助手として雇えないかしら?」

その言葉に、ヤイナは拍子抜けしたように脱力して答える。

「なンで」

「彼ら収入が無いのよ。知つての通り新入りだから保護してくれるような人もいるわけもなし」

「探せばどつかにはいるンじゃねえか? シアトルとか」

グシグシと頭を搔いて答えるヤイナに、峰は笑つて答える。

「まあいいじやない、副いい　『わあつたよわあつたわあつた仕方ねえな』」

いやなことを承諾してでも言わせたくない峰の言葉を途中でさえぎると、入り口が突然荒々しくあけて一人の男が飛び込んでくる。

「おお、そろいもそろつてどうしたんだ?」

飛び込んできた大野は何事かとヤイナに聞くが、ヤイナの不満そうな態度と新入りの硬い表情、そして峰の満足げな顔を見れば大体分かる。

「『』愁傷様だな・・・そんなお前にもつ一度訃報だ。長老が呼んでるぜ。ヤ一坊だけじやなく何でも屋全員を、だ。それと峰、アンタもだ。」

大野の言葉を聴いて、ヤイナはさらに不満げにうなだれる。

「あーのジジイに呼び出し喰らつてろくな目になつた試しがねえよ・・・

・・・

\* \* \*

ツカツカと、下町の主要メンバーとも言える七人は歩く。

「用は一体なんなんだよ・・・」

薄暗い屋根の下の通路を歩きながら、ヤイナはまだ気が進まなそうに大野に聞いたが、大野は答える様子もなく押し黙っている。

(ここではいえない内容・・・・・戦争・・・関係かねエ)

日の国と連合国の勢力は抑えた。

つまり今問題なのは第三勢力の存在。

嗤う骸骨楽団。

犯罪集団だといわれている彼らはこの緊迫しきつた状況のなかどう動くのか、全く推測が出来ない。

そんなことを考えていると、ルイがアップテンポな曲を口ずさんでいるのに気付く。

「なんか聞き覚えある曲だな、それ」

あまりにも退屈な道中なので、ヤイナはルイに聞いた。

はじめてあつてからまだ20分ほどしか経っていないヤイナに突然聞かれて一瞬どぎまきしてしまつが、すぐに平静を取り戻して答える。

「//ゴージックグループ『謳う女神達』の『レビュー・ソングですよ』つらつらと答えるルイの言葉を聞いて、ヤイナは脳の片隅で埃をかぶつている記憶を掘り起こした。

「ああ、確か・・・なんとかって集団の中の・・・」

なんだつたか、とヤイナが首をひねつていると、大野が答えた。

「『セクタディーワ』・・・意味は継ぐ妖精つて意味だ」

そう、そうだつたセクタディーワ。芸術集団の彼らは大多数、それ

こそ一ヶ国の合計人口の八割の心を奪つていると言つても過言ではない彼らの動きも、今後の情勢にはかなりかかるだろつ。

「つたく、こう組織が多いと覚えるのも大変だな」

謳う女神達というグループが組織に所属していたことも知らなかつた新入り達を差し置いて、古株の三人はそろつてため息を吐いた。

「めんどくせえ」

そんなことを言い合つていると、建物の森の中でもひときわ大きい家の前に出た。

言つてみれば木々の中に生える巨大な古い木・・・という雰囲気だ。そのドアをノックもせずにヤイナが開くと、中には大きな部屋があり、その一番奥にひげを生やした老人が一人座つていた。

「よおジジイ、呼ばれたから来てやつたぞ」

ふてぶてしい態度で言うヤイナへと、老人は静かに告げる。

「おぬし、やらかしたな？」

「ハン、つるせえ。役にたたねえお前のために働いてやつたンだ。金をもらつてもいいレベルの働きだつたろ？」

ヤイナがそう言うと、老人は苦笑して答える。

「おかげで一ヶ国の動きは制限できたがの、例の組織と新生組織の二つがおかげでぶつかり始めたぞ」

「例の組織と新生組織、そのどっちが謳う骸骨楽団だ？」

「もちろん新生組織が謳う骸骨楽団じゃ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナは眉をひそめる。

「つてえことは何だ。例の組織ってエのはまさか」

「そうじや。ウイザードじやよ。御主達二人が所属していたウイザードが宣戦布告と同時に活動を開始したのじや」

大方予想通りだつたその内容に、峰は一つ疑問を抱く。

「おぬし・・・達、とはどういうことでしちょうか長老峰が思わず口を挟むと、長老は笑つていつた。

「フェッフェッフェ、言つてなかつたのか？お主。」

老人がそう言つと、大野が嫌そうな顔をして答えた。

「つるせえよションベン垂れ小僧に皺が増えたかと思えば面倒なこと言いやがつて」

チツと言つて悪態を吐くが、老人の言葉はさらに続く。

「フヨツフヨツ、そ奴・・・というのも失礼だがのう、峰よ、その大野と名乗つているのはかのアルマ開発者であり連合側に交換人質として送られていた本人じや」

老人の言葉に、知識の少ない峰は首をひねつたが、ルイは反応した。「嘘よ・・・だってアルマの第一世代が開発されたのはもう30年も前よ・・・? 当時大野恭介はもう20歳前半だつたはず・・・いくら寿命が伸びたからつてこんな若い姿でいるわけないんじや・・・」

「それが妥当な反応じやの、お嬢さんしかしのう・・・理不尽なことにこの世界は常識外れな事で埋め尽くされているもんなんじやよ」

「そのとおりだ」

ヤイナが面倒そうに同調すると、大野がソレをどがめる。

「常識外れのバケモン筆頭が何言つてんだ」

「るつせえよ」

軽口を言い合う二人を咳払いで老人がいさめると、老人は続けた。

「それで、じゃ。ウイザード頭首と副頭首である御主達たちは一体どうするつもりかな?」

その老人の言葉に、今度は峰が目を丸くして驚いた。

「ウイザード頭首・・・? つてことは実質一人で第三次世界大戦を休戦に追いやつたウイザード頭首と副頭首つて・・・アンタ達だったの! ?」

「おうよ」

「指示とか面倒極まりないことは全部大野に任せたけどな」といしたこともなさそうに答える一人に呆れて、本日一人目の驚きで言葉を発せない人間が生まれた。

「ジジイ・・・いや、がきんちょ、俺たちは今ウイザードではなくて下町の人間だ。それ以外には何もない。だから相手がウイザード

だらうが何だらうが、この下町に危害を加える連中は全てが敵。それで良いだらうが」

ヤイナは吐き捨てるよつに言つと、ダン！と荒々しく扉を開けて、玄関の外に一步踏み出して続けた。

「そろそろ、時期だぜ」

アキ達には意味が分からぬ言葉を残していつたヤイナをみて、大野も続くよつに言葉を連ねる。

「んま、やつ言つこいつた。いづれくる悲劇はすでに確定事項だ。いまさらクヨクヨなやんでも仕方ねえよ。俺たちは俺たちの生きたいよつに生きる。飛んだ場所に嵐が来よつと、雷が来よつと突風が来ようと関係ねえさ。俺たちの翼はそう簡単には、折れない」

大野はそつ言つて扉を出て行つた。

二人が出て行つたのを見届けて、峰も続ける。

「この話に続きがあるとは思えませんので私も言いますが、おそらく貴方が憂いでいるような事にはなつても、この下町がなくなるといつたことはありませんでしょ。大事なのは私たちの安否じやないんですよ。この下町の、存続それ自体が一番の目的なんですから、おそらくそれは皆が分かつていていますよ」

峰もそう言つと、それでは新しい委員を迎える準備をしないといけないので、とだけ言つて、新入りを連れてその場から立ち去つた。残された老人は思つ。

「全く困つた奴らじやのつ・・・・・

\* \* \* \*

「え、歓迎会、ですか？」

アキが思わず聞き返してしまつと、委員長モードを解いた峰はうなずいて答える。

「そろそろ新学期が始まるころだ。委員の仕事も入つて君たちは何でも屋の仕事もある。今やつておかないとやる機会がもうないだろ

うしね

峰の言葉に一応は納得して、アキは言ひつ。

「でも、どこでやるんですか？」

アキの質問に、峰は笑つて答える。

「そりゃ もちろん

\*\*\*\*\*

「おい、なんでその流れで俺の家なんだよ」

呆れてものも言えないような顔でカウンターに足を乗せて座るヤイナは早々に邪魔者扱いされてどかされてしまつ。

「ほらほらどういたどいた、食べ物が置けないだら」

ずりすらと手際よく作られていつた食べ物が続々とテーブルを埋めていくのを呆然と見て、さつきの理不尽の話を思い出す。

「一番の理不尽はこいつだら・・・」

「まあまあ、ゴチになりますっ！」

いつの間にか隣に来ていた大野をとりあえず蹴飛ばして、ふて腐れる様にカウンター横に設置されたソファにどかりと座り込むと、機嫌の悪いヤイナのそばへ新人のココが歩み寄つていた。

「えっと、すいません、なんかうるさくしちやつて」

すこし shinみりと謝る彼女を見て、ヤイナは怒る気をなくしたのか、手をひらひらと振つてさつさと行けと意思表示する。

「あ、はい」

いそいそとキッチンへ引っ込んでいくのを見て、ヤイナは思つ。

（ま、緊張を隠そうとする心理は分からなくもねえし・・・仕方ねえほつとくか・・・）

ヤイナは心の中でそう呟くと、静かにソファから立ち上がりてドアを開けて月明かりにぬれる建物の森へと出た。

玄関を静かに閉めてその場に座つて、深くため息を吐くと、いつのまにか隣にいた大野がヤイナに話しかけた。

「ずいぶんにぎやかになつたもんだな」

「つるせえ限りだ」

ヤイナが嫌々そう言うと、大野は続ける。

「まあ、よ。もうあれから40年も経つんだ。そろそろ相棒の一人でも見つけたらどうだ?」

「はん、うるせえよ余計なお世話だ。俺は相棒を作るには、恨みを作りすぎた」

ヤイナが物悲しげな瞳をしてそう言うのを聞いて、大野は嘆息して言づ。

「今のお前は40年前と違うだろうが。実力は今となつちやあもう誰もお前に敵いやしねえだろ?」

励ますような彼の言葉を、ヤイナは跳ね除ける。

「守る力と殺す力。それはイコールじゃねえんだよ、お前も知ってるだろ」

「知つてるけどよ、それでもお前・・・」

「もう良いんだよ。俺はもう誰も相方には出来ねえんだ。それで良いんだ」

「独りが好きだからか?」

「独りが好き・・・だつたらこんなところにはいねえさ。ただ単純に、俺は嫌なだけさ」

何が嫌なのか、とははつきりとは言わずに会話は終わつたが、言わずとも分かるというものだ。

「大事な人間がいなくなるのが嫌ならばそこまで深い関係を作らなければ良い。それがお前の生き方か」

「あア、その通りだ」

「臆病だな」

「言い返す言葉なんざねえよ」

「言い返す必要なんざないさ。お前の生き方だ。誇れよ」

それだけ言つて大野が玄関から中に入つてしまふとしてから、ヤイナは空を見上げてボソリと呟いた。

「誇れるかよ、クソッタレ」

## 新生組織の暗躍（後書き）

久しぶりにあとがきです。

書き溜めの三分の一程度が終わりました。

いやあ私のいつものくせというか、なんというか。

色々な組織やら人間が沢山出でくるのはもうどうしようもないんですね。

最初は少数先鋭つていうような感じで、本当はヤイナと委員長、大野とアキ達だけのはずだったんですけど、どんどんと組織が増えて増えて増えて・・・もう手に負えません。

なんてことを思いながら、まだ組織があつたりします。

自分で言つて自分で呆れきましたけれどもまだまだ続きます！

## 初めての依頼

どんちゃん騒ぎが終わった翌朝、カウンターに座るヤイナに話しかける初老の老人がいた。

「ンで？ 何の用だ」

にらみを利かせているのかは分からぬが、ともかくも新人四人がすくみ上がる様なヤイナの言葉と態度に、老人はうろたえもせずに答える。

「いやなに、いつもの依頼さ。毎回天賦祭の後夜祭で出る暴漢がまた出たんだよ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナは呆れたように言つ。

「まあたか」

「残念ながら、まだよ」

「ンで？ 報酬はいくら出すんだ？」

「今回はファーストが一人いるからね。ファーストが一人当たり100G。一般人なら50Gでどうだい？」

「暴漢の総人數は？」

「不明だ」

一通りの条件を確認すると、ヤイナは頭を搔いて言つ。

「委員に任せらんねえのか？」

「彼女たちはいい意味でも悪い意味でも口に当たる側だ。何かと都合が悪いのさ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナはさらに呆れたような表情になる。

「つまり・・・そオいうことか」

「ああ。 そう言う事だ」

「ソレも解決しろつて事か？」

「解決してくれたらさらに200G上乗せしよう」

「・・・・・仕方ねえな・・・・」

ヤイナは逡巡した後にため息を吐くと、ソファで固まつて座つてい

る四人に声をかける。

「おいお前ら、暴漢を捕まえて来い。アルマに乗つていのファーストも倒せないようならここにはいらねえ。捕まってきた奴の報酬は全員お前らにやるから、がんばるこつた」

ヤイナはそう言つと立ち上がり玄関から外へ出ざまに続けた。

「せいぜい死なねえこつた。お前らが死んだら峰の奴に怒られるのは俺だからな」

あいつは面倒なんだ。と愚痴るようにこぼすと、外へと出たヤイナは近くにあいている穴からまつすぐ下へと飛び降りていった。

「え・・・ちょっと・・・」

ルイが訳が分からぬといつた様子で引きとめようとしたが、その声はヤイナに届かなかつた。

「ふむ。君達はこのメンバーなのかい？」

まだ部屋にとどまっていた老人は、興味深げに四人に話しかける。

「はい」

アキがうなずくと、老人はうれしそうに答えた。

「峰君の押し付けかもしれないが・・・うれしいねえ」

二ツコリと笑う老人は、続ける。

「新入りに頼むようなことじやないかもしないが、彼を、ヤイナ君をどうか頼むよ」

老人に思いもしなかつた言葉をかけられ、四人は動搖する。

「い、いや。私たちが守られていますし、とても助けが要るような人には見えませんよ？」

「ココが思わずそう言つと、老人は笑つて答える。

「そう見えるがね。私は彼との付き合いがそれなりにある。その全部を見て思うよ。彼は寂しがり屋だ。どうか、頼むよ。わしもがんばつてきたがもうそろそろ寿命が来てしまう。峰君と大野君。加えて君たちがいてくれれば、もう心配はないよ。どうか。頼みます」老人に頭を下げられ、さらに動搖する四人を置いて、話は続いた。

「さて、その前に信頼を掴まないといけないね。君達、町で暴れて

いる連中を引つ立てて来てくれないかい？」

老人の言葉に促されるように、四人は外へと繰り出すると、先日行つた屋台が大量にあつた広場へと向かつた。

「暴漢・・・って。いやねえ」

「ゴゴが少し残念そうに言つと、木下が答える。

「日の国でも祭りの後は暴漢が後を絶えませんでした。祭りで気分が昂ぶつてしまつてその気分をぶつける先がない人間が集まつた結果が暴漢なのでしょう」

木下も残念そうに言うと、ルイもうなづく。

「でも、まあそれを防ぐ側の私たちが嘆いても始まらないわ。さつさと行動しましょう」

「何か賞金稼ぎになつた氣分だな。」

アキの言葉に、ルイは苦笑すると、ふと頭上を影が通過した気がした。

「賞金首のお出ましたぜ、お嬢さん方」

突然背後から聞こえた声に弾かれるようにして四人は前へ跳んだ。

「いい反応するねえ、キミタチ」

ぼさぼさに伸ばしたその髪は見ての通り、と言つ他ないだろう。骨ばつた手にはナイフを握つているのを見れば、確証を持てる。

「いや思つた以上に速いね、出てくるのが」

アキが冷や汗をかきながら言つと、暴漢は隙間だらけの歯並びを見せて嗤う。

「手間が省けただろ？』

嗤う暴漢を見て、思わずアキ達も引きつった笑みが浮かんでしまう。

「うれしいね、大人数で大歓迎とはやってくれる」

アキがそう言うと、暴漢は少し驚いたように目を丸くして手をサッとかざして何か合図をする。

するとすぐに、建物の間という間からざつと見10人ほどの人間が続々と出現する。

「ファーストがいるかどうか知らないけど、これ全員で2000G

か・・・いい値段だね全くうれしこよ」

皮肉をこめてそう言うと、ルイとローニー合図をする。

『逃げる、家で落ち合つた』

二人がその合図の意図を掴む前に、アキは行動を開始する。

「さあ捕まつてもらおうか！」

アキはそう叫ぶと、瞬にしたから上へと伸びるパイプを思い切り蹴飛ばす。

するとそのパイプから白い蒸気が噴出し、一瞬で周囲一体を真っ白に染める。

相手もそれなりの腕だったのか、寸分たがわぬ正確さでこちらへ肉薄してくる。

真っ白な視界から突然生えてきたナイフを持った拳をからづじて掴むと、そのまま握りつぶす。

ゴシャッといやな音が響くのを気にせずに、落下中のナイフの柄を受け止めてその先にあるであろう首めがけてナイフを思い切り突き出すが、その突きは何者かによつて止められる。

一瞬身構えるが、止めるだけでいつまでたつても追撃が来ない。いつ攻撃が来ても良いように身構えていると、そのうちに霧が晴れてしまつた。

誰かの手によつてパイプが補修されていたようだ。

晴れた視界の向こうには、碎けた右手を抱えて転がつた男と、アキの右手をしつかりと握つて離さないヤイナが居た。

「一体、何のつもりですか？」

依頼を任せたのに最後までやらせてもらえなかつた。その気持ちが先行しての言葉だったが、ヤイナは大して取り合うでもなく答える。「やり過ぎだ。馬鹿が。賞金首は生きててなんぼだ。殺してどうする」

「

その言葉に、今自分が相手を躊躇なく殺そうとしていたことに気が付いて愕然とする。

「その顔、自分が何しようとしていたか気付いてなかつたみたいだ

な

大して驚くでもなくヤイナは言つ。

「はじめての命をかけた殺し合いだ。やりすぎちまつたってことはあつて当然なんだ。柄じやねえが励ましておいてやるよ」意外なヤイナの行動に面食らつて少しの間何も言えずにはいるが、ヤイナはふと視線を鋭くして続ける。

「後な、柄じやないついでにもう一つだ。お前のその戦い方。それじゃあそう遠くない田に壁が来る。気をつかるひつたな。今日はもう帰つて良い。報酬は後日届ける」

ヤイナはそれだけ言つと、いつの間にか一つの箇所に纏めていた暴漢たちをひょい、と抱き上げると、瞬く間にその姿を霞ませて消えていった。

「・・・・壁・・・・？」

ヤイナの言つた事がいまいち理解できずに、まあいいか、と判断を下して帰路へと付いた。

その様子を一部始終見ていた男が一人、屋根の裏に潜んで笑っていた。

「あのヤイナに気付かれずにやり過ぐせるとほ俺も強くなつたもんだ・・・いつの日かアイツを殺すのもちやんとした目標になつて來たかつ」

心中で手こじたえを感じてガツツポーズをとつて打倒ヤイナ案を考えていると、まず回りにいるのから消してしまおう、という結論に至つた。

「あいつのあの戦い方は・・・使えるな」

不敵に笑う男の真意は、分かりやすい。

「自分から分断してくれるならうれしいことこの上ないぜ。そうと分かれば早速仲間集めだ」

## ファーストコンタクト

「おいヤイナ！後もうちょっとで新学期だぞ！」

バタン！と突然入ってきた峰を見て、ヤイナは突然意氣消沈したようすに顔をだらけたように緩めたのちに、そそくさとカウンターの奥へと引っ込んでいこうとするが、それを峰は服を掴んで止める。

「ほらほら、君には仕事があるだろう？」

一応はその場にいるアキ達に配慮してなのか、何が、とは言わないうが、当事者である二人には十分すぎるほどの言葉だ。

「あの場のノリだつたんだ許せ。俺はやりたかねエ」

たじろいで後ずさろうとするが、それを服をがつしりホールドした状態で離さない峰が許さない。

「そんな理由で辞退が許される訳ないだろ？ほらお前のポストもしつかり取つてあるんだ。新学期になつたら行くぞ」

そんなやり取りをしている二人を見て、報酬で買った新たな服に身を包んだルイが言う。

「え、ヤイナさん学校行くんですか？」

驚いたように聞くルイを、ヤイナは即座に否定する。

「ンなわけねえだろ人間失格レベルに妄想癖の激しいこの腐った髪ぶら下げたヒトモドキがハシャいでるだけだ」

グサグサと心に突き刺さる言葉を言つヤイナの胸倉を乱暴にひつかんで無言で拳を振り上げる峰を、口々が慌てて諫める。

「と、とにかく。峰さん落ち着いて」

冷や汗を流しながら峰をどうぞと落ち着かせようと頑張る口々をよそに、ヤイナは続ける。

「胸倉掴んでなんだよキスでもしたいのか発情娘」

「聞き捨てならないにも程がありますよ……？ヤイナさん……？」

峰が委員長モードに入りし、口々が争いに巻き込まれて命を落とす

ことを覚悟して脳裏に走る走馬灯を懐かしげに見ているときに、バタン、と玄関を開ける一人目の闖入者が現れる。

「おおなんだお前らそんなに近づいて。キスでもするの？』『ゴホア

！』『

いい天氣の朝にテンションが上がつて気軽に軽口を言つてしまつたのが運の尽き・・・いや、この場面に居合わせたのが既に、というべきかもしれないけど。

とにかくも壁でワンクッシュョンおいて地面に崩れ落ちた大野を見て、峰はハツと我に返つて周囲を見渡し、ヤイナを除く全員が引いた目でこちらを見ていることに気がつき、恥ずかしそうに「ゴホン」と咳払いをして話を始めた。

「ゴホン。まあさつきの件はついででしかないの」

委員長モードを解いた峰は、依頼を持つてきたと前置きをして続けた。

「依頼、といつても私もやるから頼みっぱなしってわけじゃないんだけどね」

「なんでも良いから速く説明しろって」

ハア、とため息を吐いて言つ峰に青筋を立てる峰を見て、ココが慌てて落ち着かせる。

再び我を取り戻して咳払いをする峰をみて冷や汗を袖で拭きながら友達のいるソファへ戻つて思う。

（私つてこんな役柄だつたつけ・・・）

そんなことを思うココの表情があまりにも疲れきっていたのか、隣に居たアキがどんまい、と言つて肩をたたく。

（それリストラ・・・）

そんなくだらないやり取りをしている横で、依頼のやり取りがなされていた。

「つまり何か、新学期に大きめな教室作りたいから今使つてない教室の壁をぶち抜いてでかい教室作りたいって事か？」

ヤイナが纏めて言つと、峰はうなずく。

「それ、俺が手伝つ理由ねんじや……いや、そうだったな」  
言葉の途中で峰の服の端からのぞく包帯を見て、ため息を吐いて立ち上がる。

「仕方ねえな。いくらだ

「20Gでどう?」

「お前40000円で壁ぶち抜けつてのか。俺は公式設定では非力なんだぞ」

「学校の中での作業だから関係ないわよ」

「あのなあ・・・」

仕方ねえな・・・と言つて、未だ意識を取り戻さない大野をそのままに、一行はシアトルへと出発した。

新人は依頼が来たときよつにここへ残るうかと提案したのだが、それはヤイナに一蹴された。

「お前等がいたつて何でも屋の一員だとは思われねえよ。それにお前等学校通うんだろうが。場所、分かるンか」  
ヤイナにそういうわれてあつさりと納得したルイ達はおとなしく付いて行く事にした。

\* \* \*

10分ほど曲がりくねつたところを歩いて、ハナから覚える氣などなかつたアキを除いた三人は記憶に混乱が生まれる。

「もう分からないわ・・・」

かつて整理されていた道が通つている町に住んでいたルイとローハは、道を覚えられないという未知の経験にげんなりしてやる気ゲージが100から4ほどにまで減つたと呴くと、先を歩く峰が苦笑して言う。

「まあそつ氣に病むな。もう少しだ。」

その少しがここの人たちは遠いんだよな、と心中でアキが思つていると、30mほど進んだ突き当たりを曲がる。

なんか書いてあるな、と地面を見てなんだただの汚れか、と多少肩透かし食らって顔を上げると、そこには長老の家の10倍はあるとかと言う意味が分からぬほどに大きな建物が田に入つた。

長方形のその建物は、端から端まで300mはゆうにあるだらう。おそらく見えてないだけで実際はもっとありそうな雰囲気がある。高さと言えば・・・したが地面だからおよそビル八階立てか・・・。呆然と見上げる四人を見て笑つた峰は、しばらくの間を置いて言った。

「(口)はね、学校と同時に学生寮の役割も果たしているの」

その説明を聞いて、納得したアキは、ふと思つ。

「それでもこんなでかい・・・んですか？」

「ええ。(口)の学生はほとんど全員学生寮に居るからね。これでも後もう少しで空き部屋がなくなりそうなのよ」

峰の説明を聞いたルイは、ふと疑問を覚える。

「一家丸ごと住めるんですか？」

その質問は、まあ当然といえば当然だらう。そうでなければ全員が全員家族と住んでいないということになる。こんなに近ければ半全寮制の必要性も感じないし、そんなに品格を重んじるところでもなさそうだからなあさらだ。家族全員で住んでいるのか、と疑問に思うのは仕方がない。

「いや、全員子供だけよ」

峰の言葉に余計に頭に浮かべた疑問が強くなつたルイはもう一度質問をする。

このあたりで、(口)とアキや木下は大体の予想が付いていた。

「え、じゃあいつ家族に会えるんですか？」

「もう、会えないわよ」

ふ、と柔らかくも悲痛な表情で笑う峰を見て、アキ達は胸が締め付けられるような想いに駆られる

今まで自分たちが悲劇の主人公だと思っていたところはどこかにあつたんだと、今氣付く。

「ここはね、田の前で家族を殺されたり、もつとひどい田にあわされた子達がたくさんいるの。それこそ、死んでしまおうと思つたやうにひどい程にひどい目にあつた子達が」

ギリ、と奥歯をかみ締める隣で、ヤイナは飄々と立つてゐる風景は、なかなかに異様な光景だ、と思つてしまつのは場違いだらうか。そんなことを思つてみると、ふと峰は表情を一転させて悲痛さを少し柔らかくさせた顔で続ける。

「でも、今はそんな子達が元氣に生きてゐる。まだ立ち直つていない子はいるけれど、でもそれでも、治つた子はたくさんいるわ。だから、他の子だって」

これから事を語る彼女は、この場所がいかに素敵な場所か、といふのを語つて、ヤイナに同意の声を求めるために話題を振つた。

「ね、ヤイナ」

「ハン」

明るく接する峰をはねのけるよつて答えるヤイナの反応に、少なかれど一行の心象は悪くなる。しかしそんなことを気にせずに、峰はヤイナへあらかじめ頼んでいたことを開始するようお願いする。

「おいや、アキとか言つたか、お前」

ス、とアキを指差して言葉をかけるヤイナに驚いたよつて反応したアキは、噛んでしまう。

「は、はひ」

「なに馬鹿やつてんだ。ちょっと力試しだ。来い。中庭借りるぞ」峰の返答も聞かずそそくと歩き出すヤイナを慌てて追うアキ達を見送つてから、口は頬を膨らまして言つた。

「なんなんですか、あれ。せつかく峰さんが声かけたのに。」

怒つてそう文句を言つ口とは反対に、木下と峰は物哀しげな表情でヤイナを見ていた。そしてふと木下が口を開く。

「彼は、いろんな意味で、この戦争とかかわりを持ちすぎた。その代償・・・過ちを犯したのは彼じゃないけれど、彼は代償を負つて

いる。そんな理不尽、矛盾……」

ぽつぽつと喋る木下の言つた内容は、戦争と全くかかわりを持つてなかつたココとルイの二人にはなかなか理解という領域に到達することはない内容だった。

たとえ両親が戦争で居なくなつたとしても、ただ居ないだけ。そこに並大抵のことでは埋まることはない穴があつても、広がりはない。

けれども彼は、現在進行形で広がり続けて、すでに余裕は虫に食われている葉のように残りが少ない。

「埋めてあげられるかな」

不意にポソリともれた言葉は自分でも予期してなかつたのか、峰は顔を真っ赤にしてブンブンと顔を振つて自分が言つた言葉を「まかすと、案内をするためにシアトルへと足を進める。

そんな彼女を見て一行は思つ。

（純情すぎる・・・といつか分かりやす過ぎる・・・）

\* \* \* \*

「で、一体こいつはなんなんですか？」

開いた口がふさがらない、といった様子で立ち呆けるアキの目の前には、しきりに髪の毛を氣障つたく払う金髪の男がいた。いわゆるエリートなのだろうか。どちらかといつと世間知らずのいいとこのお坊ちゃんのようだが。

「さあな。こいつと戦つておけと峰委員長サマが言つてたぜ」

退屈そうにどかりと座り込んで、大して興味もなさそうに頬杖を付いてアキと男の行く末を見守るようにこちらへ視線を投げてくるやイナ。

（やりすらいなあ・・・）

ジッと見られると緊張して体が動かなくなるタイプ・・・ではないけれどやりにくい状況に違いはない。

「フン、峰さんの隣に居るのになんな貧弱は相応しくないのだよ」

「・・・・ん? 何の話だい?

アキが彼の言つてゐる意味が分からずに聞き返すと、憤然と足を踏み鳴らして答える。

「彼だよ彼！ヤイナだ！あのひょろつこい貧弱があの強くて凜々しい峰委員長の隣に良くいると考えると腹立たしい事極まりない！」  
ダンダンーと足を踏み鳴らしながら説明する彼の言葉をきいて、やつと誰のことを言っているのか理解する。

(ヤイナさんが貧弱…………?何を言つてゐるんだ……?)

公式設定では云々書いていたのせやつまう」とか、とじぱらく都えてから答えを出すと、なるほど面倒な設定をしてくるものだな、と思つ。

「どうか君、そんなに峰委員長が好きなのかい？」

アキの突然の脈絡が大有りのその言葉に、彼は一瞬動きを止める。  
そしてどもりながら答える。

なエリート中のエリートが相応しい。」

彼の言葉を聞いて、万キは思つた

表情には出さずに内心だけで思つと、ヤイナの急ぎの催促によつて

すると次の瞬間に、彼の今までのギャグのような雰囲気から、一瞬で針で肌を刺されているような感覚にとらわれるような殺氣を吐き出す修羅のような表情へ変わる。

ゾクリ、と背筋を寒いモノが奔る。

戦闘で一番やつしはいけなご」とをやつたと氣付いたときには遅かつた。

ゾン、と鈍い音を響かせて一瞬で展開されたアルマを纏つた気障な

男は一瞬でブーストを展開。

次の瞬間には体に衝撃を感じるまもなく地面に倒されていた。

何が起こった、と思うほどの余裕もないアキは気障な男の芝居がかつた言葉でアキの敗北宣言を声高に言うのを大人しく聞くほかに選択肢は残されていなかつた。

「くそつ・・・」

ギリ、と奥歯をかみ締めていると、いつの間にか歩み寄っていたヤイナに顔を覗き込むようにして見られながら言われる。

「やっぱりお前はノーマル、だな」

ボソリと呟いた彼の言葉に多少頭に来たアキは、反抗するように言う。

「あの人は、どれくらいなんですか」

「ファーストだぜ」

ハン、と鼻で笑つて顔を上げると、氣障な男は命知らずにもヤイナへと挑戦状を叩き付けた。

「ついでだ。峰さんの隣の座をかけて勝負しないかい？」

「やりと笑つていう男は、弱すぎて実力差が分からぬのかそれとも単純に馬鹿なのか。

まあ両者か・・・

アキがそんな相手に負けたのか、と内心ため息を吐いていると、以外にもヤイナは勝負を受けた。

「良いぜ。峰の隣なンぞ興味はねえが売られた喧嘩は買う性質だ。たが」

ルールはナシ、か?」

ヤイナが不敵に笑いながらそう言つと、氣障男はサラリと髪をかき上げて答える。

「一応君のために降参アリといつルールを設けよ。降参と言つかりザインと言えば勝負は終わりだ。」

そう言つ男の言葉が終わるのを待つて、ヤイナは言つ。

「じゃあ、はじめだ。来いよ餓鬼。思い上がつたその鼻つ柱へし折つてやるよ」

ヤイナが軽く挑発すると、一気に顔を上気させた男が一瞬でアルマを展開。そしてかろうじて影が見えるといつレベルの速度でまっすぐヤイナへと突進していった。

アキ自身もヤイナの戦闘は始めて見るので、どんな風に戦うのか観察したかった。

だから目を見開いてどんな行動も見逃さないようじてまことに目を皿のようにして見ていた。

にもかかわらず。

いつの間にか気障な男が地面に片手で組み伏せられていた。

「え・・・・?」

あの速さを殺して、しかも完全に見切つて組み伏せた・・・・?

(化け物か)

改めて内心でヤイナの化け物じみた身体能力に舌を巻く。  
左手を腰に当てて、利き腕ですらない右手で手ごと背中を押されて  
いたヤイナはふう、とため息を吐くと立ち上がって言つ。

「今の俺の動き、全く見えなかつただろ?」

ヤイナの言葉に、気障男は静かにうなずく。

「そこがお前の現在地だ。お前はまだ山すら見えてねえ。スタート地点にすら立つてねえよ」

ヤイナはそのままから毒を吐くと、何事もなかつたかのよつてその場を去つた。

「その気障男にここを案内してもらえ」

どこからともなくその声が聞こえたのは、戦闘が終わつてもつ口も傾き始めた夕暮れの事だった。

## ファーストコンタクト（後書き）

初めてのファーストとの戦闘、

「以上、シアトル全域だ」

ふう、とため息を吐く気障男の案内は、何度も遠慮したくなつたことか数え切れないほどに高圧的で分かりにくかつた。

実際、まともに頭に入つたことといえば入り口ぐらこのものだ。

「ありがとうございました」

一応曲がりなりにも案内してくれたという建前、男へお礼をすると、男はフン、と鼻を鳴らして言う。

「お前、私と戦つたときに手を抜いたな？」

気障男がそう言つので、思わずアキはびくりと肩を震わせる。

「わざとかどうかはまあさて置いて、だ。」

「手を抜いてなんか、いませんよ。僕はあの通りノーマルであり、無能人間です」

両手をひらひらと振つて気障男の言葉を否定すると、気障男は答える。

「フン、世の中にはファースト、セカンドとも違う強さがあるものだ。お前はもう知つてるだろ？？」

気障男の言葉を聞いて、脳裏に不敵に笑うヤイナの姿がフラッシュバックする。

「まあ、アレの動きは計り知れない。普段は貧弱者だと聞いていたが、どうやら違うようだな」

まったく狐にでも包まれた気分だ、呆れる。と言つと気障男は昇降口の大きな戸を開けて外へ出る。すると、外はもう真っ暗闇だった。

「夜、だな」

気障男が誰に言つてもなくそつ呟くのを聞いて、アキは小さく頷く。

「まあ、また来るといい。今度は生徒としてな。そのときは今度こそ決着をつけよう」

気障男に言われて、拳を「ツン」と軽くぶつけると、一人はそれぞれへの家へと買えるために背を向け合つた。

アキは少し歩いて路地に差し掛かつたところで、ふと振り返つてシトルを見上げると、自然に笑みが浮かんできた。

「決着をつけよう・・・か」

こんな興奮する言葉が世の中にはあったなんてね。心中でそう呟くと、アハツと笑つてきびすを返してアキは路地へと消えていった。

＊＊＊＊

「ただいまー」

ガチャ、とゆっくりと家の扉を開けると、一番最初に田に入ったのは、リビングにあるソファに腰掛けて分厚い本をペラペラとめくるルイだった。

「何だそれ？」

いまさら異変と言つようなものではないけれど、しかし氣になつたアキは聞いた。

「どうもこの世界に伝わっていた伝説・・・のような物ね」

珍しくメガネをかけたルイが、興味深げに本を掲げてアキに言つ。

「よくある英雄譚のようなものよ。世界を救つた。英雄の話」

ルイの言葉を聞いて、アキは言つ。

「へえ、お前の好きそうな物じゃんか」

アキは茶化してそう言つが、ルイは真剣に答える。

「ええ。これが創作物なら問題は無いの。これもまたただのフィクションだと割り切つて言えるわ。ただこれは事実で、私の最も好む分野なの。つまり、これが何を表すか、分かる？」

ルイの言葉を聞いて、アキは思った。

(ルイはこの分野、つまりノンフィクション英雄譚というものが大好きだ。とある傭兵の話だと、一人で一部隊を屠つた人間の話だ

とか。彼女はその系統の話が大好きで、戦争前に全世界トップの品数を誇る図書館に一ヶ月缶詰になつて全てを読破したといつてた。そしてこの本を見るに、紙の日焼け具合等からして少なく見積もつても15年以上は必ず経つてゐる。といふことは……だろうが、

（）  
「隠蔽なんてして誰が得するんだよ？」

思わず頭に浮かんだ疑問を口にして、ルイも頷く。

「ま、その程度の問題なんだろうけれど、でも新しい本が見つかつたって言つのはうれしいわ。私はしばらくこの本を読むことに専念するから、色々よろしくね」

ルイはそう言つて、再び本を開いて読みふけり始めた。

アキもここまで言われて興味が出ない訳が無い。

気になつて表紙を見て見ると、そこにはこう書かれていた。

”聖騎士皇紀連”

「妙な名前だなあ」

特に何を思うでもなく、覚えてたら明日峰さんあたりに聞けばいいか、とだけ思つて良いにおいがするキッチンへ行くと、木下に教えながら料理を作る口の姿が。

「あれ、お前料理教えられるほど上手かつたっけか？」

思わず言つてしまつてから、ああこれは下手つたな、と思つた瞬間に。

スカン！

と、乾いた音が響く。

ちらりと光るもののが横にあると思つて視線を動かして見ればそこには黒光りする包丁が。

「いやいやいや危ないって一步間違つたら死ぬつてば  
冷や汗をびっしりとかいて一本田を構える口に慌ててそう言つと、

口は一度ニッコリ笑つて包丁を納めた。

これはまずい後でこつてりと復讐されるフラグがビンビンです

そんなことを思いながら部屋へとすこすこと戻つてベットに腰掛け

る。

「ふう」

ため息を吐くと、突然疲れがアキの体を襲つた。

そういうば来てからまだ一日目か…ベットに倒れ込んで、腕を皿の上にかかるように顔に乗せ、電気を遮断する。

モンキの協力を得て外殻を脱出。

トンデモ芸を繰り広げて無事に。

マイホームが出来て、年一回の祭りに参加して、

いつの間にか唯一の学校の委員になつてゐる。

「ハピニングアクシデントのオンパレードだな…」

改めてハードスケジュールだったと思つてもつ一度深くため息を吐く。

しかし、今の「」やルイ達の様子はそれなりに活き活きしているから、悪いことをした気にはならない。

二日程度で何が分かるか、なんてことは分からぬけれども。けれども今この時点では、良かつたと思うしか、無い

## 旧友

彼等が学校訪問をしてから三日 時間は順調に、平凡に、平坦に流れ、彼らは休暇を得て、今は買い物へ行っている。

「ンで、一人でゆっくりできると思つた矢先に・・・依頼か

「ええ、依頼よ」

はあ、と大きくため息を吐いて、カウンター越しに峰を睨み付ける。「で? 何のようだ

ヤイナが聞くと、峰は少し間を置いて言つ。

「ヤイナは結構年取つてゐるよね」

委員長モードじゃないのか、それなら大した依頼じやあなさそうだな、と思いながらヤイナは答える。

「ああ

「じゃ・・・ためしに聞くけど、聖騎士皇紀連・・・って知つてる?」

峰の口から出した予想外の言葉に驚きながらも、ヤイナは頷く。

「昨日ね、聖騎士皇紀連の連長である男の子供だって言つう13歳ぐらいいの子がシアトルに連れてこられてね? それで今日親を探してあげようと思ったんだけど・・・朝気付いたら逃げちゃつて・・・」

峰の言葉をそこまで聞いて内容を把握したヤイナは呆れたように言う。

「子探しを手伝えつてか

ヤイナの言葉に、若干顔を赤くしながら頷く峰。

「アホか・・・こいつ・・・」

「本当なら人数が多い方が良いんだけど・・・アキ君達はいま休暇でしょ?だからヤイナに頼もうと思って。」

「くつだらねえ・・・」

ヤイナがそう言つて依頼を断つると、突然ドアが勢い良く開

け放たれる。

「ここが何でも屋ね！」

幼い高い声が部屋を反響した。

「おいおい・・・〔冗談じやねエ」

幼い金髪の少女の姿を田にした瞬間に、ヤイナはげんなりとイスに崩れ落ちる。

「何だ・・・知り合いだったの？まあ依頼は・・・」

峰が依頼の完了を告げようとするのを、ヤイナは言葉でさえもいる。

「終わりじゃねえ。残念だがサービス残業だ。餓鬼」

面倒そうに立ち上がって、ヤイナは子供の頭へ手を乗せて言つ。

「お前の親父、殴りに行くぞ」

\* \* \* \*

「何の、つもりだ」

買い物に行く途中のアキがギロ、と睨んだその先には、ナイフを構えた男が一人、戦闘体勢でその場に立っている。

「決まつてんだろ？お前達は、邪魔なんだ」

ニヤリと笑う男はナイフをクルリと回して、地面へ煙球を投げつける。

一瞬で視界が白く塗りつぶされる。

「逃げろ！」

アキが叫ぶと、弾かれるようにして響く足音が耳に入る。

(退避完了・・・あとは)

何時敵が襲つても良いように全神経を尖らせる。

しかし、何時まで経つても敵は襲つてこない。

「・・・・・ん？」

流石におかしいと思い始め、視界が晴れると、そこには誰も居ない。残されたのはたった一つの手紙。

”三人は預かつた”

その文章を見て一気に汗が吹き出る。

「やられた！」

\*\*\*\*\*

「お兄さん、私のお父様を知っているの？」  
いかにもといったようなドレスを纏つた少女は、これまたそれらしい言葉遣いでヤイナに聞く。

「ああ。お前の親父は知ってるぜ。嫌って程にな  
何故かついてきた峰に向かってお前は来るなオーラを強烈に放つが、  
峰はソレをものともせずにについている。

「へえ、つてことはお兄さんも騎士連の人なの？」  
あどけなく口から発せられるその単語は、ざつくりとヤイナの心の  
中へと踏み込む。

「いや、逆さ」  
「・・・・逆？」

ヤイナの言葉に首をかしげる少女は純粋な疑問を口にするが、ヤイ  
ナはそれに答えずに進む。

「ま、大人には色々あるんだよ」

いつもと違う口調のヤイナを見て、峰は疑問を抱く。

(言葉が鼻にかかるってない・・・!?)

突つ込みどころが違うような気も、しないではないけれど。  
和氣藹々といつた様子で話しながら歩いていると、通路の向こうか  
ら息を切らして走つてくるアキがいた。

「なんだとお前。休日まで働こうってエ勤勉さはいらねえぞ」  
ヤイナが頭を搔いて冗談を言うが、それを受けたほどの余裕もない  
アキは急いで言う。

「そうじゃないんだ・・・! ルイ達が・・・さらわれた!」

\*\*\*\*\*

息をまいてまくし立てるアキとは対照的に冷静なヤイナは熱心に状況と対策を述べるアキに一言はなつた。

「ンで、仲間をさらわれてスゴスゴと戻ってきたわけだハン、と呆れたような目でアキを見て、ヤイナは続ける。

「さらわれた。だからなんだよ」

「助けるのを、手伝つて欲しいんだ」

意を決して、といった様子でそう告げるアキに、峰は心配そうに歩み寄りそうになるが、ソレをヤイナは手で制して言ひつ。

「知るか、馬鹿が」

ヤイナの言葉は、峰とアキに衝撃を『えた。

「お前が勝手に戦つて勝手に仲間がさらわれた。それに俺が関与する理由があんのか？ 仕事の中でさらわれたなら手を出してやらないでもないけどな、今のお前は休暇中で、プライベートなんだ。それぐらい自分で解決しろつてんだ」

馬鹿か、とヤイナは吐き捨てる少女を連れてアキを素通りする。そしてアキの横を通り過ぎて一・二歩歩いたところで、ポケットから「ゴソゴソ」と何かを取り出してアキに投げて寄越す。

「・・・これは？」

投げられたのはドックタグのようなものだ。

銀の橢円形のプレートに斜めの字体でアキと書かれている。

「それは俺からの餞別だとでもおもつときやいい。そオだな。一つ機能があるンだ。そのドックタグをつけている人間はドックタグ同士で、居場所の検索が出来る。お前に渡すのが一番遅れちまつたがまあ、許せ」

ヤイナはそれだけ言つと、きびすを返して歩いていつてしまつた。路地の影に消えていったヤイナを見送ると、アキは試しにドックタグをタン、とタップすると、ゆっくりとではあるが、ドックタグ上空 10㌢ほどのところにトト町そっくりそのままの模型が表示され、次いで赤い点が五つ表示された。

どれが誰だらひ、と疑問に思つてゐると、次第に名前が表示される。

「いた」

三人の居場所は下に3mほど下つてから北東の方向へ1kmほど。

「本気で走れば、4分もかかるないな」

アキはそう言つと、ドックタグをむつ一度タン、ヒタツプして表示を消してヤイナに礼を言つた。

「・・・・ありがとひ、『やれこます』

\*\*\*\*\*

「なんだかんだ言つて、助けるんだね」  
呆れたような顔で峰はヤイナに言ひ。

「助けた訳じやねえよ。業務上必要なもんが今日出来上がつたつて  
だけだ。ただそれだけだ」

「まあ、なんでもいいさ」

峰はそう言つて話を終わらせたが、心中ではもう踊りだしたいぐらこの気持ちでいた。

(全く、ヤイナがここまで人に入れ込むなんてね・・・珍しいことこの上ないね。未来が楽しみでしようがないわね)

フフッと笑つているとヤイナに気持ち悪い等と野次を飛ばされるが、それを軽く流せるほどに余裕があつた。

そんなふうに思いながら歩いていると、ふと大きな倉庫の前でヤイナは立ち止まる。

そしてゆつくりと振り向いて峰と目を合わせると、言ひ。

「お前、ちょっと買い物行つてくれないか。どうも見つかりそうにないんだ。」いつの父親

ポン、と少女の頭を撫でる動作は優しい。

しかし

振り向いたヤイナの目は、とんでもなく鋭く、冷たい。

今まで浮かれていたのが馬鹿らしい、心の底からそう思えるほどに。

「 分かった」

思わず委員長モードに入ってしまったところとは、ヤイナを一瞬でも敵だと認識してしまった、ということに相違ないのだろう。しかし言い訳することが出来る雰囲気でもないことを感じ取り、峰は少女の手を引いて近くの雑貨屋へと歩いていく。何か不吉なものを胸に抱きながら。

## 再会

カン

カン

金属で出来た床を踏んで、音が鳴る。

その音は反響して戻ってきて、まるで音の海に落とされたような、そんな錯覚に陥る。

ゆっくりと、しかし異様な威圧感を持つてよつてくる音は紛れもなく、敵意を孕んでいた。

「君が、ヤイナ・フレイニア……かね？」

影の中にいるであろう“その”敵に向かつて、騎士鎧に身を包んだ初老の男性は言ひ。

しかし、返答は無い。

「返答はなし……か。まあいい。私は皇紀連騎士第三部隊長……

ジョラルドだ」

ガシャ、と盾と剣を打ち鳴らすよつとして前にかざして挨拶をすると、剣と盾を下げて敵が影の中から現れるのを待つ。

「ハン、皇紀連……まだそんなもの名乗つてたのか」

影の中から聞こえたその声は、40年ぶりに聞く声だった。  
しかしそれはおかしいだろ？

40年経っているのに何故、同じ声のままで

ジョラルドの心の中の疑問は、影から出てきたヤイナの姿によつて  
払拭される。

「やあ、久しぶり……いや、この前の俺とははじめまして……  
・か？」

影から出てきたヤイナの姿は40年前と全く同じ若さを保つていた。

「何故・・・・・

何故そんな姿で、と言ひ疑問は、ヤイナが答えるまでも無く、ジョラルドの脳裏に浮かんだ。

「禁忌に手を出したか・・・・・ツ！ フアリス・・・・・ツ！」

ジョラルドの声を聞いて、ファリスと呼ばれたヤイナは懐かしそうに言つた。

「その名前で呼ばれたのも、40年振りだね・・・・元氣してたか、ジョラルド？」

「私の質問に答えろ・・・・・まあ手段としてそれを選んだことは変わりを染めてしまったのか！」

「手を染めた・・・・まあ手段としてそれを選んだことは変わりは無いぜ。お前も知つてゐるだろ？ 茜の事」

懐かしそうにそう言つファリス（ヤイナ）は、目を細めて続ける。

「アイツが死んだことも、知つてゐるだろ？？」

ヤイナの言葉に、ジョラルドは静かにうなずく。

「おそらくお前の聞いた情報だと、俺もそのとき死んだ事になつてゐるはずだ」

「ああ」

「カエリスの生き残りは、居ないと聞いた・・・・そうだろ？？」

世界の四大戦線と呼ばれるうちの一つ。カエリス戦線と呼ばれるそれは、40年前に全世界の有力者達が一場に集結して争い・・・殺し合いをしたという話は、今も本や映像として受け継がれている。しかしそれら全ては妄想の結果に過ぎない。

なぜなら、ヤイナの言つとおりに

「生き残りは居なかつた。そう聞いたが・・・・そうではなかつた・・

・喜びたいところだが、喜べないな」

「喜ばなくて良いぜ、アレのせいで茜が死んだんだ」

「そり・・・・だったのか」

ヤイナの話を聞いてジョラルドは一度うなずき、そして疑問を呈する。

「しかし何故・・・貴様が禁忌に手を染める」

「それに関しては・・・皮肉な話だ。息の根が止まつた奴を生き返らせる。そのためなら命だつて差し出してやる。そうやつてた。それなのになぜか俺が不死になりやがつた。意味がわからねえとは思つたさ。ただまあ 考えて見れば俺が死んで得するのはあの時裏切り者を雇つてたクソ狸共だ。そう考えると死ぬ気にはなれねえ、つてな。まだそいつらを殺すことも出来ちやあいねえ」

ヤイナの話は一見正常に割り切つたと言う風に聞こえるが

「狂つてゐるな」

「分かつてゐる、俺だつてわかつてゐるさ。死人を生き返らせるなんて出来るわけがない。でもな、そうでもしないとやつていけないんだよ」

「かつて英雄と呼ばれた男が、弱氣になつたものだな」

ジエラルドがそう言つと、今まで悲哀漂う雰囲気を放つていたヤイナは一転、笑つて言つ。

「バツカ、今だつて俺は英雄つて呼ばれてるぜ。体感するか?久しぶりに本氣でやるか?ジエラルド爺さんよ」

「フン、お前も同年齢だらうが」

「残念ながら傍から見たらアンタは爺さんで俺は青年さ。覆ることが無い事実だぜ。」

「その憎まれ口は相変わらずのようだな・・・つー」

「はん、アンタのその堅物様も相変わらずだなー!」

「狂つてゐるな」

「もうややこしい話はナシだ。傭兵時代に戻つてやろうじやねえか」  
ヤイナがそう言つと、ジエラルドは笑つて言つ。

「フン、話より力」

「くだらねえ会話より、殴り合い」

「負けた方が悪、勝てば正義」

「そうだよそれが俺たちだろ?戦友」

「そりだつたな、40年振りだつたからか忘れてたぞ、親友」

「40年越しの喧嘩・・・腕、鈍つてねえだろうな?」

「お主もぬるま湯につかり過ぎて腕が固まつたんじやなかろうな?」

「ナメんな。傭兵時代よか強いぜ」

「騎士団の過去を飛ばして傭兵時代の人間と戦うとは思いもせんかつたな」

「俺もだぜ、まさかアンタにあんな可愛いお嬢さんがいるとはな」

「ほお、見たのか、私の娘を」

「ああ。一目でお前の娘だつて分かつたぜ」

「良い娘だらう?お前にはやらんぞ」

「残念ながら50歳差の年の差結婚はいただけねえな。狙っちゃ居ねえよ」

「それは良かつた。まあここいらで一太刀・・・・・」

「やるうか」

いつものように、40年振りのやり取りをして、二人は不敵に笑う。40年振りにあつた親友だといつのに大人しく話すことも出来ない、そんな不器用な男達の、ささやかな遊びのような、戦いが、今始まる。

\* \* \* \*

「イイ・・・か

息を整えて見上げると、そこには大きな倉庫が一つ設置されていた。手に持つたタブから浮き出る地図には、三つの赤い点・・・つまりココとルイと木下がここにいることを示していた。

「待つてろよ・・・今・・・助けに行つてやるからな。

心中で決意すると、緊張の汗が吹き出る手のひらを何度も握りなおし、緊張をほぐそうとする。

今に始まったことではないのにこんなに緊張するのは・・・

やつぱり、これがゲーム、喧嘩じゃないといつひとを俺自身が分かつてゐることなの・・・かねえ。

まあでも、この状況、助けないといけない状況つていつの間にかは無いんだし・・・行こうか。

一度目の決意をすると、やつくりと倉庫へと踏み出した。

\*\*\*\*\*

振り下ろされた剣を持つ右手をひじで勢いを殺しながら受け止めてそのまま握り締め、そして引いてジョラルドの体を引き寄せて返すよにして掴んでいたこぶしを離し、すぐさま握つてジョラルドの顎を打つ。

一瞬ジョラルドの焦点がずれるのを視界で確認するが、すぐさまジエラルドは反撃に移る。

すれ違いざまに鎧で包まれた右足を折り曲げ、膝でヤイナの腹部を攻撃すが、それはヤイナの右手に阻まれた。

膝蹴りを受け止められたことで空中で一瞬動きが止まつたジョラルドの隙を逃すほど、ヤイナは戦闘に不慣れなわけでは、無い。

空中で静止したジョラルドの脇腹を左手の拳で思い切り殴り上げ、ジョラルドの体を無理やり上に動かす。

肺の空気を吐き出しながら上方移動するジョラルドを追撃するように、右こぶしで正面から腹部を攻撃。

くの字に曲がったジョラルドが突き出すよつとして差し出した顔を蹴り上げる。

見事なまでの三連撃。

いや、顎への攻撃を加えれば四連撃だ。

吹き飛んだジョラルドは金属と金属をぶつけて激しい音を立てながら地面へと倒れ込む。

「ゲフッ・・・・腕は・・・鈍つていなうだな・・・」

起き上がるにも出来ないのか、寝たままにジョラルドは言つ。

「おう、あつたつまえだ」

ヤイナの言葉を聞いて、苦笑いを浮かべてゆつぐと上半身を起こしたジエラルドは、ヤイナに剣を差し出した。

騎士が剣を差し出す。

この行為は一つ意味する。

一つは。

「私はもう、引退する。貴様がこの剣を……使え」

引退宣言。

しかしそれは王からの除名宣言でのみ、安全に引退できると叫び意味であつて、勝負にまけて引退、と言う場合は……騎士から退き、隠居する……と言つわけではない。

「この剣で、殺してくれ」

最後は潔く。という事なのだろう。

「最後は、親友の手で、終わりたいんだ」

そう懇願する騎士の思つところは、分からぬでもない。

もと皇紀連の人間だと叫ぶことは、その時点ですでに不穏分子だと言つ事だ。

忠誠心の厚い彼らがいつ連合からイギリスを奪還しようとして暴れるか知れたことじゃない。

実際、皇紀連の連中共は何度も反乱を起しているのだ。  
しかしこの男は根っからの皇紀連、いわゆる騎士ではない。

元はただの傭兵。

しかし、皇紀連であつたがために追つ手がいつまでもついてくる、  
という有様だ。

「娘に迷惑がかからないよう、アーヴィングか？」

ヤイナがそう言つと、ジエラルドはうなずく。

「……そうだ。すでに追つ手はすぐそこまで来ている……もう、逃げ切れる自信はない。あの娘は関係ないんだ……そして私も仮にも騎士だったことがあるみだ。どうせなら、親友の手で葬つてほしい。それぐらいの、気位は……」

そう言つて差し出してくる剣を、ヤイナは受け取つた。

受け取つてくれた。その事実にジエラルドは喜んだ。

が、殺すために受け取つたわけじゃねえよ、とヤイナは言つ。

「氣位？馬鹿言つてんじゃねえよ。残された側の辛さは知つてるんだろ？お前。いつも愚痴つてたじやねえか。おつかさんとおつとさんがいねえから色々辛いつてよ

ヤイナは苛ついたように、しかし励ますように言つた。

「騎士？馬鹿言うな、お前は一人に尽くすような氣位高い気持ち悪い奴じやねえだろ。お前は、傭兵だつたはずだ。誰に尽くすも報酬しだいの泥臭い、泥の中で生きる奴だつたらうが」

それなら、とヤイナは言つて、続ける。

「俺が今お前を雇つてやるよ。報酬……？無料なこと聞くなよ。報酬はお前の命と……」

ヤイナがそのまま続けようとしたりで、建物のドアが開け放たれ、金髪の少女がジエラルドに駆け寄つて抱きつぶ。

そして満面の笑みを浮かべながら言つた。

「今日ね、すんごく楽しかったの！」

パア、と陰鬱なその建物がいきなり明るくなつたかのような錯覚を覚えるほどのその笑顔を見て、ジエラルドはヤイナ・・・いや、フアリスの言おうとしていた事を悟る。

「ああ、そつかそつか。じゃあ一緒に遊んでくれた人たちにお礼を言わないとね」

ジエラルドはそう言つと、鎧を脱ぎ捨て立ち上がり、頭を下げる。

「・・・・・ありがとう。助かったよ」

その一言を聞いて、ヤイナは満足げにつなづいた。

「・・・・・ああ。」

彼の礼は、もちろん遊んでくれた、と言つ意味も含んでいるだろうけれど、もう一つの意味は、親友に対する、旧友に対する叱咤激励の礼だった。

礼に対してもうなずいて返事をすると、ヤイナはつかつかと近寄つて、

剣をジョラルドに渡して言つ。

「お前はもう一生雇われたんだ。娘を護衛するなんていうちんけな依頼じゃあねえぞ。娘を、幸せにしろよ」

そう言って、ヤイナはジョラルドに剣を渡す。

「ああ、もちろんだ」

決意をこめた目で、ジョラルドはうなずく。

「まあ、依頼主が依頼を達成するために色々用意するのは傭兵界じや当然の話だ。ここで住むんだろう?何かと世話、するぜ。何かあれば何でも屋を尋ねな。この世界での、傭兵の名前さ。」

ヤイナはそれだけ言って、入り口に佇んでいた峰を引き連れてその場を離れた。

しばらく一人とも無言で歩いていくと、息急いで走ってきた娘を背負つたジョラルドがヤイナに言つ。

「お前の・・・連れ、今危ないんだ!すぐ助けに・・・」

そういうかけたジョラルドに、ヤイナは不敵に笑つて答える。

「馬鹿言え、この程度の試練は・・・薄い壁だ。連中なら・・・軽く壊せるや。きっとな」

## 終結？

倉庫の薄い壁に耳をくつづけて中の様子を伺つと、なにやら口げんかをしているような怒号が飛び交つてゐる。

片方は聞き覚えのある声と言つことはつまり口喧嘩しているうちの片方は「」だろうな・・・

あのやんちゃお嬢さん全く・・・

呆れ顔で腰から短剣を引き抜くと、傍の高く建つてゐる建物の壁についているパイプを掴んでバランスを保ちながら駆け上がる。

「あつた」

倉庫の上方部分に設置された大きな排気口を見つけると、手に持つた短剣を限界まで長くもつてそこをやさしく叩く。

すると反応は上々。

それどころか音すらしない。

「何製なんだろ・・・これ」

そんなことを考えながら排気口へ飛び移る。

くさつ！

倉庫の汚れを含んだ排気がずつと当たつてゐるために臭いというのはすぐに考えついたが、しかしこれは流石に臭すぎる。

鼻が曲がりそうだ・・・などと考えられるあたり、緊張感が皆無である。

とにもかくも天井の中心へ続く排気口から倉庫の中をのぞくような形になつた。

中を確認してみれば敵の人数は六人。

うちの三人は壁際に手を拘束されているだけのようだ。

右側にいる「」以外は意識を失つてゐるのか、目を閉じてぐつたりとしている。

まあ、その右側にいる「」がこれでもかと言わんばかりにケンケンと騒いでる訳だけど。

その様子を見てげんなりと誘拐犯達は、本当にあいつ来るのかよ・・・

・なんて話している。

手際が悪いと言うかなんと言つか・・・・  
色々なことに呆れていたが、犯人たちの手に持つてゐる凶器をみて  
一瞬で背筋が凍る。

馬鹿・・・これは遊びじゃないんだ・・・・命をかけた・・・戦い  
なんだ！

気を引き締める！と自分で自分で自分をたたき上げると、短剣を握りなおす  
して排気口の金具を慎重に外す。

カコン、と小ちい音を鳴らして外れた排気口のネットのよつた金具  
が落ちないように手に持つと、ゆっくりと体を排気口から出してい  
く。

幸いここは電球の光が届ききつてはいないため、はつきりとは見え  
ていない。

体を出して足だけで体を支えるような形になると、上半身を前後に  
揺らして反動をつけて、手に持つた網状の金具を誘拐犯の一人へ投  
げつける。

とてつもない勢いを持つて誘拐犯の頭へぶつかると、誘拐犯はその  
まま意識を途絶えさせる。

幸い・・・というか、なんといふか。

口々が騒いでくれていたために、男が倒れた音は聞かれなかつたよ  
うだ。

しかも金具は男の上に着地。

「出来れば騒いでほしかつたけど・・・まあ仕方ないか・・・」  
はあ、とため息を吐いて、右手だけでぶら下がる形に姿勢を整える  
と、下半身を前後に揺らして反動をつける。

これであそこまでいければいいけど・・・・

そう心の中で思つて、口々と延々言い合ひをしている人質に一番近  
い男を見据える。

十分だらう、と思えるぐらうにまで反動をつけると、パツと手を離

す。

高さ6mほどの天井から、勢い良く男の上へ着地する。肩の上に着地した瞬間に、ゴキン、という音がしたのでおそらく首が外れたか肩が折れたか。

とにもかくもその男を盾にして人質の三人へ近寄りながら、手の拘束具を短剣できる。

すると、パパパ、と乾いた音を響いた。

同時に、手に持っていた男に衝撃が加わる。  
こいつら仲間を平氣で・・・・!

盾にしておきながら言うことではないと思うが、男の脇から銃を持っている男へ短剣を投げつけると、男の懷に入っている手榴弾を取り出す。

授業で習ったのと全く同じ形だとはね・・・

いや驚いた、と内心で自分の記憶力に感謝しながら安全弁を引き抜き、男たちが集まっている中心へ投げ込んだ次の瞬間。

激しい閃光と衝撃が周囲一体を襲つた。

その閃光を男の体で防いだアキは目の潰れた男たちの動きを封じるために手足の腱を切る。

全員切り終わつた・・・・

ふう、とため息を吐くと、手に持っていた短剣に付いた血を地面に氣を失つて倒れている男の衣服で拭い取り、腰のホルダーへ差し込む。

「終わった・・・」

そう呟いた瞬間に、ドッと疲れがアキを襲う。

突然来た疲労に足をふらつかせながら、気絶したルイと木下を抱えるココへ歩み寄つて立たせる。

「大丈夫?」

心配してそう声をかけると、ココは顔を真つ青にしていた。  
人の死を始めて見た・・・からか。

おそらく俺も、もう少し経つてアドレナリンが無くなつて来れば、

それこそ死にたくなるんだろうな。

その苦労を思つて氣分を萎えさせながらも、三人を引きずつて倉庫の外へと運び出す。

運び終え、ふう、とため息を吐いてその場に腰を落とすと、ちょうど良いタイミングでヤイナがその場に現れた。

「助け終わつたみてえだな」

小さな路地からひょっこりと現れたヤイナと峰は、四人へ近寄る。

「ずいぶん派手にやつたみてえだな」

アキに付着した返り血と、扉の隙間から見える中の惨状を見てヤイナは言った。

「二・三人死んでるな、ありや」

ヤイナがそう言つと、氣を保つている峰とアキとココは思わず顔をしかめる。

「んじや、後始末だ。峰はココ達を連れて行け。アキは俺を手伝えヤイナの指示を受けて、アキは反抗する。

「せ、せめて目を覚ますまでは・・・」

それは一人が目を覚ますまで、と言つ意味なのだろうが、ヤイナはその言葉を否定する。

「馬鹿言え、今のお前・・・血まみれのお前を見たらまた氣絶しちまうかもしねえだろオガ」

アホかお前は、と言わんばかりの勢いで発せられたヤイナの言葉を聞いて、アキは悟る。

ヤイナの今の言葉は暗にこいつ言つてゐる、とも取れる。

(人が死ぬ所を見たココの心を落ち着かせる時間をやれ)  
つまり、今のアキは人殺し・・・殺人鬼としてココの目に映つてゐるとも限らない訳だ。

そう考へると、アキは反論することをやめてヤイナに従つた。

「・・・わかつた」

「わかりやあいいんだ」

アキの言葉を聞いて、頭を搔きながら倉庫へと入つていくヤイナを

追うようにアキは歩いていく。

そして中に入ると、しつかりと倉庫の扉を閉めて、ヤイナは崩れ落ちる男達の近くにある箱へ腰掛け、アキに言つ。

「これは、お前がやつた。違いないな」

確認するまでもないことを聞くな、とアキは思いながらつねづね。

「自覚はあり……か」

手遅れ……いや、まだ手遅れでは……ないな。

思考して、会話が止まる。

およそ10分後。

「理由」

しばらく口を開かなかつたヤイナが、唐突に言つたその言葉の意味を図りかねていると、ヤイナは続けた。

「お前たちがここに来た理由は……言えるか？」

ゆっくりと言つヤイナの口調に吸い込まれるようにして、アキは思わず口を開く。

「ルイと……口を、守るため」

「守るため……か」

確認するように言つヤイナの言葉をつなぎで肯定する。

「そうか。なら……そうだな。ボーナスを……出してやる」  
ヤイナは一々言葉の意味が分かりにくいな、とアキは能天氣にも思つていた。

「お前は今日限りで、クビだ」

突然言われた解雇宣告にて、アキはうろたえる暇もなく口にした。

「…………え…………？」

\*\*\*\*\*

「私は……私たちは……争いをしないために……ここに来  
たんですね……」

自宅のリビングで、峰の隣に腰掛けた口は虚ろな目をしていった。

「それなのに・・・それなのに・・・争いばかり・・・これじゃあ本末転倒も良いところですよ・・・」

力なくそう呟く彼女は、やはり限界・・・なんだ。

「本末転倒・・・・私は最初に言つただろう」

限界と分かりつつも、峰は続ける。

「戦争というご時勢だ。この世界に安全な場所は、無いと「そんなのわかつて・・・いました。そんな幻想に縋り付きたいと、思つていたのは事実です。けれどもそれはやつぱり幻想で、幻想でしかなかつたんです・・・よね。」

「まあ、幻想は誰しも抱くものさ」

その口調は、突き放すような口調だつた。

「けれどもね、私はそれを悪とは言わない。幻想を追うのを、悪いとは思わない。

確かに、人は時にとんでもない夢を見る。

それは人を生き返らせたい・・・だとか、無機物の何かになりたい・・・とか。

それは確かに叶えるためには途方もない労力が必要なもの。けれども、私は思うんだよ。

人が夢見る事に、叶えられない事はない・・・とね。

君が争いを好まないなら、温室であるシアトルがある。

それとも君が守られるだけの自分がいやで、その言い訳として争いが嫌いだ、といつてているのなら、君達にもつてこいのものがあるだろう?」「

峰の言葉の最後に引っかかりを覚えて、思わず顔を上げて峰の顔をまじまじと見つめる。

「ここには、人間が操れる便利なものがあるだろう・・・?しかも幸い、ここにはその専門家・・・この世界で一番詳しい人間がいるんだ」

峰の言葉の裏に隠された内容をココは悟つた。

争いを好まないならソレ相応の道具が、ここにはある。

そして、守られるだけがいやなら、それ相応の道具が、ここにある。そしてその道具は、シートルであり、アルマであり……大野。

「どちらの選択をするも君しだいだ。

いや、語弊があつたかな。

三択どれを選ぶも君しだいだ。逃げるか、戦うか、それとも……

両方か、だ

峰はそれだけ言うと、寝室へ目配せして隠れて話を聞いていたルイと木下を呼び出す。

「まあ、三人で話し合つもよし、個人個人で決めるも良し、それも、自由だ。ここはフランクでね。生きるも死ぬも、墮落するも向上するも、走るのも止まるのも、君しだいだ。甘えるなよ、ここは他人が答えを用意してくれるほど、甘い社会じやないぞ、思春期の悩み多き少女達」

峰はそれだけ言うと、手に持っていたマグカップをテーブルにおいて、その場を後にした。

カラソカラソ・・・

と玄関に付けられている鐘を小さく鳴らして外へ出ると、そこには大野が神妙そうな渋い顔をして立っていた。

「お前が説教する側になるとはねえ。娘が一つ成長した気分だぜ」そう言って笑う大野は、わりと腹が立つ顔をしているが、けれども今ここで怒鳴り散らしても残念な雰囲気になるだけだろうしなあ・

峰はそう思つて、大野に一つ提案をした。

どこかへ食べに行くかい？お父様。

おお、いいねえ娘よ。もう一人のお父様も誘つか？  
良いわね。後始末が終わつてたら、誘いましょう。

\* \* \* \*

「嫌です」

「・・・理由は？」

「今は・・・まあヤイナさんの説明不足だと、言います」

峰がココに話をしているのと同時刻。

ヤイナは死体を片付け、倉庫の中の箱に腰掛けてアキの話を聞いていた。

嫌・・・か。

まったくこいつは・・・誰かさんに似ていやがるな・・・

ふう、とため息を吐いてヤイナは口を開く。

「お前は今、人を殺すのに躊躇いがなくなる一線を越えよつとしている。

それは陰と陽の境目でもあると・・・言つておこりうか」「

鼻にかかる口調から一転したヤイナは続ける。

「お前の今感じている恐怖心のなさは、アドレナリン云々って問題じゃねえ。それは人を殺すのに慣れ始めた証拠・・・ただそれだけつて事だ。お前はいい意味でも、悪い意味でも覚悟が強すぎる。だからこそ目的に進むための環境の変化なら順応が早くなる。けれどもそれはつまり、殺人集団の中に入ればお前はためらいもなく、殺人集団一員となつて殺人者となる。そう言つ事だぞ」

睨みながらそう言つヤイナの視線から逃げまいと必死に見返して言う。

「俺は・・・それでも、やらないといけないことがあるなら、そういうまるまでです」

「お前の正義は・・・そう言つことか」

「ええ。俺の正義は、俺の行動、そして結果。それが全てです」

「若いな」

「まだ、17ですか」

アキの生意気な口調に呆れながら、箱から立ち上ると、ポケットの中の携帯が震えた。

件名なし。

本文

飯食おうぜ

・・・・

やる氣がなくなつたな。

まああいつがそうしたいって言つならそれに任せるまでだ。

「そりゃ。じゃあ好きにするといい。お前はお前だ。せいぜい俺の敵にならないよ」・・・な。そうなつたら俺は容赦なくお前を殺すぜ」

ビシヒアキを指差して呟いたヤイナはそのまま倉庫から外へと歩み出る。

・・・

いやはや全く。

似すぎ・・・つてもんじやねえぞ。

まさか親子とかじやねえだろ」な。

まあ年齢から考えても孫・・・ひ孫つてレベルだア 関係ないとは思つけどよ・・・

ため息を吐いて空を見上げると、つゝすらりと光る月が珍しく、建物の間から顔をのぞかせていた。

「」の位置に月が来るつて」とせ・・・そりか・・・そりそりか・・・

・

「つうのは一度目だな、と黙つてため息を吐く。

俺も年を取ったかネエ・・・

おお嫌だ嫌だ。

もうそろそろ・・・11月か。

嫌な、季節だ

「二ヶ国がたつた一人に制圧される・・・これは、ひどく情けないことだとは思わないか？」

円卓に座る四人のうちの一人が、頬杖をつきながら言つ。

「酷い・・・・の？」

無気力そうなその声は、何の感情も感じさせない。

「その一人がワールドランク零・・・番外の化け物だし、仕方ないんじゃない？」

細身のシルエットの女の声はどこまでも平凡そうな印象を受け、「フン・・・奴が相手で十分に戦える人間なぞこの世界に五人とおるまい・・・」

いかついその男の声色は、どこかで聞いたことがある。

「いやいや、君達。ちょっとやる気なさ過ぎるんじゃない？飽くまでも僕たちは犯罪集団の幹部なんだよ？もっと血の氣の多い連中を見習おうよ」

頬杖を付いている人間が言つよつた言葉ではない、といつのはまあ言わずとも知れたことだらう。

「私は・・・別に・・・犯罪集団とか・・・どうでも・・・」「上に同じ」

「私としてはお主に賛成したいところなのだがね。如何ともしがたいな」

「いやいやいや・・・まあ、いいよ。計画に支障さえなければね。ケイツェル。何か収穫はあつただらうね？」

頬杖をつき、呆れながらそう言つ男に反応して、ケイツェルは口を開く。

「予想通り、というところだらうな。先日向かわせた男は何者かにやられてしまつてはいたが、収穫はあつた」

ケイツェルはそう言つと円卓の中心をタップして立体を上から見下

ろす形に描かれた地図に六つの点を描いた。

「一つ。北にシアトル」

ケイツェルがそう言つと、一番北に置かれた赤い点が呼応するよう  
に短く輝く。

「二つ。北東にある尖塔。名称不明。」

同じように、北東の赤い点が光る。

「三つ。北西にある尖塔。名称不明。」

点が光る。

「四つ。中心のヤイナ宅。」

以下説明文は同文章。

「五つ。南西の尖塔。名称不明。」

同文章

「六つ。南東の尖塔。名称不明。」

同文。

「何故か不満な感情がわいてくるが・・・まあ・・・以上だ」

ケイツェルがそう報告すると、頬杖を付いた男は退屈そうにあぐびをして言つ。

「で？それがどうかしたの？」

「うむ。話はここからだ。この六つの点を結ぶと五芒星・・・陰陽道でよく使うものだといえば、分かるか？」

「うん、分かるよ。」

「それが構成される。」

ケイツェルがそう言つと、地図上に赤い点を結ぶ赤い線が走る。

「それで？」

「端的に言えば、これは魔法だ。奴の魔法は独特すぎて構成も何も分かつたのではないから推測しかできないが、ウイザードを脱退した理由に、奴の個体としての戦力減退が挙がっていた。そして今は組織の頂点たる男だ。それが何を意味するか。言わずともわかるだろ？」「うう」

ケイツェルの誘導的な喋りに全員が一つの単語を思い浮かべる。

「自分の戦力の増長・・・そういうことかい？」と、頬杖を付いた男が言つ。

おそらくは、とケイツェルが答えると、男は言ひ。

「じゃあ・・・君は古い知り合いのことを、倒せるね？」

男の問いに、ケイツェルはしばしの沈黙の後に答える。

「・・・・ああ」

「じゃあ、よろしく頼むよ。僕たちは違うところで用事があるから手伝えないけど・・・なんとかなるよね。」

そう言つて男は立ち上がる。

「用事とは？」

ケイツェルが何となく聞くと、男は嗤つて答える。

「もちろん、萎縮した連合国と、日の国の火付け役をやるのさ。連合国には依頼失敗の訃報を知らせないとけないしね」

そう言つて部屋から三人が出て行き、残されたケイツェルは一人思う。

「念願・・・とは言いがたい状況ではあるが、奴との戦闘は、ふがいなくも思つが、楽しみではあるな」

彼奴の力・・・見極めきれるか

\* \* \* \*

「んで? 何のようだつたんだ?」

飲み会の翌日、ヤイナは大野が昨日ここに来ていたことを思い出し、ソファでくつろぐ大野に聞いた。

「ん? ああ・・・つと。居ないな。この間の依頼、成功したんだろ?」

この間の依頼・・・?

「地下、行つたんだろ?」

地下、という単語を聞いて、ヤイナは頭の中に一つの依頼を思い浮かべる。

アキ達が暴漢達を取り押さえているのと同時進行で行っていた依頼。

「それがどうしたんだ？」

「チルドレンがまた呼んでるつて言つて来たんだよ」

またか・・・

はあ、とため息を吐いてヤイナは立ち上がる。

「あー・・・お前等、行くか？」

面倒くさそうに、部屋の隅で固まつて漫画を読み漁つてゐる四人に問うと、四人はうなずいた。

全く・・・

面倒な・・・

\* \* \* \*

「チルドレンって、一体なんですか？」

ルイが歩きながら、そう聞いた。

「チルドレンってのは・・・峰とかには言わぬ方が良いから言つ  
ンじゃねえぞ」

ぶすり、と釘を刺してから、ヤイナは続ける。

「いわゆる、ストリートチルドレン達の総称だ。」

カタン、カタンと、鉄製の階段をゆっくりと下つていきながらヤイナは説明する。

彼らは・・・

チルドレンと呼ばれる彼らは、日当たりに存在するシアトルの子供達とは違い、日陰者・・・

つまりどちらかといえば自分たちの方に所属する人間たち。  
その存在は影として扱われ、無い者として扱われる。

実は自分たちの存在も、自分たちの何でも屋という存在も、そんなに知れ渡つては居ない。日陰者の運命ということになるんだろう。

チルドレンは、シアトルに行けない子供達。

その理由は、じきに解る。

カタン。

真っ暗闇の、地下。

本当は地上一階なのだが、空を覆いつくす建物によつて、ここに日中の光といつもの是一切入り込めない。

「空は  
青」

突然、どこからともなく台詞が脳裏に響く。

「此処は  
黒」

右から、左から、不規則に、乱雑に音は反響してヤイナたちの耳に届く。

「白は  
翼」

「僕達の背中には、翼が？ぎ取られた痕がある」

「それが意味するのは 僕達は天使？鳥？それとも

」

「カラス？」

「  
悪魔？」

ぐわん、ぐわんと反響を繰り返し耳に届く、韻を踏むその唱は頭に響き、意識を持つていかれるようになる。

「あなたは、どおれ？」

ふいに、背後からはつきりとした声が聞こえ、はじけるようにして後ろを振り向くと、そこには小さな子供が一人立つていた。

「やあ、地上に縛られた子達。それと、空を生きる者。歓迎するよ」  
キシシツと笑うその子供からは、とてもじゃないが容姿相応の雰囲気は発せられていない。

その雰囲気はまるで

魔女。

「歓迎するよ、じゃねエ。テメエが呼んだンだる」

アホか、とその雰囲気をぶち壊しにするよつこヤイナは言ひ。

「ウイツチ・ヘルディア。要はなんだ？」「  
ウイツチ。

科学から程遠いその単語に、思わず体が凍る。

以前ならば、厨一病に罹った可愛そうな人だ、と哀れんだ目で見る  
が、後ろに魔法を使うウイザードが居ることを考えれば、その呼び  
名を簡単に否定することは出来ない。

「もう慌てるなよ。こここの子供達は気が急ぐのを好まない。君とは  
正反対とも言える人柄だね」

「俺も気が急くのは嫌いだぜ。ただ短気なだけだ」

「それを気が急くというのではないのかい？」

「何言つてやがる。コレとソレは別物だ。」

面倒つたらありやしない、と小さく咳きながら、ヤイナはヘルディ  
アと呼ばれた彼女の紹介をする。

「ウイツチ・ヘルディア。名前の通り魔法を使う。いや、魔術か？  
「魔術だね」

自慢げな顔でそう言う彼女の容姿は・・・多く見積もつても16才  
程度にしか見えない。つまりアキ達と同じような年齢のはず。  
しかし、その容姿に反して彼女のまとう雰囲気は、異様だ。

「僕はね、君たちが来るのを識つっていた。」

だから  
彼女はそう言つて続ける。

「君達に、いいものあげようと思つてね。ファリアス・・・い  
や、今はヤイナ君だつたな。彼の友達になつてくれた御礼だ。受け  
取りなさい」

そう言つてアキには小さな杖のようなアクセサリーを。  
ルイには剣を。  
ココには靴を。

木下には盾を。

「アキ君・・・だったね」

ヘルディアはそう言ってアキに向き直って言つ。

「それは、時期を見て、ヤイナ君に渡しなさい。あつと役に立つ

そして君達は

「時期をみて、大野君に渡しなさい」

そう言つと、トンツと小さく後ろに飛んで四人を見ながらにこやかに笑つて言つ。

「君達を地上に縛る鎖を解く鍵は今、あげた。それを使って鎖を解くも、使わずに碎くも、君達の自由だ」

空は

自由であると同時に、落下の危険が伴つからね。フフッと妖艶に笑つて続ける。

「翼を生やすのは、君達の自由だ。さあ僕の用事も終わつたことだし帰ろうか・・・いや、もう一つあつたな。ヤイナ君」

ヘルディアはヤイナに視線を投げて言つ。

「君の故郷が、君を呼んでいるよ? たまには故郷に羽休めに行つたらどうだい?」

「悪いが俺はもう故郷はここになつたんだ。帰る故郷があるとすれば、ここだ」

「そりゃいそりゃい。それは残念だ。ならば伝言を一つだけうけたまうよ? 元気な元気な妹に、会いたいとか、そんなことでも何でも良いんだよ?」

彼女の口から発せられる妹という単語に驚きながら、ヤイナの口から出る言葉を聞く。

「そオだな。あるとすれば

「

## 大野の生き方とチルドレン

「『犬の首輪の鎖はしつかりとつないでおけ』……この言葉の意味、聞いても良いですか？」

「駄目だ」

無下に断られてすこしへそれを曲げるアキだつたが、考えてみれば教えてもらつ義理もない。

「ともかくも。そろそろだぞ」

その声に反応して顔を上げると、そこには暗い中につつさうと商店街の影が写っている。

「ここまで下町が高く建つた理由はな。人口が増えて縦に移動しないといけなかつたわけじやあねえんだ」

ヤイナの言葉を聞きながら、視界の隅でうごめく何かを見据える。

「こいつらから、善良といわれる市民を、避難させるためだ。」やつと暗闇に目が慣れたのか、その先に居る何かがはつきりと視界に写る。

それは。

もはや人間の形をしていない。

「チルドレン……正式名称・ジョイントミス」

一人は、右腕が触手のように蠢いている。

一人は、下半身がどろどろの液体のようなものを垂れ流している。

一人は、上半身がないのに、歩いている。

一人は

ショッキングな映像、というレベルではない。

「う・・・おえつ・・・」

後ろで吐瀉物を地面に吐いているのは誰だろつ。

そんなことを気にする余裕も、ない。

今はこの田の前にある現実を処理するのに最大限自分の力を使わなければ呑まれる。

「これは・・・一体、なんなんですか」

「これは、政治の道具になつた連中。ジョイントミス。その名前はノーマルを無理やり昇華させてアルマ操縦者にするための実験の被害者。つまりアルマと繋げる《ジョイント》するのを失敗したことから来てる。」

ヤイナが淡々とその説明をしていると、一人の・・・右足が一本付いている少年が歩いてくる。

「ここにちは、ヤイナさん。久しぶりですね」

「ああ・・・久しぶり」

彼らは個体差があるが、一日を四日間分だと勘違い・・・いや、実際に体は一日に四日分の成長をしているらしい。

とどのつまり。

彼らがチルドレンと呼ばれる理由はそこにある。

恐ろしいまでの短命。

人の四分の一しか生きられない彼らは最高でも20歳に届くかどうか。

そんな事情もあり、以前の依頼でここにきたわずか三日前のことも、十二日前のことだと思っているのだ。

「で？ 用はなんなんだ？」

「子供達が、ヤイナさんに会いたいと言つもので・・・よければ会つてくれませんでしょうか・・・あれ？ 後ろの方たちは・・・見知らぬ四人の姿みて、少年はわずかに動搖する。

それは吐いているその姿に、か。それともしらない姿に、なのか。

「俺の助手だ。気分を害するかも知れないが選択を迫つたときに俺のところにいたつて事は日陰者になると決めたつて事だ・・・悪いが堪えてくれないか」

ヤイナの言葉に、少年は苦笑いをして答える。

「仕方ないですよ。僕達は奇形。それ以上でもないけれど、それ以下では、あるんですから。」

彼はそう言つて続ける。

「けれども、もう数もだいぶ減つてきました。僕も・・・あと一年・・・いえ、一ヶ月持つかどうか・・・です。減るのはさびしいことだけれど・・・同時に良いことなんですよね。僕達みたいなあぶれ者は、速く消えてしまった方が・・・良い」

\*\*\*\*\*

そして夕方。

「よお、遅かつたな」

片手を挙げて、漫画から目を上げずに挨拶をする大野に返事をしたのはヤイナだけだった。

「なんだよお前しか帰つてこなかつたのか・・・ああ、まあそういうわな」

目を上げて、アキ達の真つ青な顔を見て大した感慨も無く漫画に目を戻す。

そして数分の沈黙。

耐えられずに思わず大野が声を上げた。

「まあ、お前たちが信じられないものを見たのは解る。信じきつていた国の非道さも、目の当たりにしただろ。でも、気にするな」

大野がそう言うと、ルイが堰が切れたようにまくし立てる。

「気にするな、なんて無理に決まってるじゃないですか。あんな人間じやないモノにされた人たちを見て何も思わないなんて無理に決まってるじゃないですか。あんな暗いところに押し込まれて。あんなひどいことされて。命をおもちゃのようにもてあそばれたあの人たちが！どんなに辛い思いをしているのか、あなたたちにはわからぬいんですか！」

ダン！とテーブルに拳を叩きつけてそう言つるイに、大した反応もなく、大野は答える。

「お前の杓子定規で、人の悲しみを語るなよ」

「お前があいつらを可哀想だと思つた。で、だから、あいつらが可哀想。お前のそれはただの自己満足だ。その顔をしてきて、帰ってきた様子をみればお前等ヤイナが子供の相手をしてきた間中も似たような顔してたんだろ? この子達は可哀想。ひどい。なんて顔を、体をしてるんだと。」

その行為自体が。

「侮辱だ」

その思想自体が。

「軽蔑だ」

お前等がやつてるのは差別を糾弾しているようだ、差別よりもひどいことをしている。

「あいつらは確かに大変だとも思つ。だけどな。俺たちがそれをどうだと語ることは出来ねえんだ。あいつらが望んであそこにいるんだ。自分たちがいつ我を忘れて暴走するかもわからない。いつ市民を思わず傷つけてしまうかもれない。そう言つてな。」

「奴らは自分たちが大変だとは思つてねえよ。むしろ幸せだと俺たちに言つている。そこまで考えろとはいわねえ。ただな。」

お前の感じた悲しみを、お前の感じた憎しみを。

「人に押し付けるなよ」

大野がそつとい終えると、何も言えなくなつたようにルイが黙り込む。

そして、再びの沈黙。

「まあ、お前等があいつらのこと可哀想だと思つるのは仕方ねえ。大野が言つたことにも一理ある。だったら悲しみを押し付けるんじやなくて。幸せを押し付けてやれ。それも自分の感じる幸せじゃなくて。相手の感じる幸せを、だ。あいつらはそれが出来るからこそ自ら地下に引きこもつた。お前にそれが、出来るか?」

ヤイナが珍しく諭す。

「ま、出来るか出来ないか、なんてのは大した問題じゃねえ。日の光を浴びせてやりたいなら天井をぶち破れ。元に戻してあげたいと思うなら。直してやれ。

ただ、それらほんとどが、余計なお節介だと思われる。慈善と偽善なんてのに違ひなんてねえ。

やりたいならやれよ。その結果恨まれようが憎まれようが俺の知つたこっちゃねえがね。」

勝手にしろ、と言つてイスから立ち上がると、沈む四人に立ち上がって家に帰るよう促す。

バタン、と少しく音を立てながら部屋を出て行つた四人を見送ると、大野が口を開く。

「あいつらが出来るそれ自体の原因である俺が言える事じゃねえんだけどな」

苦笑して大野は言つ。

「お前が原因な訳ではないだろ？。原因はそれを運用している。政府だ。盗まれた側にも責任があるとか言つているのが稀に・・・いや、良くなじるけどな。それは間違いだろ？。どんな場合も、どんな手段だとしても。盗む側が悪い。」勘違いしてる奴が多い。

ヤイナはそう言つて奥の部屋へと引っ込んでいった。  
明日は始業式だ。お前も来いよ。  
とそう言つて。

もちろん大野の答えは  
「やだね」

## 大野の生き方とチルドレン（後書き）

大野恭介の矜持、臭いなんていわないでくださいね

「反体制組織、強つ骸骨樂団のお披露目だ。諸君 派手に行  
い」

\*\*\*\*\*

「えー。本日はおひがらもよく~」

のんびりとした調子で言つ頭の眩しい男性のせりふに飽き飽きしながら、足まで伸びたローブのすそをぱたぱたとふるつて埃を落とす。（こんなで登場するンじゃなかつたな・・・）

と、委員戦のことを後悔していると、隣にいる峰にマイクが渡される。

どうやら委員の挨拶のようだ。

と、いうことはまあ当然のようにしてここまで回つてくるわけで。トス、と軽くマイクが渡されたその瞬間。

爆風が吹き荒れた。

土煙が巻き上がり、中庭に居る生徒たちが咳き込む声で情報収集がしにくい。

が。

こんなことをやる人間といえば心当たりがあるのはただ一つの組織。嗤う骸骨樂団。

パチン、と右手を鳴らすと、土煙は一瞬でその場から消え去る。

そして顔を上げて空を見上げると、空にケイツェルが飛んでいるが視界に入る。

ケイツェルは何を思ったか右手に小さな光球を浮かべると、北東に放つ。

確かあそこには

「不味い・・・全員伏せろ！」

反射的に叫んだヤイナの台詞に、ケイツェルは疑問を脳裏に浮かべる。

逃げる、というならまだしも、何故伏せろ・・・なのだ。

その疑問は、休戦前の第三次世界大戦でしかヤイナを見ていないケイツェルだからこそ思える疑問だらう。

これが下町の長老や、大野だったのならば、血相を変えて逃げていた、あるいは全力で自分の身を守っていたはずだ。

その理由が。

この下町に設置されている五点の大きな建物は、

ヤイナの力を制限するものに他ならない。

つまりそのうちの一角を破壊してヤイナの力が最大限に引き出せるようになつた今。

その力は

およそ100倍。

膨れ上がつたヤイナの力にゾワリ、と全身の毛穴が開く。

「これが・・・ウイザード団長の・・・本当の力・・・だったのか・・・」

ドン！と地面を蹴つたヤイナは音速を超えた速度をもつて、ケイツェルに肉薄。

そして、腹部を強打。

「ぐ・・・ふ・・・」

かつて仲間だつたことなど微塵も思わせないほどの思い切りの良いパンチがケイツェルの腹部にめり込む。

くの字に曲がつたために突き出た胸倉を右手でつかみ、ケイツェルがどこかへ飛ばないように固定して左拳でケイツェルの頭を二・三度強打する。

それで頭が吹き飛ばないのは、さすが・・・といったところだらうか。

完全に気を失つてがっくりとうなだれるケイツェルを右に放り投げ

るど、いつの間にかそこに居た骸骨樂団の男が受け止める。

「お前が・・・リーダーか？」

ゾン、とヤイナが男をにらみつけるだけで、周囲の空気が極端に重みを持つて男に襲い掛かる。

「そ・・・そうだよ」

いつもは軽薄そうな樂団のリーダーたるこの男も、このときばかりは顔を引きつらせざるを得ない。

「次来たら、殺すからな」

「な、仲間だつたんだろう・・・？容赦、ないね・・・」

たどたどしく言うその男に、ヤイナは答える。

「仲間？そいつはウイザードの中でもしたから数えた方が速いような奴だぞ？お前たちはまだこっち側に来てすら居ない。まだお前等は表の存在だ。お山の大将気取るのもいいけどな。程々にしないと、そのうち俺以外のやつに殺されるぞ？」

「・・・忠告、ありがたく受け取るよ」

\* \* \*

そうして一瞬で片付いた事件は、集会を中止にさせたといふ意味では良かつたのか。

とにかくも声で正体がばれてしまつたヤイナは、自分が貧弱だという設定も無視し、トン、と地面を蹴つて軽々しく委員室へと窓から入つていった。

その様子を見ておお、と驚きの声を漏らす生徒たちの横で、困つたように額を押さえるのが一人。

「で、どうするんだ？」

ところ変わつて委員室。

そこには珍しい人間が二人いた。

「どうすんだ。と言わてもよお。壊されちまつたもんは仕方ねえだろ？」

「アレがなかつたら……面倒つてレベルじゃねえぞ。オールドクラスの堅物どもに狙われるぞ。また。」

「前に戦つたときは……それはもう地獄絵図だつたなあ」

ケツケツケ、と笑うヤイナと対照的に、大野は気分を沈ませる。

今四大戦線と呼ばれている内二つに、このヤイナはかわっている。

今話をしているのはカエリス戦線のひとつ前の話。

リジェルド平原というただつぴろい平原での話だ。

それは今語り継がれているのは、正体不明の集団が、争つた形跡を残して死んでいた。

その数。

六万。

仲たがいか、というのが現在の世界の見解だが、一部の人間はとする人間によつて引き起こされた事件だと知つている。

「オールドクラスの兵士六万対お前一人。それで勝つちまうんだからやつてられねえ……」

呆れてそういう大野。

「ま、あいつらあれで全員下つ端と、クローンだろ？あの程度だったらお前も勝てるさ」

ヤイナはそう言つて、委員室のイスに腰掛ける。

「次襲つて来たら……そのときはそのときだ。どうせ連中は今の人間全員殺してやろうとか思つてんだろ？」

ヤイナが確認するように大野に言つと、大野は嫌そうにうなづく。

『嫌な連中だ』と言つて。

「じゃあ動く必要はねえだろ……う」

途中で間延びするので何かと思ってヤイナの視線の先をみると、微妙にイラついた形相でその場に立つ峰が居た。

「授業は？」

タン、タン、トリズミカルに刻まれる足踏みは、嫌に威圧感をかもし出す。

ちょっと横を見て見れば、大野はすでにどこかへ退避済みだ。

畜生あの野郎見捨てやがつたな。

「いや、俺もう授業とか三回ぐらり受けてるから必要ないし」

苦しい紛れに出た言い訳に納得したのか、峰はふう、とため息を吐いて隣のイスに座り込んだ。

「お前は授業ねエのかよ」

呆れてそう言ひつと、峰はうなづく。

「ないわよ」

「じゃああれが、ここで委員長やつてんのは皿山警備課つてエヒトド『ドゴゴ』イツテエなー やんのか!」

「人の悪口言つておいて何言つてんのよー!」

「うつせエなお前脳みそ全部その馬鹿でけえ胸の脂肪の塊に吸い込まれてんじゃねえのかすぐに手を出すとかマジありえね『ドゴゴゴ』ン!』おまつありえねエー机を投げンのはありえねエぞ殺す気か!」

ハア、ハアと一人して肩で息をして委員室に立つてると、談笑しながら入ってきた四人が何事かと目を丸くしているのに気付く。  
「オイ、」の暴れるウマみてえに粗暴な女をどうにかして『ドン』

ぐおつ

まつすぐに突き出された蹴りがとてつもない勢いで腹部にめり込み、その場につづくまつて悶えているヤイナをみて、アキは思わず思つた。

(キャラ崩壊つてベルジャ・・・・)

「つっせえ黙つてゐ

「すいません」

ぴしゃりとそろいわれて頭の中の口をつぐむ。

「まあ・・・いつもとかわらねエ面子だな、こりゃ」

机とイスを元の位置に戻してため息を吐きながらヤイナがそつそつと、ルイがうなづく。

「そりいえば、何でも屋をほりつてますけど良いんですか?」

ルイの言葉に、ヤイナが面倒そつに答える。

「あー・・・・まあ元々依頼が良く来るような場所でもねエし・・・

大丈夫だろ

投げやりに答えるヤイナに呆れて、ルイはため息を吐く。

「まあ・・・それがあそこのクオリティですよね・・・」

臨時休業は当然。

それがあそこを知っている密の共通認識だつた。

そんなことを思つていて、長机で峰が何か作業をしているのが田に入る。

なにしてるんだ?と、ヤイナが聞くと、峰は顔も上げずに答える。いやなに、今年から面子が素晴らしいもので田安箱でも置こうかと思つてな。

さすがは委員室に居るときは委員長モードなのか、固い口調でそう言つ。

まあ、そんなことを言いながら作つているのがダンボール製のなんともしょぼいものなのだが。

そんなことを思つていると、完成した!と奇声を上げながら右手にダンボールの田安箱を掲げて峰が飛び跳ねる。

ああはいはい、と言つた様子でヤイナが手に持つたそれを見ると・・・

まあ、なんだ。

いろんな意味でアウトなんだがまあ描写しなければ問題ないだろ?。例えるなら、あくまで例えるのならの話だが、あれだ。

妖怪ポストに酷似している。

何も松ぼっくりのような天板まで再現しなくても良いだろ?に・・・呆れてそう言つと、峰は意識していなかつたのか、驚いてポストを見つめなおす。

やはりダメか。

だめ・・・まあ別に版権云々なんてこゝで画つ奴は居ないんじや

ないか？

峰が不味いかなと疑問を口にしたが、何処からともなく再び現れていた大野がそう言つので、結局そのポストになつた。怪しいとかそう言つた話にはならないあたりがどこかここの人間は抜けていると言うか変わっているんじゃないかと思うアキ達の心境は、察する必要もなく解るだろう。

## 自力の救出（前書き）

一つに分けるといろを一つにしました。  
そのために少々長くなってしましました。

## 自力の救出

夕暮れ、峰は委員長の仕事で校長との会談。

ほかのアキやルイは全員が授業でおらず、委員室にはヤイナ一人がたたずんでいた。

・・・

初日は一日中居ろって言われてもよ・・・  
はあ、と面倒臭そうにため息を吐くと、遠慮がちに委員室のドアを叩く人物が居た。

(誰だ？)

授業中じやねエのかよ。と思いながらも、一応は副委員長の仕事を全うするためにもその人物を部屋の中へと促す。

「入れよ」

無愛想極まりないそのセリフに一旦ノック音がやむ。  
峰が居るとでも思っていたのだろうが、残念ながら人生そんなイージーモードには出来ていない。

目的の人物が居なくて引き返すかと思ったヤイナだったが、その人物は意外にも部屋へと入ってくる。

恐る恐るといった様子で入ってくるその人物は、パーカーがかつた金髪を携える整った顔をした美少女だ。  
身長はおよそ145cm。

胸は、お世辞にあるとはいえないが、それを気にさせないほどに魅力があるので問題が無いだろう。

スレンダー美人と言えば聞こえは良いだろう。

仕事柄たずねてきた人物の性格判断等をするようになつたヤイナが一瞬で女性の分析を終える。

胸は関係ないだろ？

馬鹿言うんじやねエ。胸や体のパーサッテエのはその人間の育つた環境を調べるにはうつてつけなンだ。

誰に言つてゐかなんて知らないがともかくもヤイナがそんなことを心中で思つていると、ヤイナの目の前に座つた人物は口を開いた。

「私を・・・・助けてください」

\*\*\*\*\*

「誘拐事件・・・ですか？」

峰が校長室で聞いたのは、ここ最近多いと言つた誘拐事件のことだった。

突然呼び出すのも頷ける・・・が。こここの校長が動いたとなればそれはつまり。

「こここの生徒が誘拐された・・・んですか？」

峰がそう言つと、校長が頷く。

「一人、昨日買い物に出かけている最中にさらわれてしまったようだ」

校長の言葉に、峰は思わず頭を抱えたくなる気持ちに駆られる。シアトルの寮に生徒を押し込んでいる理由をもつと切迫して教えておくべきだったか。

あまり社会の毒に触れさせまいとしての決断がかえつて仇になつたんだろう。

ヤイナに言えば鼻で笑われてしまうな・・・

そんなことを思いながらも、自分の仕事をこなすために峰は口を開く。

「それで、何を買いに行つっていたんですか？」

「それが、もう一人の被害者が口を割らなくてな・・・残念ながら分からぬんだ」

なんて情け無い連中だ・・・

あっけに取られてそう思つ峰の背後で、静かにドアが開いて何者が入つて言った。

「ああ、峰さんも。ちゅうじい良い。学生をさらつた犯人が分かりました。

・・・・それと、もう一つ、証報でいります」

\* \* \*

「『ゴースト?』

少女の口から出てきた聞き覚えの無い単語に、ヤイナは首をかしげる。

まあ、聞き覚えが無いこといつも、心当たりがないといったほうが正しいだらうが。

「はい・・・下町に居る犯罪組織だとでも思つてくれれば・・・」  
ぽつぽつと途切れ途切れに喋る彼女に若干のイラつきを覚えるが、  
ここはヤイナはある程度大人なのでこりえることが出来る・・・だ  
ろ?と思つていたのだが。

「なンだよ相談しに来たのに喋ることも纏めてねえのかよお前本当に相談するつもりあるのかよ」

面倒くさい・・・とため息を吐きながらそつ言つて、ヤイナは一言付け加えた。

「はつきり言えよ。俺は峰とは違つてそつち側の人間だ。どうせさらわれたお前の知人、金で自分の体売つてたんだろ?」

ズバリとヤイナに言い当たられて、少女は驚きの視線をヤイナに向ける。

「ついでに言えば、お前は尾行してたんだろ?理由はしらねえがな  
ヤイナの言葉に、たじろぎながらも少女は頷く。  
するとヤイナは、ンで?お前の俺にやつてほしいことは、なんなん  
だ?と、問う。

「えつと・・・その知り合い・・・四季つて言つたんですけど・・・  
彼女を・・・助けてほしいんです・・・」

彼女がやつとのことで、一大決心をしていつたその願いは

「は？ ンなの嫌に決まつてンだろオが」  
ヤイナの言葉に一蹴される。

まさかそんな言葉で断られるとは思つていなかつたのか、少女は驚愕に目を丸くしてまじまじとヤイナの顔を見つめる。

「端金で自分の体売つてンだ。それぐらいのことあつて当然だと思うべきだろオが。目の前につるされた餌に飛びついて自分から餓えたライオンの檻の中に飛び込んで行つた人間の事なんぞ、知つたこつちやねえよ」

阿呆か、といわんばかりに・・・実際言つたのかもしれないが・・・まあともかくもそんな勢いでその依頼を断つたヤイナはしばらくの沈黙の後、彼女の話は終わつたと判断して、委員室から追い出した。

\* \* \* \*

そして、その日の夜。

午後八時に、ことは起きた。

「志木さんは・・・いないのかい？」

女子寮の同部屋に住む女生徒に先ほど委員室を訪ねた志木という苗字の女性の人物の所在を尋ねたが、残念ながら帰つてきた返答は“いない”という一言だった。

親友がさらわれたから委員室を訪ねたかと思ったが、ずっといたヤイナに聞いて見ればこれまた返答はNOだった。  
まさか。

想像したくないがたどり着いてしまつたその答えに、背筋が凍る。

「二人目・・・？」

\* \* \* \*

「助けに来たのかい？」

峰が志木の部屋を訪ねていたその時、志木は親友がさらわれた現場を訪ねていた。

するとそこで出会った・・・いや、会いに来たとも言えるので出会つたなどといかにも偶然を装つた単語を使うのはおかしいだひつ。

「あたり、まえです」

目の前に舌なめずりをするように立つ太つた男みて心の底からどう黒い感情があふれ出す。

その感情に名前をつけるのならやはりそれは憎しみか、それとも激昂か。

良い子だね、やつぱリシアルに住む子は良い子だね。  
繰り返すように、歌つように男はそう口にする。

その歌を聞いて、かどりかは解らないが、男の背後にある建物から続々と人間が出てくる。

1、2、3・・・数え切れない。

こんな数の男に囲まれて、四季は正氣を保てるのだろうか。

全員が全員手にナイフや、凶器を持っている。

連中、四季に手を出していたら許さない。

そんな意思をこめた目で男たちを睨むと、男たちはこわいねえ、だの元気だねえ、だと茶化すように、まともに取り合つ氣も無くあしらしながら、ジリジリと志木との距離をつめていく。

そして、一人の男が志木を捕まるために肩に手をかけようとしたその瞬間。

志木の右手がひらめき、男の体に電気が奔る。

「ぐ・・・あつ」

悶絶しながら倒れ込む男を見ながら何事かと思つて志木を見ると、その右手にはしっかりと電気警棒が握られていた。

「わざわざつかまりに来るわけありません。私は私なりに、あなたたちを倒しに来たんですよ」

そう言つて、決意のこもつた目で志木は男たちを見据える。旧友をひどい目にあわせて、無事ですむと思うなよ。

品行方正生成優秀才色兼備と言われている私も、怒つたら少しばかり、怖いぞ。

\*\*\*\*\*

「ど、どおなつてやがる・・・」

「ハア、ハアと肩で息をしながら、目の前に立つ少女を見据える。志木と名乗った彼女は電撃を流す警棒一本で既に大男を八人のしている。

この狭い通路でいつせいに飛び掛るわけにも行かず、かといって一対一で戦いを挑めば防ぐことの出来ない電気警棒で一撃喰らつてその場でノックアウト。

「考えやがつたな・・・」

溢れる汗をそのままに笑つて少女を見据えると、少女は笑う。

「策も無しにここへ来るわけないでしょ」「う

ニヤリと笑う少女に底知れないものを感じる。

しかしそれにしても、この下町にゴマンと居るはずの構成員が援軍に来ないのはどう言う事だ。

この路地で挟み撃ちにすれば一瞬だというのに・・・  
まさか・・・それこそが。  
策か・・・?

\*\*\*\*\*

「どけ！殺されてえのか！」

野太い声を浴びせられる影の中に居るその男は囁いて言つ。

「ここは通行止めだ。お引取り願おうか・・・?」

狭い路地へに入る前の小さめの広場で、ヤイナは言つ。

「ここから先に覚悟の無い野郎はいらねえ。死ぬか、殺されるか。  
どっちがお好みだア？」

人差し指を突き出して魔方陣を構成しながら、愉しむようにそう言  
うヤイナに誰も適わないと援軍である男たちが悟るのに、さして時  
間はかかるないだろう。

\*\*\*\*\*

右拳を横殴りに振る男の攻撃をかがんでかわし、首筋に電気警棒を  
叩きつけて氣絶させ、その男の体を盾にして後続の凶器もちの攻撃  
をいなす。

男のわきの下から電気警棒を突き出して後ろに居る男を一人氣絶さ  
せる。

すると手元の警棒の柄についている電灯がチカチカと点灯する。

・・不味い、バッテリーが切れる。

この電気警棒が無くなれば一瞬でつかまることは必須。  
でも。

でも、引けない。

盾においていた大男の腹部を蹴り後ろに居る男たちにのしかかる様に  
蹴り飛ばし、坂のように道を作る男の体を駆け上がりながら後ろで  
押しつぶされている男の手からナイフをぎ取る。

タンツと男の方で跳躍し、警棒で下に居る男たちを氣絶させながら  
着地すると、ナイフと警棒で邪魔をする男たちを氣絶させながら建  
物へと入るために詰め寄るが、再び男たちに囮まれてしまう。

一体何人居るんだ・・・

内心ため息を吐いて、後ろをみると、先ほどまで活路となっていた  
背後の通路に敵が回ってしまった。

あせりすぎた。

心中で行動を後悔する暇も無く、男の一人が後ろから志木に飛び  
掛る。

振り向きざまに電気警棒を思い切りたきつけると、ボキ、という嫌な音を立てて根元から真っ二つに折れた。

・・・まずい・・・っ！

折れることを確認した志木は一瞬の判断で折れた電気警棒を建物の入り口へ投げつけると、およそ一秒後、電気警棒がすさまじい閃光を放ちながら爆発した。

その場に居た男たちを将棋倒しに吹き飛ばし道が出来るが、志木にも爆発のダメージが加わったために走ることはおろか歩くことすらも困難な状態になってしまった。

(三半規管がやられたわね・・・)

ぐらぐらとゆれる体をかろうじて支えて立っていたのも五秒程度で、すぐに腰が砕けたようにその場にへたり込んでしまった。

しかし、その腰が地面とぶつかることは無かった。

トス、とやさしく受け止められて、一瞬男たちに捕まつたかと思つて身構えるが、見上げたそこにあつた顔は先ほど自分を追い出した男だった。

「ヤイナ・・・さん・・・・・びつして・・・」

薄れいく意識の中、からうじてそう質問するがその答えを聞く前に志木の意識は志木の腕の中から離れていく。

ゆっくりと瞳を閉じる志木をゆっくりと地面に横たえると、ふう、とため息を吐いてはつきりと言つ。

「なに、俺は自分で危険に飛び込む奴は、嫌いじゃねエってだけだ。餌に飛びついたわけでもねエ。友人のために命はる人間なんざアそんなに居るもんじゃあねえしな。それにどうやら友人が体を張つてたのも理由がコイツに誕生日プレゼントを買つためだつたつてえのもまあ良い理由なんじゃねえか？女が労働力にならうつてえのも頼む場所も間違えたがな」

ハン、と鼻を鳴らしてヤイナはその場に居る男たちに告げる。

「お前等、俺たちに近づくのはそこが限界だ。チンケな遊びでハシヤイであるお前等の現実つて奴を教えてやるよ。それ以上近づいてみろ。攻撃されたと意識する前に、首を撥ねてやるよ」

ヴァン、と両手の人差し指に小さな光円を纏わせて、ヤイナは告げる。

「・・・まあ、近づかなくても・・・死んでもらうぜ?」

なんてこたあねえ。

ただの、掃除だ。

\* \* \*

殺し殺され、殺し合いは元来そういうもんだろつ。  
建物から戦闘の様子を見ていたゴーストの一人は、心の中で思う。  
ところがこれは何だ。  
合っていない。

ただの一方的な虐殺。

横たわった少女の横に立つその男は、まさに

「鬼神・・・」

思わず口にしてしまつたが最後、建物前の広場の敵を全員掃除した  
ヤイナの視線は窓に立つその男へと吸い寄せられる。  
キシ、と口が歪む。

その光景を最後に、男の意識は途切れる。

これが、鬼の棲む町。

下町の一面。

\* \* \*

「解決した？」

翌日校長室に呼び出された峰は素つ頓狂な声を出した。「ゴーストという暗部組織が最近暗躍していると言う話を聞いて、また長い話になりそそうだと思つたのだが、峰のその考えは斜め上の結果をもつてして終わりを告げる。

「どういう、ことですか？」

どうやって解決したのか、そう聞くと、開きづらそうな口を開いて放された言葉は峰に余計に衝撃を与える。

「ゴースト構成員全てが、死んだんだ」

あまりにも荒々しいその解決法を聞いて思わず呆れてしまう。この世界ではあまりにも人が軽々しく死んでしまう。もはやソレが当然だとでも言つよつた。

「それは・・・誰が・・・」

誰がやつたのか。

峰がそう聞くと、聞きたくない答えが返りてくる。

「その場に居た全員は正体不明の凶器で殺されたようだよ。周辺にできた戦闘跡から、その凶器は恐らく今の技術では再現できないだろ」と、そういう事らしい」

つまりそれはこの世の技術ではないと言つことだらう。だとすればそれを実行したのはウイザード。

ヤイナである可能性が大きいだらう。

そう頭の中で考えると、峰は思わず額を押さえて呻いてしまつ。つい先日まで病弱だと思っていた男がまさかいつも簡単に大量虐殺をしてしまう男だったとは・・・そこまで思つて、ふと考へる。

無法者の集まりとも言つて良いこの下町で、こんなことが今まで一回も起きていた訳がない。ということはつまり。

「私が知らなかつただけ、ということか・・・」

## 救護されたのに

もぎれた翼は、もう元には戻らないんだよ？

暗闇で囁くその声は、ズクリと心に突き刺さる。

「それでも元に戻すのが・・・僕だ」

そう僕。

巻き戻し屋さ。

耳にまとわりついて心に突き刺さる言葉を振り払うように口にして  
安堵する。

そう。

僕は、自分の翼をもう一度　　この手に。

\* \* \* \*

「ヤイナの本気？」

大野の工房で前ぶりも無く振られた質問にたじろぐが、すぐに氣勢  
を取り戻して大野は答える。

「そりや、見たことあるぞ。俺たちが何年の付き合いだと思つてる  
んだ？」

何を言つてゐんだお前は、とでも言いたげなその口調はまあ当然だ  
ろつ。

しばらくして、峰がその質問をした真意に推測を立てたのか、大野  
が口を開く。

「大方、ヤイナが人を大量に殺したとか思つてるんだろ？」  
カン、と手に持つていた鉄を火の中に入れると、大野は峰の顔を見

て続ける。

「昨日血の海が一つ出来たぐらい知つてゐる。俺だつてここに長年居るんだ。それなりの情報網はある」

でもな

「そいつらは全員死んじゃいねえよ」  
平然と、当然のようにそう口にする。

「いや、でも学校の話では全員が手口不明で死んでいたと……」  
そういういかけて思う。

その場の壁や地面に手口不明の傷跡があつただけで、死んだとは言つてはいない。

「あいつは基本的に人を殺すのをなんとも思わないけどな、ここは下町だし、まあ色々あつてそう簡単にはころさねえよ」  
そう言って、椅子から立ち上がって冷蔵庫の中にあるジュースを手に取り口に含む。

しかし・・・なんでまた餓鬼が遊びで作ったような組織を潰したりなんかしたんだ?

久しぶりにヤイナの行動が読めずに内心首をかしげていると、峰が口を開いた。

「どうか、ありがとう」

憑き物が落ちたようなその表情は、案じていたことが事実ではなかつたと解つてのものだろう。

・・・

なんだあいつヤイナのことが好きなのか・・・  
はあ、とため息を吐いて、罪作りな相方を思う。

アイツのことが好きだとかなんだとかつていう関係になつたのはこれまで五人目か・・・?

「なんて野郎だ」

思わず口に出してあせつて撤回すると、峰の背後に誰かが立つているのがわかる。

逆光で顔が見難いが、少し目を凝らせばそれが最近ここに越して来

た人間のものだとわかる。

「よお、そろそろ来ると思つてたぜ」

大野に招かれるようにして部屋の中に入ってきた女性は、意を決したように口を開いた。

「私に、翼をください」

\*\*\*\*\*

「・・・・ん」

見慣れない一室に、見知ったような友人と一緒にベットに「い」の状況は一体。

ふらつく頭を右手で支えてここにいたる状況を思い出そうとすると、ズクリと脳裏を刺すような痛みが走る。

なんなんだ・・・

思い出すことも出来ずに途方にくれていると、部屋の扉が開いてりんごをかじりながら歩く一人の男が部屋へと入ってくる。

「よオ、起きたか？」

二人が寝ているベットから少し離れた椅子に腰掛けると、私に何も手が加えられていらないリンゴが投げられる。

丸かじりしろとでも

どうせなら切つてよ、という願いをこめた視線を男に投げるが、男はその視線を受けながらも平然と話を始める。

「そいつがなんであそこに捕まつてたのか、は興味ねえ」

捕まつていた？

男の口から出てきた単語に首をかしげていると、男は面倒そうにため息を吐いた。

「ショック性の記憶喪失か・・・厄介なもん拾い上げやがつて・・・

」

男はそう言うと、私の隣に寝ている友人をたたき起こす。

ふえあ！？という間の抜けた声を上げながら飛び起きると、私が起

きているのをみて嬉しそうに微笑んでいう。

「やつと起きたんだね。眠り姫・・・ん？ 眠り姫？ もしかしてヤイナさん・・・」

「キスなんざしてねえよメルヘン女」

友人の妄言をアホか、と切り捨てて答える男。

マイナ、とはどこかで聞いたことがあるような名前だけれど。

「どオもお前の友人な、ショック性の記憶喪失みてエだ。まあ事件前後のことば覚えてないんだろうがお前のことは覚えてるはずだ。頑張つて思い出させてやるこつた」

男はそれだけいうと、部屋を出て行つた。

そして隣に座る友人の顔を見ると、困ったような笑つたような顔をして口を開いた。

この顔は・・・確か

「ごめんね、志木」

哀しんだ顔だ。

## 救護されたのに（後書き）

自分を助けてくれた人が一番損をしているのって助けてもらった自分がかなり責任を感じますよね

## 新たな戦争

「こんにちわー」

カバンを提げたアキが何でもやの扉をくぐり込んで入ると、そこにヤイナの姿しかなかつた。

「あれ、ヤイナさん帰つてたんですか？」

アキに声をかけられて、リングゴを齧っていたヤイナがアキに視線を向ける。

「ああ、野暮用があつてな」

そう言つてリングゴを齧りながら本を読んでいる姿はとても何か用事があつたようには見えないけれど・・・まあ終わつたんだろう。

心の中でこの人はサボつてないサボつてないと暗示をかけながら、アキはヤイナに聞く。

「今日は依頼無いんですか？」

今日は、といふよりも今日も、か。

どうせ無いんだろうなあと想いながら聞くと、意外にもその答えはYESの肯定の一言だった。

「え、仕事の内容は？」

「お前薬局の場所わかるか？」

薬局？

そんなものこの町にあるのかすら分からないと答えると、ヤイナはアキの持つているタブにデータを転送する。

すると、タブの上に立体の下町が表示され、現在地と薬局の場所が表示される。

「便利ですね」

思わず感想を漏らすと、大野は変態なんだ。と良く分からぬ答えが返つてくる。

どうじうことだ。

まあどうでもいいんだけれど。

「で、薬局に何しに行けば良いんですか？」

「薬局に行って聞け。ついでに包帯と抗生物質も買って来て」

「そういうわ、300Gを渡される。

六万も渡すのか、包帯と抗生物質を買つためだけに。

「包帯三万と抗生物質三万だ。適当に買い漁つて来い」

あつばうとだなー

ヤイナの指示の仕方に呆れながらも了解し、家を出る。すると、日陰ばかりのこの町には珍しく、冬を感じさせるやわらかい陽気がヤイナの家の前を照らしていた。

「そろそろ冬だなあ」

\*\*\*\*\*

「翼をください・・・か」

二人目の妙な言葉を口にしたその目の前の人間はルイだった。

意を決したようなその表情に氣おされるほど若い大野ではないが、それなりの決意があることは認められる。

「これを、ヘルディアっていう人に渡されたんです。大野さんに渡して翼にしてもえ・・・って」

そう言って手渡されたのは手のひらサイズの赤く彩られた赤い剣。「いこいつも・・・」

感心したように、呆れたように嘆息する。

「一体なんなんだ？」

大野に手渡されたソレの意味することが分からぬ峰が、大野の手のひらを覗き込みながら聞く。

「これは俺がオリジナルを作るのに必要なコアっていうパーシだ。

コレを作れるのはヤイナと・・・ヤイナの妹であるあいつだけだ」

\*\*\*\*\*

「ちゃんと渡してくれた?」

あどけない少女がヘルディアに聞くと、ヘルディアは微笑んで頷く。  
「うん。彼等は元気にやつっていたよ。君のお兄さんも元気一杯だつたよ」

ヘルディアの言葉を聞いて、少女は満面の笑みをもつてヘルディアをねぎらう。

「ありがとう!」

「これぐらいならお安い御用だよ。いつでも頼んで良いよ。ヘル」  
そんなふうに、一人でほほえましく会話を交わしていくと、一人の女性がその会話に入つてくる。

「おそれながら女王陛下」

かしづいてそう言つ女性は、鎧に身を包んだ女騎士だ。

「なに?」

純白のドレスに身を包んだ女王陛下と呼ばれたヘルは女騎士の報告を聞く。

「オールドクラスが動き始めたようですね」

その報告を聞いて、今までの朗らかな笑みは一瞬で消え去り、そこには緊張した表情が浮かぶ。

「・・・・そう」

明るい声から、一転して冷たい声へと変貌する。

豹変、といった方が正しいか。

「あの鉄臭い連中、戦争でも始める氣かしらね」

両手を組んで顎を支え、独り言とも取れない言葉を口にする。

「いいわ。新参の若造共々、今度は誰にも邪魔させずに潰してあげる」

神秘に現実が勝てるわけないでしょ?

そう言って、はためくドレスを手で押さえながら玉座を立ち上がり、

眼下に並ぶ百万の兵士に向かつて告げる。

「各員、戦闘準備をしなさい。連中が敵対するといつのなら、ヤイナに危害を加えるといつのなら是非もない。飛び掛る火の粉は払うのみよ」

「全軍

出撃」

「いつててて・・・・・」

体にできたいくつもの傷に、Fクラスの委員長が包帯を巻いてくれているのだが、これがまた不慣れなのかとても痛い。

「う、ごめん」

そう謝りながらも、あそるあそるといった様子で処置を続ける。

「いや、ありがたいよ」

処置が終わってお礼を言つと、どこへ行くともなくFクラスの中で二人佇んでいた。

そもそもの原因・・・

この傷の原因是、やつぱりヤイナたちを逃がしたことだった。

それが原因で保安局に捕まり拷問。

「拷問なんてこの時代にやることじゃないさね・・・」

はあ、とため息を吐きながら愚痴を漏らす。

三日にわたる取調べは、何の成果も得ることはなかった。

それはモンキがやつたことがただ単にルートの検証というだけであつて何処にハツキングしたわけでもないからだ。

ただ単純にここいら一体の地理に精通した男が一人、友人に手を貸した。

ただそれだけで済んだのだ。

少なくともこの時は。

\* \* \*

「良いヒーローが居るじゃないか・・・うん?」

日の国の一番高い塔の上、モンキたちを見下ろす大男が一人。

その大男は、モンキたち一人に近寄る黒いスーツに身を包んだ男が二人いるのに気付いた。

「さ……て。あの黒服はプロ……だよなあ。手を貸そつかなあ。  
貸さないでおこつかなあ……」

＊＊＊＊

「おじおじ……公的に開放しといて後で処理つてか……笑えな  
いな……」

委員長と一人での下校時、学校をでてしまふと一人の黒服に  
通路の前後をふさがれてしまう形に立たれてしまった。

日の国がここまで腐つてるとは予想もしてなかつた。  
心の中で隣に居る委員長を巻き込んでしまつたことを悔いて歯軋り  
する。

「委員長」

ボソリ、と小さく隣に居る委員長にさやきかける。

「合図をしたら後ろに本気で走つて。田を瞑りながら

一体何をするつもりなのか

そう聞くまもなく、モンキは右ポケットからシャーペンを一本指の  
間に挟んで取り出す。

「今だよ！ 奔れ！」

そう叫びながら、振り向きたまに後ろに居る男の両の手にシャーペンを一本指の  
間に投げつける。

この距離でこの不安定さであったのか。

その不安はあつたがここは自分の腕を信じるしかない。

ヒュ、と空氣を切り裂いてとんだシャーペンはまっすぐに男の両の  
目を貫いた。

よし！

思わず心中でガツツポーズをとると、背後に居た男が歯軋りをして襲いかかる。

両手を振りかざして捕まえようとするのを逆手に取り、攘にもぐりこむ。

ためらいもなく金的をかまし、一人の男を両方とも倒したとそう思つた瞬間。

ドス、と右肩に鈍い衝撃が走る。

何だ、と思つて後ろを振り返ると、そこには黒光りする小さな拳銃を構えた男が横たえながら銃を撃つたのだと分かる。

目が、潰れているのに・・・？

その疑問が解消されることはなく、モンキの意識は薄れしていく。とにかく・・・

今は、あいつに連絡を・・・

あいつに・・・！

ゆつぐりと、動かない指を無理やり動かして、携帯でメールを打つ。

たすけ↑

そこまで打つて、腕ごと携帯を踏み潰される。もはや潰された腕の感覚も消えた。

もう だめだ。

消えていく意識の中、モンキは委員長に謝った。  
巻き込んで・・・」めん

\* \* \* \*

薬局についての仕事は地面にある重い荷物を棚の上に持つていくといつものだった。

こんな雑用もこなすのが何でも屋である。

これと言つて不満があるわけではないが。

ふう、とため息を吐いて一息ついていると、ピリリ、と聞きなれない携帯の着信音のような音が耳に響く。

ん？

と首をかしげながら周囲を見るが、ゼリにもソレっぽいものがない。何だらう、とそのままスルーしようかと思つたが、もう一度ピリリ、と鳴る。

近いな。

そう思つて音の出所を探すと、どうも真下……ああ。

これが。

タブレットを取り出すと、画面に小さくウインドウが浮かんでいて、そこにこう文字が書かれていた。  
見慣れたメールアドレスの下に、一つの文章ともよべないような、  
单語。

たすけ

「モンキ・・・・?」

\* \* \*

剣のアクセサリーを受け取つてなにかしら加工をし終えると、大野はルイに返した。

「え、もう終わつたんですか・・・・?」

疑問を抱えながら受け取ると、それは既に剣の形をしておらず、ディスクのような物体へと変化していた。

「これがオリジナルマーメイド機”焰”だ」

焰。

その名の通り、ディスクは深紅に染まつている。

けれどもこれは・・・・

「アルマ・・・・って、この、アーマーの形をしてるんじや・・・?

アルマを知つてゐるなら誰でも知つていいよつの常識のはず。

しかしこの田の前に居るアルマ開発者は、そのアクセサリーを加工

して、ディスク状にしてしまった。

「それは・・・ある意味正解で、ある意味不正解だ」

大野は槌などの工具を片付けながらルイに説明する。

「そのアクセサリーの状態は、言ってみれば加工前のダイヤモンドみたいなもんさ。」

まあ、本物を作れるのはヤイナとヤイナの妹しかいないから連中が使つてるのはまがい物。

人口ダイヤモンドってところだ。

人口ダイヤモンドほど上手く出来てはいないが。

「そうだな・・・例えるならまだ亜鉛か。連中が使つてるアルマつて奴は」

つまりそれは天然はあるか人口ダイヤモンドにすら程遠い。完成はおろかスタート地点にすらいたつていらないというのだ。

それを技術が全く進んでいなかつた30年前に完成させてしまったという。

この男は一体・・・

「使い方は」

\*\*\*\*\*

ピリリ

電話の着信を知らせるタブレットの取り出して耳に当てるとい、張り上げたアキの声が耳に響く。

何かハプニングがあつたんだろうが、それにしてもうるさい限りだ。

「なんだよ落ち着いて話せ」

そういうさめると、少し大人しくなつたアキは言った。

『俺たちがここに逃げるのに協力してくれた友人に、何があつたみたいなんだ』

「日の国、だな？」

透き通つた青いミーバンの運転席に乗つて、ヤイナは確認する。

「え、あ、うん」

突然の展開についていけないアキが歯切れの悪い答えを返すが、それだけでも目的地の確認には十分な言葉だ。

「じゃあ、行くぞ」

ガコン、とギアを変えてゆっくりと車は出発した。

車に乗り込んだのは、アキ、ルイ、コロ、木下、峰、大野、ヤイナ。言つて見れば下町の主要メンバー全員だ。

大野達は色々な買い物ついで、という理由で付いて来ている。

クネクネと曲がりくねつた暗い道を安定して運転するその様は、とてもあんまり運転していない初心者のそれではない。

「ヤイナさんつて・・・運転も出来たんですね」

アキが驚いたようにそう言つと、ヤイナは肩越しに眼だけを後ろによこして答える。

「んま、こんだけ長く生きてりやあな」

そういうながら、しばらく建物の森を走つていると突然、日の当たりが良い場所に出た。

そこは建物が一切無く、木々が生い茂つてゐる。まさに自然そのものが残つてゐる場所だ。

「え・・・？」

建物の森からそのまま外殻に行くものとばかり思つていたアキ達はそろつて声を上げる。

少し周りを見れば、シカやうさぎが元気に跳ねてゐる。

大き目の湖の端では釣りをしている人さえいる。

20世紀ですらなかなかお目にかかれないここまで自然が未だ残つていたなんて。

驚いたように回りを見渡していると、3km程進んだところで、警立つ外殻に当たった。

その根元まで行くと、穏やかそうな老人の警備員が、笑顔でミニバンを迎える。

「おやおや、久しぶりだねえ。ちゃんとした方法で日の国に入るのは」

穏やか過ぎて、今が戦争中だなどと微塵も感じさせないこの風景を守っているのはその老人が話しかけている本人だ。

「ちょっと後ろの奴らが用あるつてんでね。俺はただの足係さ」苦笑いしてそう言つと、ヤイナは懐から何かを取り出して老人に手渡した。

「ほいよ、通つていきな」

老人がそう言つと、ガチャリ、と外殻の扉がゆっくりと開いてヤイナたちを招き入れる。

「ありがとサン」

一言礼を言つて窓を閉めると、ゆっくりとエンジンを始動させて進む。

外殻を越え、中へ入ると雰囲気が一転。

懐かしい空氣に体が包まれるような気がした。

「久し、ぶりだね」

ポツリとルイがこぼしたその声に、アキ達は無言で頷く。  
もう帰つてくることは無いと思つていた場所。

妥協でも負けたわけでもなんでもない。  
救出。

ただそのためだけに。

僕達は帰つてきた

否、来たんだ。

\* \* \* \* \*

「ンじゃあ、俺たち三人は適当にそこらへんに居る。用が終わった  
ンならタブ使つて連絡しろ。良いな?」

車から出て、ヤイナはアキ達に釘を刺す。

「こりでお前等がどういった行動をとるうが俺は責任を取らないぞ、  
と。

「保護者無しで過ごしている時点で下町では何歳だろうが立派な成  
人ととられる」

後悔したくなるような行動をして、拾い上げて再び空に放つてく  
れるような人間はもう居ないぜ  
そう言って、ヤイナは大野と峰を引き連れて路地へと吸い込まれる  
ようにその場を離れていく。

だんだんと影に呑まれて姿が薄くなるヤイナを見送ると、スイッチ  
が切り替わったように四人の表情が引き締まる。

「よし、じゃあ各自情報収集と独自先行で、良いね」

「ふう、とため息を吐くと、アキは最後に一言を付け加える。

「あくまでも市民には穩便主義だった日の国がここまでやっているつ  
てことはそれなりに覚悟を決めているつことだ。全員、無事に元  
に戻れるよう」「

殺し殺される覚悟は出来たか、と暗に意味をしたのだが、今まで平  
和な日の国しか知らなかつたその場に居た人間はいまいちその意味  
を掴みきれていなかつた。

\* \* \* \*

暗い会議室、一人の男が不敵に笑う。

「ふん、ねずみが侵入 排除するか？」

男がそう言つと、男の正面のディスプレイに写る小太りの狸のような人間は答える。

「行けるのか・・・？日高の殺戮者とも呼ばれる、ヤイナ フレイニアだぞ」

依頼主たる男のセリフに、第三次世界大戦を休戦に追いやつた一つの戦いを想起する。

日高というただっぴろい平原に両国の全てのアルマ、全ての兵器が集結した。その日。

当時の人間は全員が相手を負かすことを考えていたために相手に勝つこと意外を全て排除していたが、もしあの場所で大規模戦闘が行われていたのなら。

そういうばどうなつたんだろうな、と思つた学者がシミュレーションデータを公表した。

結果。

地球の約三分の一が、削り取られていた。

あまりに大きなエネルギー体であるアルマが同時に四つ以上爆発すると、アルマのエネルギーが相乗効果をもたらしその爆発力は約100倍にも増える。

そしてその爆発が更に相乗効果をもたらしたのなら。

シミュレーションデータが一回で、かなり乱雑にやつたために地球の三分の一で済んだが、かなり綿密にシミュレーションしたのなら、地球が半分削れていっても仕方ないだろ？  
なぜならあの場には。

数千ものアルマと、敵兵器をいつそうするために作られた超巨大爆撃砲が設置されていた。

ソレが意味するのは。

超巨大爆撃砲が発射された瞬間に、地球が終わる。

その事実をいち早く察知したウィザードが日高に参入。

そして、数万の命と引き換えに、最低でも地球の三分の一に住む何億人の命が、救われた。

一部始終を想起して、男は鼻で笑う。

「大げさな伝説さ。古錆びた人間には早々にござ退場願おう……」

この世界はもう、お前等の時代では、無い」

夢を見て空に浮かぶ人間を、現実という地面に叩きつけてやるわ。

\*\*\*\*\*

「さあ、始動だ」

ヤイナに殺氣を直に喰らつて幾分か気勢が抜けてしまった嗤う骸骨樂団のリーダーだったが、彼はそれをものともせずに一人に指示を出す。

「幼い羽ばたきが世界を変えるといふを、連中に見せてやるうじやないか」

\*\*\*\*\*

「フフフッ・・・世界の組織という組織が動き出したね・・・?これは空を汚すのか、清浄するのか・・・、さあ、第五戦線が、そろそろ始まるよ」

SET

\*\*\*\*\*

青いミニバンを出発して既に20分、現状は最悪と言つべきなのか

も 知れない。

Fクラスの委員長と名乗った女性と出会った。彼女から得られた情報は、彼は既に施設へと送り込まれていた。

その施設の名前とは。

### 特異Sクラス

「嘘・・・でしょ？」

委員長からその単語を聞いたココは、既にモンキを救うことを半分あきらめていた。

\*\*\*\*\*

ヤイナは別の用事があるといつてどこかへ行ってしまい、今は荷物もちである峰と大野一人だけが買い物をしていた。

・・・・

俺がこいつのこと苦手だって事知つて一人にするからまったくやつてられないぜ・・・

はあ、とため息を吐くと、ソファの品定めをしていた峰が怒ったよう、困ったような表情で大野を見る。

「大丈夫、かな」

一瞬値段が、という意味かと思ったが、この場合はアキ達の事だろう。

「ま、大丈夫じゃねえの」

あつたりとそう返すと、峰はまだ心配そうに言葉を続ける。

「やつぱり助けに」

峰がそういうかけたところで、大野は峰のその先の言葉を言わせまいとめる。

「心配なのは分かるけどなあ、お前、ヤイナの性分をまだ分かっち

やいないみたいだな。基本的にあいつは人につめたい。確かにそれは認める。でもあいつは身内には優しいんだぜ」

既に数えるのも面倒な年月を共に過ごしてきた大野にとって、ヤイナの今の行動は予想通りだつた。

彼は、必ずアキ達の窮地に救いの手を差し伸べるだろう。

そして、俺達も

\*\*\*\*\*

「僕はね、君達をここに入れるのもやぶさかではないと、そう思つてるんだ」

特異Sクラス。

そこはアルマを使える事が前提条件としてあるクラス。

そこには、様々な才能を持つた人間が集結する。

その特異Sクラス校舎正門にて、アキたち四人は特異Sクラスの人間の一人と、会話していた。

「なら、通してくれないか?」

アキがはやがねを打つ心臓を沈めるのに必死になりながら、そう口にする。

・・・

下町で何回か戦闘を繰り返してある程度の戦闘能力値を得て、分かる事がある。

下町で相手にした連中はただの素人で、目の前に居るこいつらは、その道のプロであるという事が。

慎重80cmはあるうかというその男は、伸ばし放題な髪を邪魔そくに払い、腕組みをしてアキを見下ろして言う。

「けれどもそれは僕自身の意見としてであつて、組織としては君を通すわけには行かないんだ」

男にそういうわれ、一旦退くべきか、脳裏でその選択肢を取ろうとした

たとき、タブレットに一通のメールが来る。

こんなときになんだ、と思いながらも、視界の隅に浮かぶメールアイコンを視線だけでクリックする。

つこちつき見つけた変態機能の一つだ。ポロン、と軽快な音を立てて開いたメールに記されていた文章は、簡略にアキ達をせかすものだった。

ジョイントミスのチルドレン、覚えてるよな？

その一文だけで、ヤイナが何を言おうとしているのかを把握する。つまり現状ここで撤退という選択肢を取る事は出来なくなつたと、そう言つわけだ。

急がば回れ。

そんなセリフもあつた気がするが、ここまで切羽詰つてしまつてはどれをとっても同じだらう。

「じゃあ、力づくでどう？」

全く同じ台詞を言おうとしたといひで、その台詞をルイに取られてしまつ。

「お前

」

どうこうもりだ、そういうとしたといひで、自分で自分を制する。

自己犠牲精神は、誰のためでもない自分のためだらう。奴らがやりたいところのならやらせてやれよ。

下町での経験で生まれたこの言葉が、アキをすんでのといひで制止させる。

「わ、分かった 頼んだ」

アキ達はそう言つと、大男の脇を素通りしていく。

行かせない、と大男が振り返つて止めようとするのを、ルイが声をかけて止める。

「あなたの相手は・・・」の私よ。でかいの」

ギュ、と右拳を握り締めて大男を止める。

初めての、戦闘。

命の安全が保障されたルール上での格闘技じゃない。

命が掛かつた真剣勝負。

緊張しないわけがない。

ゆっくりとふりむく男を見据えながら、早鐘を打つ心臓を一生懸命に鎮める。

フウ、フウと規則正しく呼吸を繰り返しているうちに、次第に心臓の鼓動がゆっくりと通常の鼓動に戻るのをはつきりと感じ取れた。緊張を自分のものにした瞬間だ。

「終わったか？」

余裕のある表情でその場に立っていた男に声をかけられて、ルイは笑って答える。

「ええ、おかげさまで」

\*\*\*\*\*

同時刻 外殻の上にて。

「やあやあ全く下町の人間がここに出てきてるとは驚きだね」

間の抜けたその声を出す男の隣に、小さめの女性が風に髪をなびかせて立っている。

「そうね、メルティ」

大して興味もなさげに答えるその少女の名は、ティリアといつ。そこまで長くはない髪を両サイドで結んだピンク色の短いツインテールを揺らして外殻の上に座る彼女は、いかにもといった感じの無気力さを感じさせる。

「それにしても、何で私が？面倒なのよ、外に出るの」

「ハア、とため息を吐きながらそう言つ様はとてもだるそうで、とてもアウトドア向きの活発な人間とは思えない。」

「一応、僕達の目的は世界の破滅という厨二真っ只中な男子でも思

わないような目的さ。しかもそれを割りとまじめにやるうとしてるんだ。だったらそろそろ活動しないと破滅させる頃には僕達はヨボ

ヨボになっちゃうよ」

「そんな目的追つてるのアンタだけだつて、絶対」

「それは困るなあ」

たはは、リーダーの面影なく笑つていると、ふとメルティの視線が険しくなる。

「どうしたんだい？」

何事かと思って聞くと、メルティが口にした。

「あいつ」

彼女の視線の先には、ワールドランク第18位の男が一人。

「ねえメルティ。気が変わつたわ。私今からちよつとやる気出してこの国滅ぼしてあげる。共倒れも良いかも知れないけど、こうやって暴れるのも・・・良い物よね」

そう言つて囁うメルティリアの口は、半月をかたどつたように綺麗に、狂気に染まつっていた。

\* \* \*

「へえ、案外この国の先鋭兵士も暇人が多いんだな」

買い物袋を車につめた大野は、周囲に峰以外に誰も居ないのに口を開いた。

しかしそれはただ単に峰に見えていなかつたというだけで、確かに敵はそこに居た。

「しかも二人とはね。」

そう言つて振り向いた大野は誰も居ないはずの空間に向かつて話しかける。

「出できたらどうだ?」

大野がそう言うと、大野がずっと凝視していた場所がうつすらとゆがみ、そして人が一人、現れた。

「よく、分かりましたね」

深紅の髪を携え、四肢をがっちり装甲で固めた女性が感心したように呟く。

「なに、あいつが幽霊を肯定する存在なら、俺は幽霊を否定する存在だって、ただそれだけの事さ」

\*\*\*\*\*

「始まる始まる始まるねえ」

誰の翼が折れて、誰が羽ばたく・・・否、誰が飛ぶのかな?

## FIGHT

FIGHT

日の国を舞台上に、様々な人間が敵として対面している。

そんな折、ゴング代わりとなつたのが。

\* \* \*

『もし戦闘になつたら、このディスクを拳で思い切り叩くんだ』  
脳裏に、はつきりと大野の声がよみがえる。  
この深紅のディスク。

これが私の 翼。

「行くわよ」

そう言つて、ディスクを上に軽く放り投げ、自分の目の前まで落ち  
てきたディスクに照準をあわせ、思い切り右拳で叩く。

次の瞬間。

まばゆい閃光がほどばしり、何かが割れる音が、甲高く響いた。

閃光消え、視界がはつきりとしたときに真っ先に目に入つたのは、  
真っ赤な田の前に浮かぶ文字だった。

”焰零式”

それが、ルイの武器であり翼の　名前だった。

深紅の足を包む巨大な装甲。

両の手を包む手の甲の上に位置する部分は尖った円形状の筒。その中にある手は、薄い紅い装甲で包まれていて、拳には紅いグローブのようなものがはまっている。

ここまでは良い・・・が。

肝心の武器がない。

そう疑問に思つた次の瞬間には、目の前の男はアルマを装着し、今までに巨大な槌を振り上げていたところだつた。

「・・・・・っ！」

慌てて後ずさりしようとすると、少しだけ飛ぶつもりが、一瞬で30m以上の距離が開く。

なんていう出力なの・・・

自分の装備しているアルマのどんでもない出力に驚きながらも、武器を探して体をまさぐる。

しかしその何処にも武器になるようなものは着いていない。

ここまできてまさかの詰みか、そう思ったところで視界の隅に一つの剣の画像が表示され、女性の声が脳裏に響く。

『頭で粒子が体から噴出しているのをイメージしてー』

え、え、何なにどうこうことなの

思考が追いつかずに何をして良いか分からずたじろぐが、視界にこちらへのすごいスピードで迫る男を捕らえ、動搖している暇は無いと判断して一旦呼吸を落ちさせる。

頭で、粒子が体から噴出しているのをイメージ・・・

カチン、と何かのスイッチが入ったような気がした。

その瞬間に、体の回りを金色の粒子が漂う。

『上出来よ。そうしたら次はその粒子が右手、左手どちらでもいい

わ。どちらかに集まつて剣をかたどつてゐるよつたイメージをして！  
時間がないわ急いで！』

女性に急かされる様にして、右手に剣をかたどるイメージを作り出す。

すると、一瞬の瞬きをする間に右手にはイメージそのものの剣が出 現していた。

「え・・・・？」

なんで、と思う暇もなく、脳裏の女性が叫ぶ。

『驚いている暇は無いわよ！敵の攻撃の衝撃波、あと五秒で到達するわよ！自分の正面に粒子で壁を作つて！』

再び思考が追いつかないままに、自分の前に粒子で透明な壁を生成 する。

あわてて作ったせいか、粒子の壁は縦横じゅうもんほどもあるよ うな巨大な壁が作られた。

そして、丁度五秒後。

ズン、という大きな音を立てて壁に衝撃波がぶつかり、衝撃波が四 散する。

「これ・・・すごい」

思わず感心して呟くと、ソレを叱責するよつに女性が叫ぶ。

『感心してる暇も無いわよ！敵、来ます！』

女性の声に弾かれるよつにして顔を上げると、すぐ近くにまで敵が 近づいていた。

緑の装甲を纏つた男は大きな槌を振り上げている。

振り下ろす予備動作が終わっている

『頭で自分の背中でもどこでもいい！とりあえず体のどこかにある ブーストが爆発したよつなイメージを作つて叩きつけて！』

どこでもいい。

その言葉を聞いて、とりあえず左肩にそのイメージを”思い切り”

叩き付けた。

すると次の瞬間。

世界が崩れ、気付いたときには槌を振り下ろした男から100mはなれた場所に立っていた。

『体感したわね。想像したときの強さによってブーストの出力は変わるので。基本操作はこれぐらいよ。それと離れたから説明しておくわ。大きな注意点が一つあるの。それはまだあなたの体にこの焰零式が適合しきってなくて、粒子の数が制限されているって事。粒子がなくなれば一回武器を壊されたら修復できないし、壁も作れないしブーストもつかえない。まあかなり多くのあるからたぶん大丈夫よ。これで説明は以上よ。後は敵を・・・倒すだけ』

もう少し早く言つてほしかったと言いたい所だが、あの状況では仕方ないだろう。

「これで・・・準備完了・・・って事ね」

ゴクリ、と生唾を飲み込む。

本当の意味での闘いが今、始まる。

ずっとじりと重量感溢れるゆつたりとした動きで一いつひらへ向き直ると、男はゆつくりと槌の頭を頭上に振り上げる。

何をするつもり?

脳裏でそう疑問符を浮かべた次の瞬間。

ドン！と槌を思い切り地面に叩き付けた。

刹那。

地面を衝撃波が這うようにしてルイに襲い掛かる。

「さっき壁で防御したやつ・・・か」

必要最低限の防御で済ませたいが、この衝撃波自体が初めてなので物をぶつけて攻撃をかわすのは得策ではないだろう。つまり。

必要最低限の出力で、けれどもギリギリの線からは余裕を持って、かわす。

ソレが今私に求められている技術。

いや・・・待つて？

頭に、とある作戦が浮かび、ルイはそれを採用した。

「さあ、反撃よ」

ルイはそう言つて、ギリギリまで地面を這う衝撃波をひきつけ、大きめの壁を”わざと”もろく細かい隙間を作つて生成した。

そして、衝撃波との衝突。

ドン！と先ほどの堅牢な壁とは違つて呆氣なく壊れた壁は、土煙を盛大に巻き込んで撒き散らした。

視界がさえぎられるほどに濃厚な土煙の中から、ルイは地面を蹴り少し斜めに飛び出す。

そして両足の足の裏と、両肘を後ろに突き出し、その四点全てにブーストを叩きつける。

ドン！とすさまじい音を響かせての突進は、呆氣なく後ずさりをすることできわされるが、しかしルイの攻撃はここからが本番だつた。

「手本、ありがとうね」

極限の集中により時間がスローに流れる中、男はルイが笑うのをはつきりと視界に捉える。

ドン！と地面にすさまじい勢いで着地したルイの周りに、突風が吹き荒れる。

着地と同時に体を捻つていたルイは、右手に持つた剣に突風を粒子で導いて纏わせ、捻つていた体をはじくようにして元にもどし剣を下から右斜め上に切り上げるようにしてなぎ払い、剣に纏つた突風を吹き飛ばす。

瀟、と綺麗な音が鳴つた刹那、男の正面の表皮が真つ一つに切り裂かれた。

飛ばされた剣戟が男にぶつかり爆発して周囲ごとその場を抉り取る。近くにあつた学校の石壁を巻き込んで爆散したのを見て、ルイは判断する。

「勝つた・・・かな」

ふう、とため息を吐いて緊張を解こうとしたその瞬間。

『馬鹿！緊張を解かないで！死ぬわよー』

脳裏で女性が絶叫したのに弾かれるようにして顔を上げると、すぐそこには槌が迫っていた。

「しま・・・・つ！」

慌てて両手で顔をかばう様にして覆つた次の瞬間。ベギ、と嫌な音を耳に響いたと思うと、足から地面の感覚が消え、そして視界が反転。

次に気付いたときには近くの打ちっぱなしのビルに叩きつけられ、地面に倒れていた。

「なに・・・・が」

何が起きたのかはつきりとは分からぬが、憶測は出来る。恐らくとてもないスピードで肉薄され、その勢いを利用しての槌での打撃。

彼は完全なパワータイプだとばかり思っていたがこんなところに誤算があつたとは。

彼は完全に

「スピードタイプだよ」

ヴン、と空氣を震わせて現れた男はその台詞を口にしながら槌を振り上げてルイの腹部に思い切りめり込ませる。

メゴッと金属がへこむ嫌な音が耳に障る。

・・・勝て、ない

空中に浮かびながら、絶望感に打ちひしがれる。

アルマを手にしたところで、史上最強と言えるかも知れない武器を手に入れたところで、操る人間が弱ければ、結果は同じだ。

私はもう、勝てない。

ドスン、と地面に着地し、起き上がる気力もなく地面に横たわる。そして近寄る男を視線に捕らえるが、そのまま何をするでもなく、横たわつたままだ。

『あなたは、また。無力に負けるのを良しとするの?』

女性の言葉が、脳裏に響いたその瞬間に、燃え盛る何かが胸の内を焼いた。

ゆっくりと振り上げられる槌を見ながら、ルイは思つ。

また、あの日みたいに、無力に負ける。

あの日。

両親が死んだ、あの日。

「いやだ」

ボソリと呟いた次の瞬間、男の手にあつた槌は振り下ろされた。しかしその槌が肉を碎く事はなく、碎いたのは乾いたコンクリートただそれだけだった。

あの一瞬でかわしたのか

驚きをこめた表情を顔に浮かべて顔を上げると、10mほど前に肩で息をしたルイが立っていた。

「もう、負けられない。負けたくないのよ」

ガシュン、とアルマの各所から、蒸気が噴出され、ルイの周囲に浮いていたパーシが次々にルイの体に装着されていく。

「焰零式改め

『フュニックス』

「再起動

。」

やつとりJRCモードを起動です。

## ルイの真価

「ピンチになつての覚醒モード……つていうことかい？ 隨分と『都合主義じやないかい？』

呆れ顔で、緑色のアルマを纏つた男はルイの背中に浮かぶ深紅に染め上げられた翼を見ながら言うと、ルイが笑つて答える。

「何を言つてるのかしら。私は今まで初期セットアップもされていない状態で戦つていたのよ？」

とどのつまりそれは、当人に合つていない装備で戦つていたと言う事だ。

例えて言つなら、小さな子供に不釣合いなほどに大きな重たい剣を持たせて戦わせる。

しかし彼女はそんな状態で、ファーストとは言えど戦闘訓練をつんだ彼と対等に戦えていた。

そんな奇跡とも言えることをやつてのけた目の前の少女に、男は好奇心を寄せる。

「君のその機体……見たことない形をしているね……君のそのアルマは何世代型……なんだい？」

ゆっくりとした口調でそう問われ、ルイは答える。

「そうね、言つなれば……」

「零世代よ」

自慢げにルイがそう言つた次の瞬間、ルイの周囲に突風が吹き荒れる。

「両手に、剣を」

仄かな光を放つて両手に深紅に染め上げられた剣が出現する。

「私はね、剣道で全国一位になつたの」

剣道という命が守られた競技で培つた動きが何処まで通用するか、なんてことは分からぬけれど。

「あの公式では竹刀は一本しか使えなかつたけどね」

私の本気は、二刀なのよ。

フリリと、対してかまえる事もなく立つたと思つた次の瞬間。ルイの姿が消えた。

男は周囲を確認するよりもまず、自分の最高速度をもつてしてその場から脱出する。

ドン！と地面を抉つて一瞬で40mほど移動するが、ルイは男に勝るとも劣らない速度で追随する。

自分の速度をひじに備え付けられたブーストを使って一瞬で殺すと、男は槌に衝撃波を纏わせて自分の真下に叩きつける。

それは槌で叩くというよりは、槌で地面を突くといったほうが正しいのだろうか。

コンクリートで出来たはずの地面がいとも容易く粉々に砕けた次の瞬間に、男の周囲に衝撃波の竜巻が壁のように発生する。

「全方位防御、風の鎧だ」

お前にこの防御を破れるか・・・っ！

すさまじい速度で迫るルイはその勢いを殺さずに、右の剣で斜めに一太刀入れた。

キイイイイイイイイイイイ

金属が削れるすさまじい音が周囲一体を埋め尽くす。

その瞬間に男は確信した。

勝つた　　と。

しかしその金属が削れる音の発生源はルイが持つていた剣ではなく。

男の鎧だった。

風の鎧と呼ばれたそれは既に紙切れ同然だつたと言つ他ないだろう。ソレほどまでに一瞬で風の鎧は粉々に碎かれ、ルイは男の体に纏つ

たアルマを全て粉々に切り裂いていた。

「嘘・・・・・だろ・・・・」

あまりの衝撃で間抜けた事を言つしか無かつた。

アルマ同士の戦いでアルマを倒すのは基本的にパワータイプでアルマを叩き潰すか、アルマの中の人間を殺すか、それとも爆発させるかの三つしかないはずだ。

それなのに。

パワータイプならば、彼女のスピードは絶対に出せない。つまり彼女はパワータイプではないほかの何かのはず。

それなのに彼女は、いとも容易く男の緑色の鎧を切り捨てた。

「完敗・・・・だな・・・・」

アルマのエネルギーが自分にファードバックして意識が遠のく。ドス、と鈍い音を立てて地面に男が倒れたのを確認すると、剣を粒子に戻してルイは静かに言つた

「私の道場で教えられた技よ」

一の太刀

裂き桜

「まさかアルマを使って使うといひ今まで強くなるとはいなかつたけれど思つて

とにかくも

「私の、勝ちよ」

## ルイの真価（後書き）

一つ名とか技名とかが多いのは、アルマがあるからです。彼らはイメージを叩きつけて色々と行うのではっきりとイメージしやすい名前があるとその分発動が早くなったりとする・・・らしいです。

## 小さな戦いは、大きな戦いへと

\*\*\*\*\*

日の国にルイガアルマを起動させ響き渡つたその音が、大野と峰の組のゴングにもなつた。

「悪いが俺は長引かせるつもりはねえ。一瞬で潰れてもらうぜ。三流」

何処から出したのか「一ヒーカップを右手に大野がそう言つと、まさにそれは一瞬としか言い様が無い戦いだつた。いや、戦闘と呼ぶにも怪しい。

何しろそれは、大野の一撃で終わつた。

「雑魚共は消えとけつて」

威勢よくアルマを開けようとした敵二人とは対照的に、やる気が無い大野は気付けば敵二人の背後に居て、その左手だけが茶色の妙なものに包まれていた。

「終わりだぜ」

コーヒー一滴こぼれてない、パーfectって奴だ。

大野がそう言つた瞬間。

敵二人のアルマが粉々に碎かれ、崩れ落ちた。

何が起きたんだ・・・?

理解が追いついていない様子の二人は、アルマが崩れた約2秒後。その体も崩れ落ちることとなつた。

「ハツハツハ、俺の実力。それなりだろ?」

大野のおちやらけた言葉を聞いて峰は頬を引きつらせた。

それなりどころか、私は恐らく一撃も加えられないであろう敵を、三秒と掛からず倒してしまったその実力は既に化け物と言つても差し支えないだろう。

そして峰は、今まで自分の周囲に居た人間たちがいかに人間離れしているかを、再び思い知らされたのだった。

・・・

なんだらうこの、ギャグ回が終わつたときのような脱力感。峰が人知れず思つていたが、まあ分からなくもない。

\* \* \* \*

W日本の国にて、有力者の戦闘が各所で勃発。この混乱に乗じて叩き潰すのが効率的かと

日本の国に住んでいる連合国の兵隊が連合国にそつ通信を送つた。

その連絡を聞いて、指をくわえる将官など何処にも居ないだろう。

「全軍、進撃」

日の国の周囲に駐在していた兵隊が、今いっせいに蠢いた。

\* \* \* \*

「いやに順調に進めると思つたら・・・罷・・・つことなのかな」体力がかなり減つてゐるモンキを抱えて、アキが嫌そうにため息を吐く。

その視線の中にあるのは、ただっぴろい校庭を埋め尽くすほどどの、

人、人、人、人。

「全員特異Sクラスの連中かしらね・・・」

「クリと、のどを鳴らして口が言つ。

その言葉を頷いて肯定すると、肩を貸しているモンキが蠢く。

「お前・・・馬鹿か？」

「口から血を吐き出すと、苦笑いを浮かべる。

「せっかく逃げたのに。逃がしてやれたのに・・・戻つてきやがつて」

「ばかだなあ。俺が救つてやりたかったのは口ヒルイだけじゃあない。俺の友人さ。その中にお前がいて、お前が危機に陥つたからここに来た。ただそれだけぞ」

ヘン、と鼻を鳴らしてそう言つアキを呆れたように見て、モンキは笑つて言つ。

「じゃあお前・・・この状況どう切り抜けるんだ・・・？」

そう言つて、モンキは周囲を見渡す。

彼等四人の周囲には何百という特異Sクラスの人間が蠢いていた。その全てがファーストか、セカンドで構成されている。とどのつまり、単純な戦闘において誰にも、アキは勝てないと言つ事だ。

となれば頼りになるのは口ヒルイと木下だが、さすがの口ヒルイでも生身でアルマ持ちに勝てる訳がない。

木下に関してはアルマの修繕がまだ終わってないらしく、彼女も同じだ。

ここはやつぱり俺が時間稼ぎをして

「私がやるに決まつてるじゃない」

いつもの自己犠牲精神を發揮しようとしたところで、彼の思考は聞

きなれた言葉に遮断される。

「え？」

自分が戦う、と明確な意思表示をした人物とは、茶髪のショートカットを揺らすココだった。

「私の羽を、見ていいなさい」

ニヤリ、と笑つてルイは何かをボソリと呟く。

次の瞬間。

まばゆい閃光が迸り、ココの太ももから足の裏にかけて黒色の装甲が巻きついていた。

流線型のそれは球体を思わせる。

「お前……」

「舜光壹式。これが私の、翼の名前よ」

得意気にそう言つて、ココは何処からともなく出現させた金属のマスクを口に当てる。

「ブーストアンロック。最初から最大出力で行くわよ」

ココがそう言つた瞬間に、ココの足の装甲がうなりを上げる。

薄い装甲の何処にそんな機能が、と思わなくも無いが、ココがアルマ乗りになつたという事実が先行して脳裏を占めていた。

「さあ、私の親友の友達を傷つけた野郎どもに、鉄槌を」

ココがそう言つた刹那、ガシュン、とマスクが口周り以外に、耳、首を保護するように一瞬で拡大する。

そして次の瞬間。

風が吹き荒れた。

ゴウツと視界が歪むほどの風圧を受けてからうじて吹き飛ぶのをこらえる。

やがて風圧が弱まり、視界がしっかりと晴れて周りを見渡すと、沢山の銃弾とミサイルに追われながらも、一瞬で100mあまりを直線状にアルマ使いたちを倒していく黒い光が視界に入る。

そうしてやつと、彼女のアルマの名前の由来が分かった。

彼女が通った後には、黒い光が残り、そこにあるのはただ力を抜かれた人間だけが横たえる。

その力量はまさに、圧倒的と言つべきものだった。

## 力不足故の

負けられない

負けたくない！

『ミサイルが背後上空5mから一十発来ます！』

またか・・・！

基本的にミサイルよりも多少速く走っているために特に気にする必要は無いが、前から来る機銃をかわすために上下左右に動いている事を考えれば、念のために落しておきたいが、今の口吻にそんな余裕は何処にも無かった。

「ハイ・・・ブースト・・・！」

ギリ、と奥歯をかみ締めてアルマのおかげで軽減されているとはいえる多大に掛かるGに供え、その言葉を発する。

次の瞬間。

世界から色が消え、模様が消え、視界は白く塗りつぶされる。その異様な加速が終わるがそれでもなお時速6000km超のスピードで走り回りながら周囲を見渡すと、今走ってきた場所一体が切り刻まれていた。

ソニックウェーブといえば、分かるだろうか。

つまり彼女は音速をとうに超えた戦いを繰り広げていた。

そして何か違和感を頭の隅に覚える。

何故かミサイルが追つてこない。

振り切ったか？

脳裏に浮かんだその仮説は、次の事実によつて打ち消される。

「よお」

彼女の独壇場のはずだったその戦場に、彼女と同等のスピードを持つ人間が現れた。

つまり攻撃がやんだのは、彼の戦いを邪魔しないように、こうこ

となのだろう。

そしてこれが意味するのはただ一つ。

実戦経験が圧倒的に少ないココの敗北の可能性が、急激な肥大化を見せたということだ。

その事実を把握した瞬間に、ココは空中へ跳んだ。

元来アルマに空中を飛ぶといった機能は搭載されていない。搭載されているとしても、小さなブースターで一時的なものだけだ。最新のアルマを使っていても飛べて10分程度。

それなのには、今の世の中では空を自由に飛べる戦闘機ではなくアルマが一番強いと言われているのか。

それはこの類稀な精神力と身体力をもつてして始めて使いこなせるスピードタイプのおかげだ。

彼らは予備動作無しで自身の体の動きを激変させる事が可能。

つまり彼らは速度0から、体の一部程度の大きさならば一瞬で時速10000kmを越える速度まで引き上げる事が出来る。

それを上手く利用すれば、空中に”壁”を作る事ができる。

つまり、擬似的な飛行。

しかしそれはやはり熟練の技が必要だった。

とどのつまり、ココには出来ないが、特異Sクラスのこの男には出来るという事。

苦し紛れにココが空中に飛んだのは正解だったのかもしれない。

実際跳んでいなければ、その場は特異Sクラスの男によって周囲50mが一瞬で切り裂くその攻撃に巻き込まれていた。

しかし、最良の策が生き残るという事実につながるとは限らない。

跳んだココに追随するようにして地面を蹴った男はその熟練の腕をみせた。

先ほど説明した空中に”壁”を作る技術を駆使して、ただ空に飛び上がるよりも何倍も早く、ココがたどり着く空中の頂点に到達。

そして、空中から真下に向けて何の変哲も無い石を一つ浮かばせる

と、思い切り拳を叩き付けた。

否、正確にはその直前で拳を止めていた。

音速を超えた速度で拳を突き出した。

それが起こした現象は、拳の前の空気の圧縮。

そして一瞬で圧縮された空気は広がり、爆発し、石を押し出す。その石の速度は、空気摩擦で石が燃え上がるほどのものだった。

ギュイイイイイイイイ

空気を切り裂きながら迫るその石は、ココの右肩を貫いた。

「ぐつ・・・・」

\* \* \* \*

「あいつこは、翼は無かつたな」

男が外殻の上で、隣で座つて校庭での死闘を観戦しているヘルディアに言った。

一瞬ヘルディアは何のレスポンスも返さなかつたが、ふと囁つて答えた。

「そんなことはないよ、彼女に無かつたのは翼じゃないんだ。アルマという翼があり、空という舞台がある。無かつたのは飛ばうといつ”意思”や。彼女を地面に縛り付けていたのは他でもないそれや。言つていたはずだよ」

私は彼女たちに、翼をあげたんだ。

さあ飛びなさい。

燕のよつこ、風を切り裂いて

\*\*\*\*\*

「おいなんだよそれは！背中のそれはなんなんだ！答えろよ！」

目の前で起きた不可解な現実に男は絶叫する。  
石で肩を貫き、体の動きが止まつたところで空氣を足場にしたブーストをかけて必殺の突き。

これが、彼の必勝パターンだった。

しかし、今回ばかりはそうは行かなかつた。  
胸を貫くはずだったその直刀はむなしく地面を突き刺すだけに終わつた。

何故か

それの答えは男の目の前にある。

「わたしは負けたくない・・・いえ、勝ちたいの。あいつに。だからそれまでは・・・死ねない」

決心をこめた視線を持つた口の体には、変化があつた。  
右腕全体を覆う黒い装甲。

左のひじから先を覆う黒い装甲。

そして極めつけは男が絶叫した対象であるモノ。

背中に浮くソレは

紛れも無く、翼だつた。

「舜光改め、燕 起動完了」

「 覚悟して」

その呑きが男に届くのと同時に、口の右腕は男の胸へと納まつて  
いた。

「殺し殺されが嫌だ、なんてことはもう・・・言つてられないのか  
もしけないわね。私はあくまでもこの道を、進むわ」

ズ、と男の胸から腕を引き抜き、アキ達のところへと跳ぶ。

「お待たせ。アンタに戦わせるだけじゃ、駄目よね。」

ココは覚悟する。

その覚悟が、アキの心を深く抉ると思いませずに。  
しかし当人の決意は他人がどうこうと言えるものでは到底無い。  
それを知っているからこそ、アキは何を言つでもなく、ただおしだ  
まる他無かつた。

## 刺す力、ティリア推参

「進軍中止?」

何故、と連合軍の軍士官が疑問に思うが、その問い合わせを口にすることなく答えが耳に飛び込んでくる。

「連合の首長の一人が、人質に取られた」  
総隊長の口から驚くべき言葉が発せられた。

\*\*\*\*\*

ルイも、ココも勝ちはしたが、圧勝したというわけでは、無い。

そのために、二人ともが既に体力を消費しきっていた。

ルイが合流して戦力がおよそ二倍になつたものの、特異Sクラスの人間全員を相手にして勝てる訳がない。

それを、敵よりも自分たちが知っていた。

「ここまで・・・で、終われないのに」

ギリ、とその場に居る全員が奥歯をかみ締め、鈍い音を立てる。  
そしてその音を皮切りに、特異Sクラスの人間がいっせいに五人に飛び掛る。

一番最初に五人の場所に到達したスピードクラスの人間が手に持つていた剣を振り下ろしたその瞬間。

血が、飛び散る。

しかしその血は仲間のものではなく、刀を振り上げた男の血である。

「上出来だ」

影になつてよくは見えないが、そこに居るのは確かに、自分は助けないぞ、と言つた張本人だつた。

「拾い上げてまた飛ばせてやるほど親切じゃねエが・・・飛んだ小鳥のために天敵を排除するぐらいは・・・してやるよ

「・・・・真打、登場だ」

\*\*\*\*\*

「・・・まさか、アンタがここに居るとは思わなかつたわ」  
獵奇的な笑みを浮かべて目の前に居る男性を見据える。

突然降り立つたその少女を見てあつけに取られていた男性も、しばらくして我を取り戻して答える。

「・・・久しぶりだな、ティリア」

落ち着いた重低音の効いたその声は心を落ち着かせる作用があるのか、昂ぶつたティリアの精神を若干落ち着かせる。

「久しぶり、と挨拶するような間柄じゃないでしょう、私達は」  
キシ、と口端をゆがめ、男に言つと、男は困ったように顔をしかめる。

しかしその表情は、次の瞬間に凍りつく。

「早速、死んで」

唐突に、前口上もへつたくれもなく始まつた戦闘。

ティリアの台詞が届くよりもはやく、ワールドランク十八位の実力者、飯嶋 国都の右腕が小さく切り裂かれていた。

「何を言つてもなく襲い掛かるとは、相も変わらず卑怯じやないか」

飯嶋がそう言つと、少し離れたところに立つティリアは嗤つて答える。

「何を言つてるの?私はしつかり攻撃の前に口にしたわよ?『早速、死んで』って。何?忘れたの?私の、速さ」

ティリアの台詞を聞いて、飯嶋は改めて目の前の人物の底知れない恐ろしさを肝に刻み付ける。

「神速のティリア、その名は健在か」

「クリと生睡を飲み込み飯島が言つて、ティリアは言い返す。

「アンタは鈍つたもんだね、国都。今の一撃をかわせないなんて恥の上塗りをしているようなものよ?」

「あの日お前を裏切つてから俺には恥しかないわ。もうこれ以上増えたところでどうということはない」

明らかなティリアの挑発をひらりとかわす飯島に、思わず歯噛みする。

「戦う意思はあるのかしら?」

ティリアのその言葉に、飯島は首を横に振る。

「やう」「..

あの日のアンタはもう、居ないのね。

じゃあもひ。いいわ。

「死んで」

ドン!と周囲のものを吹き飛ばして真っ直ぐに、しかし音速をはるかに超えた速度の突きを飯島に繰り出す。

のど元を正確に狙つたその攻撃は綺麗に決まるかと思われたが、のどに剣先が刺さる直前で、剣はその動きを静止させられる。

「鈍つた・・・ね、前言撤回するわ。あんた・・・強くなつたわね?

冷や汗をかいだ言つてティリアの台詞に、今度は飯島が笑つて答える。

「戦うつもりはないけれど・・・死ぬつもりも無いんだ」

グ、と剣を押し返され40m程後ろへ跳ぶと、ティリアは苦笑いを浮かべて飯島を見据える。

「じゃあ、私がアンタを殺すといつたら?」

「そうだね・・・いくら旧知の仲の君でも、戦わざるを得ないね」

「優先順位は生き残る事・・・ね。いいじゃない潔くないアンタらしいわ!」

ティリアはそう言つて、突然地面を右足で踏みしめる。

ザク、と土が抉れる。

何をするか、分かる?

心の中で、飯嶋に問うが、もちろんその答えは返つてこない。でもいいわ。

私はあいつを殺さないといけない。そうじゃないとあいつがあんな目にあつてまで戦つた理由が消えてしまうもの。

親友で、級友だった。

けれども私はそれを断ち切つて、アンタを殺す。

「神光、発動」

彼女がそう口にした瞬間に、両の拳と両足と肩に付いた紅い装甲が眩い光を放つ。

神光。

神速のティリアという異名が付く所以たる業である。いかに速度に優れたスピードタイプのアルマ使いでも彼女に追いつく事はおろか、姿を追うことすら間々ならない。

彼らですら、彼女の移動は瞬間移動だと思わせるほどに、速い

「本気で、行くわよ」

彼女はこの戦いで、四つ目の最を頂くことになる。

最速、ティリア

彼女の初動はあまりにも速すぎるために、音すら追いつけない。一瞬ではねのけられた空気の壁が周囲一体の家という家、建物とう建物を破壊しながら突き進む。

攻撃の副産物であるソレすら、敵の命を脅かす。

0・1秒掛かつたか掛からないかと言つたレベルの速度で飯嶋に詰め寄ると、神速の突きを再びのどめがけて繰り出す。いかに突いてくる場所が分からうが、その衝撃を受け止められなければ意味が無い。

通常の人間ならば突きの勢いを殺しきれずにティリアの刃を受けた自分の刀もろとも自らの首を引き裂いてしまう。

しかし、目の前の人間は全世界三兆人のうちの上二割の実力を持つ人間だ。

ギリ、と金属と金属が触れ合う音がした次の瞬間に、ティリアは空気の壁を一回蹴り一瞬で国都の後ろへと回る。そして右手に持っていた剣とは違う剣を腰から引き抜いて左手で背中を切り上げる。

これを見極められる人間は居ない

そのはず、だつた。

しかし彼女の剣の先には、国都のもう一本の剣が立ちふさがった。が、彼女もそんな事で心が挫けるほど弱いわけではない。

切り上げた左の剣をそのまま振り上げて飯島を吹き飛ばすと、飯島は建物という建物、障害という障害を全て破壊し、外殻へと衝突した。

その距離、およそ800m

壁に衝突し、一秒ほど飯島が動かないのを見ると静かにティリアは腰をわずかに下げ、左手の剣を腰に刺して右手に持っていた剣を両手に持つ。

「神速の突きと、絶対の盾、どちらが勝つかしらね」

かつて彼は全てを守るといわれた絶対守護神。  
その盾を破れるだろうか。

「破つて、みせるわ」

小さく呟いたその声は、彼に届く前に焼き消える。  
そして、次の瞬間。

「神速、一ノ突・・・穿孔」

空気摩擦で周辺が燃えるほどの速度を持つて突き出された剣は、結果的にどちらの勝ちともいえないというところで終結した。

突きを切ることで受け止めた飯島の剣と、ティリアの剣は同時に砕け、ティリアの背後でうなりをあげていた風の刃という副産物は、外殻に深く切り跡を残すという結果に終わった。

ぱらぱらと崩れしていく剣をみて何を思ったのか、ティリアはアルマを解いた。

「まったく、アンタに戦つ気が無い」とひのきの調子が狂うわ。何があるのか知らないけど、しっかりと戦えるようになつたら、また来るわ」

そういつてティリアはひらひらと手を振りながらその場を去っていく。

その姿を見て飯嶋は思わず安堵のため息を吐く。

「助かった……」

## 真打の実力

「ここいら辺で、お前等に俺の強さを見せておいてやるよ」  
ヤイナはそう言つと、右手をパッと大きく開き、何かをぶつぶつと  
呴いた刹那、ヤイナの前方にある校庭全てが眩い光を放つて爆発し  
た。

鼓膜が破けるかと思うほどの爆音は、聴覚以外にも、視覚と触覚に  
多大なダメージを追わせた。

攻撃対象でない自分たちですら、ここまでダメージが出るのだから  
攻撃対象となつた人間たちはひとたまりも無いだろう。  
案の定、光が晴れて視界がはつきりして周囲を見渡すと、爆発した  
前方以外の特異Sクラスもふくめ、校庭を埋め尽くしていた人間全  
てが地に伏していた。

「ワールドランク三桁以下の連中なソザ、話にもならねェな」  
ぐしごしと頭をかいしているヤイナに、いつの間にか現れた大野と峰  
が苦笑して頷きかける。

「ま、でもここにはそれだけじゃあ無いみたいだぜ」  
大野の言葉に、何かに気付いたらしいヤイナは頷く。  
「奴さん、それなりに強そうじやねえか」

両の手を腰に当てているヤイナの視線の先には、ワールドランク1  
0位。

世間で言う化け物と呼ばれるレベルの人間が一人、立っていた。  
「初にお目にかかる」

芝居がかつた仕草と語調のその男は、堂々と名乗りを上げた。

「ワールドランク10位、月橋だ。覚えなくても良いぞ、今からお  
前は……死ぬのだから」

大見得を切つたその男の言葉を聞いて、ヤイナはこみ上げる笑いを  
必死でかみ殺す。

そしてやつとの思いで心を冷静にすると、ゆっくりと口を開く。

「ワールドランク零位、ヤイナフレイニアだ。覚えとけよ、俺はお前なんぞを殺す気はねえからな。ド三流」

殺し殺されという命のやり取りをする覚悟を持つた人間に對し、お前など殺す価値も無い、というのはかなりの侮辱であると知つての、わざわざの台詞選びだった。

しかし相手も三兆の人間のうちの一つまみの中の人間である。この程度の挑発に乗るわけが無い。

「……ふん、古びた伝説が、粹がるなよ」

鼻で笑う男に、売り言葉に買い言葉の要領でヤイナが答える。

「ハン、下の毛も生えてねエよオな奴が粹がるなよ。ケツのモウコハンが青く光つてるぜ？」

ここまで言われて怒らない人間なんぞそれほど居るわけでもない。目の前の男も、その例外ではなかつた。

「調子に乗るなよ・・・日高の殺戮者」

「調子に乗らせてもらひつづけ、雑魚」

二人がそう言つた瞬間に、その場の空気が凍る。

これはある程度の強さを持つた一人が対峙したときにのみ起こる現象とでも言おうか。

これはスポーツにおいても通じるだろつ。

有力者対有力者の戦いは、観戦者をも飲み込み、緊張させる。

「お前たちは逃げろ」

唯一雰囲気に呑まれなかつた大野が、峰達に告げる。

私も?と聞きたそうな顔をしている峰を見て、大野は答える。

「残念だけどな、峰。まだお前は、この戦いを觀れるほど近くに立つていられるほどの実力はないぜ」

大野のその言葉に、しぶしぶと峰達は引き下がる。

峰達が居なくなつた事を確認すると、大野が言つた。

「良いぜ、後は任せろ」

その言葉を聞いて、口端を吊り上げてヤイナが答える。

「ハン、ド派手にぶち上げてやるよ

汚ねえ花火をな

＊＊＊＊

月橋がアルマを展開する。

両の腕をすっぽりと覆う装甲に、下腹部から下を全て覆う装甲。胴体は、心臓を守るように当てられた最小限の装甲しかない。

「貴様は、ウイザードだつたな。面妖な」

月橋が嫌そうにそう言つのをみて、ヤイナは笑つ。

「良かつたな、10人と居ないウイザードの頂点である人間に、生きているうちに出会えてよ」

ヤイナのその言葉をきっかけに、戦闘が始まった。

月橋が右腕を前に突き出すと、その手首の部分の装甲がガシュン、と音を立てて展開する。

すつきりとした流線型の装甲が展開して何が出てくるのかと思えば、筒状にかたどられたミサイル発射装置だつた。

そこに挿入されていたミサイル。およそ20発がいっせいに発射される。

先ほどのココのスピードまでとはいひながら、そこそこにスピードの出ていたミサイルだつたが、その全てがヤイナから1mほど手前で静止する。

そして約2秒後、すさまじい爆音と爆風を持つてミサイルが一斉に爆発する。

もうもうと立ち込める爆煙のなか、ヤイナは依然ポケットの中に手を突っ込んだまま立つていた。

「この程度か、ワールドランク10位

ボソリとそう呟くと、ヤイナの右目から一筋の閃光が放たれる。ヒュ、と風を切った音がしたかとおもえば、ヤイナの周囲に漂う爆煙を吹き飛ばしてその閃光は真っ直ぐに月橋へと襲い掛かる。

爆煙から突然出てきたその閃光をかろうじてかわすと、閃光は後ろ

にある学校の壙へとぶつかり、盛大な爆発を巻き起こした。

あんなものをこの一瞬で発射するとは。

改めてあいての規格外性を思い知る。

それならば、こちらも規格外で応答しようぢやないか。

月橋は心中でそう決心すると、下半身に付いていた小さな短刀を両手で一本ずつ引き抜く。

アルマでの戦いにおいて、銃弾やミサイルといづのはすでに時代遅れとも言える。

銃弾は遅すぎるし、現時代の追尾製の異常に高いミサイルも、敵にくつついたまま自分に襲い掛かるといづのはよくある話だ。つまり。

時代の武器は再び刀や槍へと回帰する。

一本の光り輝く光剣と呼ぶべき小さな短刀を手に持ち構えると、爆煙が晴れたにもかかわらずポケットにてを突っ込んだまま立つているヤイナを見据え、攻撃をするために肉薄の一歩を踏み出す。

まず、左へ踏み出すと見せかけて3mほど手前で右へ瞬時に移動。そして、左手に持った光剣を斜めに切り上げてヤイナの命を刈り取る

はずだった。

襲い来る光剣を10cmほど体をずらすだけでかわしたヤイナは、体を捻つて月橋の腹部へけりを入れる。

もちろん、装甲で覆われていらない部分を、だ。

メゴツと骨がきしむ音を響かせて吹き飛んだ月橋が地面をバウンドしながらやつとの事で到着したのが校庭の壁だった。

パラパラと振つてくる壁のかけらを払う余地もなくその場につづくまっている月橋へと一瞬で肉薄し、ポケットに手を突っ込んだまことに右足を蹴り上げる。

アルマを使つてもせいぜい壁が粉々に砕けるだけ、だろうがヤイナの場合は扇状に3mほどの空間が爆発したように抉れた。

しかし抉れたのは月橋のわずか10cmほど横の壁から先であって、月橋の顔面は無事とはいえないまでも、生きるには足りるほどに保

たれていた。

「これが、最強だ」

ヤイナがぼそりと呟くように言葉を放つと、ドスン、と後ろで何者かが着地する音が響く。

着地した、その、人物とは。

「否定者たるもののが、最強を名乗つて良いのかい？」

日の国<sup>ヒーロー</sup>で英雄と名高い人物だつた。

そして彼は英雄であると同時に、ヤイナの戦友でもある。

「久しぶり・・・だな」

ボソリとヤイナが呟いた言葉を耳<sup>アザ</sup>とく拾つた英雄は聞き返す。

「なにが、だい？」

「お前のきたねえ面を見んのが、だ」

「　　その憎まれ口を聞くのも・・・久しぶり、だね」

「ンで？お前は何をしに出てきたんだ？一人が不當に道具にされるのを見逃した・・・いや、見過<sup>ミス</sup>こしたヒーローよオ」

「前半の質問の問い合わせとしては　　そうだね。君が今手に握っているその命は君にとつてはちっぽけなものかも知らないけれど、この国にとつてはとても重大な、物なんだ」

「後半は答えるほどのものでもない　　か。吐き気がするぜ、ヒーロー・・・いや、元ヒーローか？」

「ああ、元ヒーローでかまわぬよ、本物の元ヒーロー」

「なンだ、紛い物だつていう自覚はあるンだな、お前」

「全てを助けるのがヒーローだからね。それをするには僕はあまりにも弱すぎた」

「ウイザードのときから変わらねエな」

「それが僕の生き方であり、芯であり、曲げようの無い柱であり、紛い物なりの英雄道、なんでね」

「残念ながら、お前が歩んでるそれは英雄道でもなんでも無いぜ、お前のソレはただの偽善者の自己満足で塗り固められた汚ねえ溝だぜ。道ですら、ねエ」

どちらも構えるでもなくただ、立しぐくして過去をゆっくりと思い出すように会話をしているさまは、ぼこぼこに、ズタズタになつた周囲とはあまりにかけ離れていた。

「ソレと言つておぐが、本物のヒーローは俺じゃあねエゼ、本物のヒーローってのはな」

逆境でも絶望のふちでも諦めねえ、あいつみてエな暑苦しい奴を、言つンだよ。

彼等のその会話を最後に・・・正確にはヤイナのある人物を認める発言を最後にして、後に第五戦線と呼ばれる日の国での大規模戦闘は終わりを告げる。

この戦闘で日の国の半分の住宅が焼け、破壊された。  
そして後に日の国の上層部にあげられた報告より抜粋。

被害世帯。

三十五万世帯。

けが

軽症七十五万人

重症、零人

死者

零人

何故、ヤイナの登場が遅れたのかという問い合わせが、被害人数、特に死者において如実に現れた。

彼は自分のことを英雄ではないといったが、こと日の国の市民にして言えば、彼は確実に英雄だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2661x/>

---

Blue Sky

2011年11月26日17時54分発行